

---

# 機動戦士ガンダムSEED Z

sibugaki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED Z

### 【Nコード】

N8144Q

### 【作者名】

sibugaki

### 【あらすじ】

コズミックイラと呼ばれた時代で戦っていた少年「シン・アスカ」は敗北し、月面に不時着していた。だが、その時彼を謎の転移が襲い、やってきたのはなんと「マジンガーZ」の世界であった。モビルスーツとスーパーロボットの異色コラボです。

追伸：作者は余りガンダムに詳しくないので半ばオリジナルが入るかも知れません。

第1話 敗北、そして・・・（前書き）

書きたくなつたので書いてみました

## 第1話 敗北、そして・・・

コズミックイラと呼ばれた時代

人々は二つに別れて激しく争っていた

遺伝子操作を行い常人以上の力を得た人類「コーディネイター」

自然に生まれた「ナチュラル」との激しい戦いである

今、その戦いは終局を向かえようとしていた

そして、此処メサイアに位置する月付近では一機のロボットが不時着していた

両腕を失い機体各所もボロボロになっており稼動するかどうかすら怪しい状態であった

機体の名前は「デステイニーガンダム」

コーディネイターが指揮する部隊「ザフト」の主力であったロボットである

因みにこの世界はロボットを「モビルスーツ」と呼んでいる

そして、今回の話はこのモビルスーツを操っていた少年を中心に行っていく事になる

「俺・・・負けたのか」

デステイニーガンダムに乗っていた少年は呟いていた

赤いノーマルスーツを身に纏っており顔全ては見えないが赤い瞳をした少年であった

彼の名は「シン・アスカ」彼もまたコーディネイターである

数年前に戦争で家族を失い今はこうしてザフトの兵士であったが、彼は負けたのだ

しかし、今の彼の中には敗北に対する悔しさは無かった

彼は目の前を飛行する赤いモビルスーツを見た

人間に似た目を持ち二本のアンテナを生やしたモビルスーツは「イ

ンフイニットジャステイス」であり、シンを倒したモビルスーツである

「アスラン・・・あいつも俺と同じように苦しんだんだな」

シンはジャステイスに乗っているであろう青年の名前を呟いた  
名を「アスラン・ザラ」彼もまたコーディネイターである

しかし今のザフトのやり方ではいけないと感じ戦いを挑んでいたのだ  
そして、彼はシンに言った

自分もかつては同じ思いで戦っていた事を

そして、自分もまた戦争で家族を失った事を

それをシンは何度も頭の中で繰り返した

すると不思議と瞳から涙が溢れ出てきた

俺は何をやっていたんだろうか

取り返しのつかない事をしてしまったのだろうか

そんな思いが彼の中を支配していた

そんな時であった、突如彼の前をブラックホールにも似た物が現れ

たのだ

「な！こんな時に」

シンはそれから逃れようと必死に操縦桿を動かす  
だが、機体はそれに反して微動だにしない

「くそお！死んで溜まるか！」

シンは叫んだ

だが、無駄であった

今から機体を捨てて逃げての間にも間に合わない  
最早流に身を任せるしかなかった

祈る思いでシンは目を瞑り操縦桿を強く握った  
そのまま機体は謎のブラックホールに吸い込まれていきそして機体  
を吸い込むとそのブラックホールは消え去ってしまった

\*\*\*

意識を失っていたシンに強い光が襲った  
それを浴びて視界の眩しさを感じたシンが視界を手で覆いながら目  
を覚ます

「こ……此処は？」

目覚めたシンは回りを見回した  
其処には信じられない光景があった  
辺り一面人が住んでいそうなビルなどあったのだ  
しかも今機体が置かれた地点には大きな木々があった  
宇宙では有り得ない光景である  
では、此処はコロニーなのだろうか  
否、それも違っていた  
何故なら彼の頭上には眩しく輝く太陽があったのだ  
コロニーではまずお目にかかれない物である  
となれば彼の中にある答えは一つであった

「俺……地球に来たのか？」

そう思えたのだ

だが、それでも腑に落ちない点が多かった

何処か町が古臭いのだ

シンの居た地球とは違い町を歩く人々も車も、建物も、全てが何処か古臭い感じがしたのだ

まるで、自分が生まれる前に既に終わった時代・・・言うなれば「西暦」を思わせた

「とにかく、これじゃ埒があかないな」

何はともあれ今は情報が欲しかった

此処は何処なのか？そして何故自分が地球に来てしまったのか

それを調べる必要があつたのだ

だが、その時であつた

突如町の人々が慌しく走り出した

まるで何かから逃げるようであつた

「何だ？」

シンは疑問に思い人々が逃げる方向とは逆の方を見た

其処に居た者を見た時シンは目を大きく見開いた

其処には二体のロボットが居たのだ

だが、その形状は信じられない物であつた

一つは頭に二本の巨大な鎌をつけておりドク口を思わせる顔をしたロボットであり

もう一体は二本の長い首を持ったロボットであつた  
そのロボット達が町を破壊しながら歩いていたので  
そしてそれより少し上にはもっと驚くべき物がいた

「な、何だよあれ？」

其処には小さな円盤状の乗り物に乗った半分男で半分女の化け物が杖を片手に叫んでいたのだ

此処ではなんと叫んでいるのかは分からないが明らかにあいつがあの二体の怪物を操っているのは理解出来た  
すると、男女がこちらを見つける

「ちっ、見つかったか」

思わず舌打ちをする

今のデステイニーにはPS装甲は施されて居ない  
グレーの機体色であった

今のデステイニーで攻撃を受けたら一溜まりもない

何より今のデステイニーには武器がないのだ

それにエネルギーもない

逃げる事も戦う事も出来ない状態であった

万事休すか

そう思えた時であった

「待ちやがれえ！」

突如背後から声が響いた

シンは驚き後ろを振り返った

其処にはまた一体のロボットが居た

黒を基調とした機体色に太い腕、赤い胸の放熱板

二本の黄色いめと角を生やし口には奇妙な縦溝が刻まれていた  
そして何より驚かされたのは、そのロボットは丸腰だったのだ

「ば、馬鹿かアイツは！丸腰で戦えるかよ！」

シンの率直な感想であった

見るからにあのロボットには武装は施されているとは思えない  
モビルスーツの戦いに置いて丸腰で行くのは死に行くのと同じで  
ある

しかも、そのロボットのコクピットは頭部にあるのだ  
風防ガラスからパイロットと思われる者が見えた

コクピットを剥き出しで行くなど考えられない事である  
だが、不思議とあのロボットがとても頼もしく見えた  
何故だろう

それは自分でも分からなかった  
するとロボットがゆっくりと二体のロボットの下へ歩み寄っていく

「やいやいやい、あしゅら男爵！これ以上の悪行はこの兜甲児様と  
マジンガーZが許さねえぜ！」

「マジンガーZ！それがあのロボットの名前なのか？」

シンは呟いた

聞いた事の無い名前である

そんな名前のモビルスーツが地球にあるなど聞いた事も無ければ資  
料も見た事がない

しかも、そのロボットはモビルスーツとは違って見えた  
すると、マジンガーZが動けないデステイニーを見た

「ん？何だこのボロツちいロボットは？」

「おい、あんた地球連合の兵士なのか？」

「はあ？地球連合？なんだそれ？」

甲児と名乗った少年は首を傾げた

何だ？地球に住んでるのに連合を知らないのか？

そう思えたのだ

「じゃあ、あなたのそれは何時作られたモビルスーツなんだ？」

「も・・・もびる・・・何だ？」

「だから、モビルスーツ・・・」

シンが続きを言おうとした時、それを爆音が妨げた前に居た二体の怪物がミサイルを放ってきたのだ信じられない光景であった

これ程の威力を誇るミサイルを搭載出来るモビルスーツが居る筈がないのだ

「おっと、お喋りは此処までだな、ちょっと待っててくれよ。すぐに片付けてくるからよ」

「待てよ！武器も無いのに勝てる訳ないだろ？」

「おいおい、俺とマジンガーは無敵だぜ！ま、其処で見てるよ」

シンの心配を他所に甲児はグツと親指を立ててそう言ったそして勇ましく二体の怪ロボットに向かっていくすると突如鎌を頭につけたロボットがそれを手に持ち替えて襲い掛かってきたのだ

鎌がマジンガーに振り下ろされる

だが、それは音を立てて砕け散った

衝撃であった

このデステイニーに搭載されているPS装甲でさえ物理攻撃を防ぐ事は出来てもあのように破壊する事は出来ないのだしかもあのロボットにはPS装甲は施されているとは思えない

「お返しだ！」

甲児が叫びマジンガーの拳が突き出された  
その拳を食らったドクロの怪物は頭部がグシャグシャにされてその  
まま後ろに下がった

「トドメだ！ロケットペアアンチ」

すると突き出した腕が肘の辺りからジェット噴射を上げて物凄いス  
ピードで飛び出したのだ

「な、なんじゃありゃあああああああ！」

あれにはシンも驚かされるばかりであった  
あんな原始的で非現実的な武装などコーデイネイターでも作れない  
代物である

何よりそれで腕が落とされたらお仕舞いなのだ  
しかしその腕は怪ロボットの胴体を吹き飛ばす  
風穴を開けられた怪ロボットはそのまま仰向けに倒れて爆発した  
今度は二つ首の怪ロボットを見た

怪ロボットは突如首からレーザーを放った  
不味い！

モビルスーツの戦いでビーム攻撃は注意すべき武器なのだ  
と言うのもPS装甲はビームは防げないのだ

避けなければ直撃を食らう  
だが、それも稀有に終わった  
なんと、マジンガーはそのビームを真つ向から受けてもビクともし  
ないのだ

どんな装甲をすればあんな芸当が出来ると言うのだろうか  
そう思えた矢先であった

「てめえにはこいつをお見舞いしてやるぜ！光子カビイイイイム！

「!!」

お返しにとマジンガーの目から黄色い閃光が飛び出した  
その閃光は怪ロボットの首を切断しそのまま機体を真っ二つに切り  
裂いてしまったのだ

かなりの出力が無ければ出来ない光景である

それを見ていた男女は悔しそうな顔で逃げ去って行った

それに甲児がマジンガーごと啖呵を切るとゆっくりとこちらに歩み  
寄ってきた

「へへ、どうでえ。俺とマジンガーの強さはよお」

「信じられねえよ。そんなモビルスーツが地上にあったなんてな」

「おいおい、さっきから訳わかんねえ事言ってるじゃねえよ。マジ  
ンガーはそのもびるなんちゃらじゃなくてスーパーロボットだぜ」

「スーパー・・・ロボット?」

シンが呟いた

その時であった

「甲児くううん!」

今度は女性の声が響いた

見ると其処には赤いロボットがいた

しかもそのロボットは女性を思わせる外見であったのだ  
それを作った物の思考が疑われる物であった

「甲児くん、機械獣は?」

「へん、あんな奴等俺が叩き潰してやったぜ」

女性の言葉に甲児が鼻を摩って自信を持ってそう言った

そしてそのロボットは今度はデステイニーを見た

「ねえ、このロボット何？」

「さあ、俺にもさっぱり分からないんだよ。言ってる事もチンプンカンプンだし」

女性の言葉に甲児が手を上げてお手上げのポーズを見せた  
すると女性がこちらを見た

「ねえ、そのロボットは何処で作られたの？貴方は誰？」

「そんなの言える訳ないだろ」

女性の言葉にシンは突っ返すように言った  
当然である

軍の機密をそう簡単に民間人に教えられる訳がないのだ

「何だよ、態度悪いなあ」

「五月蠅い、まずはこっちの質問に答えろ！」

不満そうな顔をする甲児にシンは怒鳴った  
それを聞いた甲児の額に青筋が浮ぶ

「なんだよ！折角助けてやったのにそんな言い方はねえだろうが！」

「五月蠅い、ナチュラルの分際で」

「な・・・ナチュラル？」

「要するに馬鹿って事じゃないの？」

「なんだとこのヤロオオオオオオオ！」

女性の言葉に完全に切れた甲児がパイルダーから飛び降りてデステイニーの上に降りてきた

「出て来い！てめえのその捻じ曲がった根性叩き直してやる！」  
「上等だ！」

シンもコクピットから出てきた  
そしてヘルメットを外してお互い拳を硬く握り締めて殴りかかった  
お互いの拳はお互いの顔面に当たった  
だが、

グラァ

倒れたのはシンであった

甲児はと言うと少し鼻血が出た程度であった  
化け物であった

とてもナチユラルの拳とは思えない威力であった  
シンはそれを諸に浴びて気を失ってしまったのだ  
そんなシンを見下ろして甲児は言う

「何だコイツ？随分な物言いの癖に弱いなあ」

薄れ行く意識の中でシンは思った

此処・・・間違いなく俺の居た世界じゃない・・・と

第1話 敗北、そして・・・（後書き）

更新は恐らく不定期だと思われます

第2話 新しい世界、新しい生活、新しい仲間（前書き）

いきなり甲児と殴りあって気絶したシン  
そして彼は？

## 第2話 新しい世界、新しい生活、新しい仲間

視界が一気に真っ暗になった

居るのは自分一人であつた

ああ、そうか・・・俺、死んだんだな

ハッキリとしない意識の中でシンは悟つた

考えてみればおかしな話であつた

突然ブラックホールのような物に巻き込まれて気がつけば地球に居るし、しかも目の前には見た事のない巨大なロボットが丸腰で戦っているし、そのパイロットと殴り合ったら自分が一撃でのされる始末である

そうだ・・・これはきつと死ぬ前に見た夢なのだろう

そうシンは思った

そうだと分かればもう何も恐れる物はない

後はこうして目を閉じてゆっくりと待てば良い

きつとあの世には家族や仲間達が居るはずだ

少しだが楽しみになつてきた

早く会いたいな

父さん・・・母さん・・・マユ・・・それから

『・・・シン』

ん？何だ？

『・・・シン』

誰だ？俺を呼ぶのは？

『俺だよ・・・兜甲児だよ』

そう言つて現れたのは自分の何倍もの大きさを持った兜甲児であつた  
しかもかなり怖い顔になつてゐる

「うわあああああああああああああ！」

\*\*\*

「どわあああああ！」

目覚めると其処は白いベットの上であつた  
何時の間にか自分は此処に寝かされていたようである  
どうやら自分は生きていたようだ

「こ……此処は何処だ？」

「よう、目が覚めたか？」

「ん？」

声が出た方を振り向いた

すると其処には先ほど夢に出てきた男「兜甲児」が居た

「うわああああああ！」

「うおっ！なんだよいきなり？」

甲児は驚いた  
そりゃ驚くだろう

いきなり自分を見た途端大声を上げてベットから転げ落ちるのだから

「ななな何でお前が此処に居るんだよ！」

「何でつて・・・此処まで俺が運んできたんだぜ。お前を」

「へ？つてか・・・此処・・・何処？」

この時、シンは初めて此処が自分の知らない場所だと気づいた

場所的には医務室だとは分かったのだが、その設備が明らかに元居た世界よりも良い設備を使用していたのだ

まるで近未来のようである

すると甲児が口を開いた

「何処つて・・・お前、光子力研究所を知らないのか？」

「光子力研究所？何だそれ？」

シンは首を傾げた

聞いた事が無い言葉であった

そもそもそんな施設が地球にあった事事態初耳だ

もしそれを知っていればザフトが放つて置く筈がない

嫌、ザフトだけじゃない、あのロゴスでさえきつとこの研究所を狙う筈である

「なあ、此処つて何時出来たんだ？」

「ん？そうだなあ・・・そんなに古くないぜ。何しろ俺のお爺ちゃん  
んが作った研究所だからな」

「お前のお爺ちゃん？」

「ああ、兜十蔵つて言つてな。此処富士山麓の地下にある「ジャパ  
ニウム」を見つけて「超合金Z」と「光子力」を作った人なんだぜ」

甲児は自分の事のように胸を張る  
だが、シンにはチンプンカンプンであった  
富士山麓にジャパニウム？

超合金Z？

光子力？

聞いたことの無いフレーズであった

「なあ、それじゃさっきのあのマジンガーZってのも・・・もしかして」

「そうだが、マジンガーZの装甲には超合金Zを使っててエネルギーは光子力エネルギーを使ってるんだ」

「それって、どれ位凄いんだ？」

「うーん、良く分かんねえんだよなあ・・・俺もあんまり詳しくないしよお」

甲児は首を捻った

それにじれったさを感じるが分からないのなら仕方ないと諦めるしかない

だが、確認の方法なら他にある

「それじゃ、固定砲台とか戦艦の主砲とかには耐えられるのか？」

「おいおい、マジンガーにとっちゃそんなの豆鉄砲じゃねえか」

言葉が出なかった

モビルスーツでそれを食らったら撃墜ものである主砲や固定砲台をあるうことが「豆鉄砲」と吐き捨てるその自信にシンは言葉が出なかったのだ

となればPS装甲なしで怪ロボットの攻撃を防いだのも頷ける

どうやら自分はとんでもない世界に来てしまったようだ

「今度は俺の質問に答えな」

話を変えるように甲児がシンを見た

「お前名前は何て言うんだよ」

「俺か？・・・俺はシン・・・シン・アスカって言う」

「シン・アスカあ？変な名前だなあ？何で苗字を後に言うんだ？」

「俺の居たオーブじゃそうだったからだよ」

「オーブ？なんだそれ」

「あ」

シンはハツとした

そうだ、此処は自分の居た世界じゃないのだ

従って自分の居た国の名前など言っても分からないのは当たり前である

ややこしいなあと思い頭を掻きながらシンが考える

「えつとなあ・・・俺ガキの頃から外国で暮らしてたからそのせいで名前を先に言うようになったんだよ」

「マジか？外国に住んでたのかよ！すげえなあお前」

シンの言葉に甲児は目を輝かせた

どうなってるんだ？

外国に行くなんて別に大した事じゃないはずなのに

「何でそんなに驚くんだよ？」

「だって凄いやねえかよ！海外旅行だぜ！俺も一辺で良いから海外とか行ってみてえなあ」

「あ、そう・・・」

どうやらこの世界では海外旅行するだけでも大変そうだと  
そう思えた

するとシン達の居る部屋の扉を開けて何名か人が入ってきた

「あら、目が覚めたのね」

「うむ、何処か痛む所はないかい？」

其処には黄色いライダースーツを着た茶色の長い髪をした綺麗な少女が居た

思わずその少女を見てシンが少し対応に困る顔をした  
それを見て甲児がジロっと睨んだが気にしないで置く  
男の方は科学者を思わせる白衣を着た眼鏡と立派な髭を生やした中年の男性である

「甲児、この人達は？」

「ああ、此処、光子力研究所の所長の弓教授とその娘で俺の彼女の弓さやかだ」

「誰が彼女よ馬鹿甲児！」

そう言ってさやかが甲児の後ろから断罪チョップを当てる

そして踵を返して去ろうとするさやかに甲児が「ごめんよ」さやか  
さぐん」と泣いてすがつてきていた

どうやらこの世界では男は女の尻に敷かれるようだ  
くわばらくわばら

そう思っていると今度は弓教授が近づいてきた

「いやあすまないね。甲児くんが君を連れてきたときは正直驚いた  
よ」

「俺のスーツですか？それともあのモバイルスーツですか？」

「いや、君の顔がへこんでいて意識が無かった物で皆パニックを起こしそうになつたんだよ」

「そっちですか」

どうやら自分の姿やモビルスーツではなく自分の顔を見て驚いたようである

半ば安心したようなガツカリしたような感じに襲われた  
すると弓教授は軽く咳払いをして話しを変える

「ところで、君は一体何処から来たのかね？見た所あのロボットも国籍不明のロボットと思われるが」

「俺は月からこっちに来たんです」

「月から！」

シンの言葉に弓教授は目を大きく見開いた

その後ろでふざけていた甲児とさやかも中断してこっちを見た

「詳しく聞かせてくれないか？」

「あの時、俺は宇宙で戦争をしていたんです。モビルスーツ同士で戦い合う戦争です」

「ちよっと待ってくれよ」

話しの腰を折るように甲児が割って入る

「宇宙には空気が無いんだぜ。どうやってそんなところで戦うんだよ？」

「俺が最初に着てたノーマルスーツがあるだろう。アレが宇宙服の変わりになるんだよ」

「嘘つけ！宇宙服って言ったらもっと大きくてもこもこしてて重さも相当ある筈だぜえ。あれの何処が宇宙服なんだよ」

「そりやお前の世界の話だろ？俺の世界じゃあれが宇宙服なんだよ」  
「信じられねえ・・・」

軽くカルチャーショックを受けた顔になる甲児  
其処まで信じられない出来事なのか？

半ば呆れるような顔になる

横では弓教授が顔を顰めていた

「成る程・・・では君はその宇宙で戦っていたんだね」

「ああ・・・負けただけだな」

「何だ、負けちまったのか」

ぶつきらぼうに答える甲児にムツとしたがそれで一々反応するのも  
面倒なので止めた

そして弓教授を見る

「それで、月面に不時着した俺を謎の渦が襲ってきたんだ」

「フム・・・それで、気がついたら此処に来ていたと言うのかい？」

「ああ」

シンは頷いた

弓教授は難しい顔で顎に手をやる

そしてある結果を話す

「シン君・・・もしかしたら君は時空のねじれに巻き込まれたのか  
もしれないよ」

「時空の・・・ねじれですか？」

「うむ、君の居た世界と我々の居る世界・・・言ってしまうえばパラ  
レルワールドと言うのだが、その境界に一種のねじれが起こりそれ  
がワームホールとなって君を此処に召還したのかも知れないんだよ」

頭が真っ白になった

そんな何万分の一、いや、何億分の一と言う程の確立で起こったと思われる現象に自分は巻き込まれてしまったのだとなれば元の世界に帰るのは殆ど絶望的であった

これからどうすれば良いのだろうか

自分には身寄りも無ければ此処には知り合いもないのだ

「そう言えばシン、お前これからどうするんだよ？」

人の心を読んだのだろうか

甲児がシンを見て尋ねた

勿論今それで悩んでいるのだから答えが出る筈などなく

「俺にも分からない」

そう答えるしかなかったのだ

すると弓教授がシンを見てこう言った

「どうだろう、それなら此処に住むと言うのは」

「良いんですか？」

「うむ、これも何かの縁だろうしね、それに今君の機体は三博士が調べている所だよ」

「俺の機体って・・・デスティニーを！！！！」

シンはそれを聞いて急いでベットから飛び出る  
そして真っ先に部屋を出た

「お、おい！待てよ」

それを甲児が追いかけた

不味い、あれは機密の塊だ！

それを見ず知らずの奴等に調べられたらとんでもないことになる

ザフトはきつと敗北する・・・あ

其処でシンは立ち止まった

何を考えているんだ？俺は

此処にはザフトもなければ地球連合も無いのだ

別に機密などどうでも良い物でもあったのだ

となれば別に慌てる事も無いものだ

「ったく、いきなり走り出すなよなあ」

後ろでは甲児がやってきて軽くシンの肩を小突いた

「わりい、ついカツとなっちまってな・・・ところで、格納庫って何処だ？」

\*\*\*

甲児の案内でシンは格納庫に来ていた

其処では確かにポロポロになったシンのデスクティニーが居た

数名の作業班がデスクティニーの機体のチェックを行っている

その前には三人の白衣を着た科学者がいた

グレーの髪と髭を結わえた背の低い科学者

丸坊主で白い眉毛と髭をつけた科学者

天辺が剥げていて黒い髪と髭をつけた小太りな科学者の三人であった

「よ、三博士」

甲児は三博士に声を掛ける

すると三人は揃って手を振った

「なあ、誰だ？あいつ等」

「俺は三博士って呼んでるんだ。右から順にせわし博士、のっそり博士、もりもり博士って言うんだ」

「どんな名前だよ」

明らかに人間の名前とは思えない名前で呼ばれている事にシンは驚いていた

すると三人が一斉にシンを見る

「おお、君がああのロボットのパイロットなのかね？」

「あ、ああ・・・」

「いやあ、あのロボットは素晴らしいよ。我々の世界にはない技術ばかりじゃよ」

「こりゃ解明しているのが楽しくて仕方ないわい」

「は、はあ・・・」

返答に困った

コーディネーターの技術はナチュラルが理解するのはかなり難しい筈である

なのにこの世界ではまるで玩具を解体するかのよう慣れた手つきで行っているのだ

しかも楽しそうである

もしかしたらデステイニーは直るのではないだろうか  
そう思えた

「そうだ、さっき弓教授がお前に渡す物があるって連絡があったんだ」

「俺に？」

\*\*\*

「どうだ？サイズはピッタリだろうか？」

「確かに・・・サイズは丁度良いけどよお」

シンは微妙な顔つきになっていた  
それは今彼が持っている物を見ていたからであった  
それは

「何で学生服なんだ？」

「決まってるだろう。お前も俺やさやかさんと一緒に学校に行くだよ」

「はあああああああああああー！」

シンはこれまた大声を張り上げた

何ともほとんどん拍子で事が進んでいる気がした  
果たしてシンは元の世界に帰れるのだろうか

そして、デステイニーはどうなるのだろうか  
シンの脳裏に不安が募るばかりであった  
こりゃ将来シンは剥げるな  
そう作者は思ったのは余談である

第2話 新しい世界、新しい生活、新しい仲間（後書き）

次回、シンが東城学園に入学します

そしてデステイニーガンダムが生まれ変わる？

### 第3話 MSと魔神（前書き）

ハッキリ言います。かなりガンダムは原作を無視した展開になって  
しまいました

其処を先に謝罪しておきます  
ではどうぞ

### 第3話 MSと魔神

太陽がさんとさんと輝く

天気は快晴、雲一つない良い天気である

そんな空の下、此処東城高校では一つのサプライズが起こっていた

\*\*\*

東城高校の中にある二年生の教室

その中の一室で黒い髪を後ろに束ねたポニーテールで眼鏡を掛けた女性教師である音痴先生が慣れた手つきで黒板に名前を書いていたそしてその横には黒色で五つのボタンが付いた古き良き男子用の学生服を身に纏ったシンが立っていた

「今日からお前等と一緒に勉強する事になった。自己紹介しな」

「はい、シン・アスカです。宜しく」

先生の言葉を皮切りにシンは自分の名前を言った  
すると教室がざわめく

雑音のようであらゆる音が聞き取れなかったが一部の言葉には「何でカタカナなんだ？」とか「目の色が赤いぞ！外人か？」とか「結構美形ね

え」とか色々言われていた

そんなクラスの反応がシンには新鮮であった

と、言うのもシンが元居た世界ではコーディネイターと聞いただけでナチュラルの殆どは嫌そうな顔をする

それは今に始まった事ではない

それでもシンの生まれ育ったオーブではナチュラルとコーディネイターが共存していた

その頃はシン自身もナチュラルに対し別に偏見や差別感などは持つてなかった

むしろ普通に接していたのだ

だが、あの時・・・シンがオーブを脱出する際に流れ弾の影響でシンは一瞬の内に家族を失ってしまったのだ

そして、天涯孤独の身となったシンはその後プラントに渡りザフト軍に入った

それからである

シン自身は戦争を起こす組織に・・・そして、ナチュラルに対し深い憎しみを抱くようになってしまったのは

そして、そのシンの思いは彼を間違った道へと歩ませてしまったのであった

間違った道を歩んだままシンは戦い続けた

自身でもこれではいけないと思っただけがどうにも出来ずシンは戦った

そして、負けた・・・

それが今シンが此処にいる経緯である

此処にはナチュラルやコーディネイターと言う垣根が存在しない言っってしまうば自分以外殆どがナチュラルなのだ

にも関わらず此処に居る生徒達はシンを見て別に警戒する事も無ければ差別的視線を向ける事もない

それがシンには新鮮であり、そして何処か安心出来たのであった

「それじゃ、シンの座る席は・・・」  
「ほい、俺の席が開いてるぜえ」

そう言つて手を振つたのは言わずと知れた甲児であつた  
甲児が隣に座つていたであろう生徒を蹴り飛ばしてその席を指す  
当然そんな事をされた生徒は怒り心頭で甲児を睨む

「てめえ、兜！一体何の真似だこの野郎！」

「別に良いじゃねえかボス。お前別に勉強とかしねえんだしよお」

「だからつて野郎に席を譲る気はないわよお！」

「じゃあ女の子だつたら譲るのか？」

「そりゃ勿論！それも可愛い子ちゃんだつたら尚更OKだぜい」

満面の笑みでボスは言う

それにはシンは勿論回りの生徒は呆れ果てていた

「ま、そう言う事だからシンは甲児の隣だな」

「そ、そりゃないぜ先生〜〜」

ボスが涙するも先生は聞く耳持たずである

それを見て流石にシンも何処かボスに少し同情っぽいものを感じた

「あのお・・・先生、俺空いてる席で良いですよ」

「あん、そうか？それじゃシンは弓の隣が空いてるからそつちに座つて貰うか」

「分かりました」

シンは言われた通りさやかの隣の空いた席に座る  
それを見てさやかがシンに笑みを浮かべる

「宜しくね、シン君」  
「ああ、こつちこそ宜しく」

シンも同様に微笑む  
するとさっきのボスが突如シンを睨みつける

「てめえ、何さやかと良い関係になってるんだわさ！転校生の癖に  
馴れ馴れしいぞゴラア」

「良い関係かあ？只お互い挨拶を交わしただけだろう？」

「それでもゆるせねえ！お前みたいなイケメンがさやかと出会って  
もしもさやかが惚れたらどうするんだ！」

「そんなの知るか」

ボスの言葉にシンがぶつきらばうに答える  
それに対しボスがシンを睨みつける  
お互いがお互いをにらみ合っていた  
するとそんなボスの耳を音痴先生が抓る

「おいおい、何転校生に喧嘩売ってんだいボスウ」

「いだだだだ！先生・・・痛いって！」

「仲良くしなきゃ駄目だろう？ボスく〜ん」

顔では笑ってはいるが本心は笑ってはいない音痴先生を見ながらボ  
スが必死に弁解する

\*\*\*

それから一通り午前の授業を終えた甲児は屋上で昼食をとっていた  
勿論其処にはシンも居た

因みに二人共自作の弁当を食べていた

「へえ、お前結構料理出来るんだな」

「まあな、元居た世界だと自分で自炊しないとイケなかったからな。  
お前も結構こつた作りだな」

「まあな、俺の場合弟の分も作らないとならねえしよ」

甲児は笑いながらも弁当をかつこむ

「へえ、お前見かけに寄らず器用なんだな」

「一言余計だぞ」

甲児はそう言っつてシンを睨む

勿論本当に睨んでる訳ではない

それを察したのかシンは何も言わずにふっと微笑む

「良いもんだな」

「ん？」

ふとシンがこぼした言葉に甲児は眉を顰める

「この世界には人間同士が争う事もないし、コーデイナーやナ  
チュラルと言った種族の垣根が無いから気楽で良いしな」

「まあな」

「正直・・・あの時は悪かったな」

「あの時？」

「お前と初めて会った時だよ」

甲児はそれを聞いて手を叩く

恐らく理解したのだろう

それは初めてシンと甲児が出会った時であった

あの時、シンは甲児がナチュラルだと言っただけでかなり酷い言葉を言ってしまったのだ

まあ甲児と言えばそのお返しにとシンの顔面を殴ったのだが

「俺、あの時はナチュラルを本当に憎んでたんだ・・・戦争で家族を亡くしちゃって・・・それから軍人になってからかな・・・ナチュラルを憎んでいたんだ・・・それで、俺はとんでもない事をしそうになったんだ・・・だけど負けて・・・こうしてこの世界に来たんだ」

「成る程なあ・・・そうだったのか・・・お前も結構苦労したんだな」

甲児はしみじみとシンの話しを聞いていた

自分の世界ではまず体験出来ない事である

甲児の世界では小さな紛争こそ起こってはいるもののシンの世界のように種族が別れて戦争しあうと言っのではないのだ

と言っのもその原因の一つが以前現れた機械獣である

常識を逸した力を持つ機械獣を倒す為には皆が力をあわせなければならぬのだ

種族とかそんな事を言ってる場合じゃないのだ

もしかしたら、この世界はシン達の世界の住人にとっては理想の世界なのかも知れない

同じ人間同士で争わない世界

そんな世界が今シンの目の前に広がっているのだから

\*\*\*

学校を終えたシンと甲児は揃って光子力研究所に来ていたと、言うのも此処光子力研究所所長の弓教授がシンと甲児に話しがあると言うので呼んだのだ

「まず二人にはコレを見て欲しいんだ」

そう言つて弓教授が差し出したのは二枚のプリントであつた

其処にはシンの乗ってきたモビルスーツと甲児のマジンガーZの姿が描かれていた

だが、二枚とも半分は機械面がむき出しになっている

甲児はそれを見て首を傾げていたが、シンはマジンガーの機械面を見て度肝を抜かれる思いがした

正に全身凶器とはこの事である

一番上からだと目、耳の角、口、果ては腹にまで武器が内臓されているのだ

此処まで内臓武器をつけるのはモビルスーツでは不可能である

そもそもどうやってこれだけの武装を取り付けたのか知りたいと思うのが本音であつた

(内臓武器がこんなにあるのかよ・・・十種類じゃ利かないぞこれ)

真つ青になった・・・と言うのが正しい反応だろう  
今のシンの顔がそうである

しかし、そんなマジンガーZにも欠点はある  
それは空が飛べない事である

現状のマジンガーは水中戦こそこなせる物の空中の敵にはほぼ無力  
なのだ

もし其処を機械獣に突かれればかなり不味いのだ

どの世界にも完璧なロボットなど存在しないと言うのが頷けた

「にしてもシンのロボットは変わってるよなあ」

「そうか？」

「ああ、だつて腹の中で操縦するんだろ？見えないんじゃないやねえの？」

「それなら大丈夫だ。デステイニーの頭部はカメラになってるから  
ガンダムを見た光景がコクピットの中に映るんだよ」

「すげえなあ」

甲児もまたシンのデステイニーガンダムの性能に驚いていた

まず何より驚かされたのはこのガンダムは飛べると言う事である

マジンガーの最大の欠点である空が飛べないのをこのガンダムは出  
来るのである

それが甲児には凄いと思っていた

しかも機動性はマジンガーより高い

その上ガンダムにはPS装甲フェイスソフトと言う特殊な装甲を有している

そして何より研究所の所員一同が驚いたのがこのガンダムは宇宙で  
も戦えると言う事なのだ

宇宙での戦闘はこの世界ではまだ出来ない事である

それをこのガンダムは可能にしているのである

凄まじい事である

このようにお互い欠点もあれば優れた点もあるのだ

「んでよお、このPS装甲って何だ？」

「甲児くん、このPS装甲は物理ダメージを軽減・・・出力を上げれば無効化に出来る事も可能なんだよ」

「凄いなあ」

弓教授の言葉に甲児は本心からそう思えた

だが、シンからしてみればそれを用いずに敵の攻撃を弾く超合金Zの方が凄いと思えるのだ

そして弓教授は本題に入る

「実は君達を呼んだのは他でもない事だね、君の乗ってきたデステイニーガンダムは我々の世界の技術では元通りに直すのはほぼ無理だね、其処で我々の世界の技術で改修をしたいと思っただけに君に許可を得たかったんだよ」

「この世界の技術・・・ですか？」

「それって・・・もしかして超合金Zと光子力ですか？」

「うむ、その通りだよ」

それを聞いた途端、シンは思わず目を点にしてしまった

超合金Z、そして光子力

それを自分の乗ってきたデステイニーに転用しようと言うのだから驚くしかない

超合金Zは先の戦いで見られたがあらゆる攻撃を跳ね返す程の強度を誇っていたのだから

そして光子力エネルギーは以前見せてもらったのだが確実に原子炉よりも高出力を誇っているのだ

それにも関わらず無公害のクリーンなエネルギーなのである

正に夢のエネルギーと呼べるのだ

その二つをこのデステイニーに使うと言っただ

「良いんですか？そんな大事な物を俺・・・僕のデステイニーに使  
うなんて」

「イヤイヤ、君の機体を勝手に見てしまったからね、そのお返しと  
でも思ってくれれば構わないよ」

「そ・・・そうは良いまでも」

「良いじゃねえか。折角なんだしこの際大改造しても貰えよ」

「甲児！・・・そうだなあ・・・それじゃ、お願いします」

シンは弓教授に頭を下げてください、弓教授はそれを承諾した

「分かった。それじゃ今から作業に取り掛かるとしよう・・・三博  
士」

弓教授が呼ぶと部屋に三博士が現れた

皆待つてましたとばかりに満面の笑みを浮かべている

「任せて下さい」

「たっぷりパワーアップさせるからのお」

「楽しみに待つとつてくれよお」

三人はそう言って嬉しそうに部屋を出て行った

そんな三人を見てシンは楽しみになるのと不安になると言う気持  
ちが混ざり合う感じに見舞われていたのであった

### 第3話 MSと魔神（後書き）

出すと行ってましたが色々あって次回に持ち越しになりました  
次回こそ出します

超合金Zと光子力でパワーアップしたデスティニーを楽しみに待っ  
てて下さい

## 第4話 蘇る翼（前書き）

皆さんお待ちかね！

遂にデステイニーの登場ですよお！

## 第4話 蘇る翼

エーゲ海に浮ぶ孤島「バードス島」

その中に建設された秘密基地の中であしゅら男爵は平身低頭・・・  
要するに土下座をしていた

「も、申し訳ありません！」

あしゅらが涙目になって言う

その前には紫の肌をし長い髭をたくわえ筋骨隆々の逞しい老人（？）  
が立っていた

その老人は眉間に大量の青筋を浮かべて疾風の如く空に舞い上がると

「この馬鹿者がああああああああああ！」

大声でそう発しあしゅらに飛び蹴りを放った

「お前ほどの猛者が一体何度機械獣の指揮に失敗するのだ！しかも  
今度は無様に負けておきながらオメオメと逃げ帰ってきおつてええ  
ええええええええ！」

そう叫びながら怒涛のラッシュを当てる

それを諸に食らったあしゅらはボロボロになりその場に倒れた

「も・・・申し訳・・・ありま・・・せん・・・」

「弁解はもう良い！・・・それより・・・さっきのロボットだ」

そう言うと目の前の巨大なモニターに映し出されるのは中破したデ  
ステイニーである

それを見てこの男「Dr・ヘル」は興味深そうな顔をしていた

「それにしてもこのロボットは素晴らしい・・・極限まで運動性に特化した機体構造・・・そして何より宇宙での戦闘を想定している。実に素晴らしい・・・素晴らしいロボットだ」

「おお！Dr・ヘルが喜びに満ちている！」

あしゅらには分かっていた

モニターを見ているDr・ヘルは険しい顔ながらも喜びに満ちていたのだ

未知の技術

未知のロボットとの出会い

科学者ならば涎が出る展開である

そう、彼も科学者の端くれである

「あしゅらよ！なんとしてもあのロボットを手に入れるのだ！さすれば機械獣軍団を全て宇宙戦闘用に改造し、然る後、全世界を制服した後に今度は全宇宙を制服するのだああ！」

「おおおお！流石はDr・ヘル！何と素晴らしい野望なのでしょう！お任せ下さい。このあしゅら、なんとしてもそのロボットを手に入れて参ります」

あしゅらがそう言って立ち上がる

すると後ろには一体の機械獣が立っていた

「あしゅらよ、その機械獣はワシが新たに作り上げた新型機械獣「フォーミュラーF1」だ」

「おお、何と素晴らしい名前なのでしょう」

あしゅらとDr・ヘルの前には細身のボディに二本のハサミのよう

なアーム、そして背中には高出力のバーニアが取り付けられていた

「この機械獣の特筆すべき点はその運動性よ」

「何と！」

「幾ら驚異的な威力を誇る武器があつたとしても当たらなければ意味はないのだ。そして奴の腕からは高出力のビーム砲とスーパーニトロ砲が搭載されている」

「あ、あのスーパーニトロ砲ですか？」

あしゆらは驚いた

スーパーニトロ砲とは、某国が作り上げた戦術兵器である核兵器よりコストが安く済むにも関わらずその威力は絶大であり一発で空母を真っ二つに引き裂き轟沈させる威力があるのだそれをDr.ヘルが某国から強奪してこの機械獣に搭載したのだ

「このスーパーニトロ砲ならばマジンガーの装甲も破れよう。ゆけい！あしゆら男爵」

「はは！」

あしゆらは頭を下げ、勇み足で出陣していった

\*\*\*

場所は変わり、此処は光子力研究所の庭

其処では上空をおぼつかない飛行でパイルダーが飛んでいた  
何故そうなのか？

答えは簡単である  
今操縦しているのはシンなのだ

「む、難しいなあ」

「何だよお前、あんなロボット動かしてるからパイルダーとか余裕  
で動かせると思ってたのにてんで素人だな」

甲児が鼻で笑っているのを見てシンはムツとした

「しょうがないだろ。モビルスーツは面倒な動きとかはコンピュー  
ターがやってくれるんだ。これみたいに全部自分でやるって訳じゃ  
ねえんだよ」

「へいへい、言い訳は後で聞いてやるからさっさとパイルダーON  
しちまえよ」

「わあってるよ」

シンは答える

何故シンがパイルダーに乗っているのかと言うと、それは甲児が乗  
せたのだ

甲児はシンの乗っていたデステイニーを見て「これが動かせるんだ  
からお前マジンガー動かせるんじゃないやねえの？」ってなノリでシンを  
乗せたのだ

だが、幾らコーディネイターと言っても未知の技術、しかも操縦方  
法なんてバイクその物のパイルダー相手になりに四苦八苦していた  
のだ

最初はまともに飛ぶ事すら出来なかったのだがどうにか飛行するま  
でに至った

そしてそのままパイルダーはマジンガーの上空に差し掛かっていた

「ようし、いけえ！」

シンがそのままの勢いでマジンガーの頭部に降り立つ  
だが、パイルダーはマジンガーの頭部の上で止まってしまった  
それを見てシンが「あれ？」と首を傾げていた  
するとモニターが点き甲児の顔が映った

「おい何やってんだよ？羽を畳まなきゃ入らねえだろ？」

「そうか！・・・ええと、確か・・・これか？」

必死にボタンを探しどうにか見つけてスイッチを押す

すると羽は畳まれそのままの勢いでパイルダーは落下する

だが、分かると思うがそんな事をすればコクピット内ではとんでもない事になる

激しい衝撃がシンを襲ってきた

しかもパイルダーにはシートベルトの類が見られない

その為一気にそのままキャノピーに頭を激突させる

「ぐわあっ！い、いてえ・・・」

涙目になってシンは頭を抑える

相当痛かったようだ

それを見てモニターの向こうの甲児が口元を押さえていた  
恐らく笑っているのだ

あの野郎、後で焼きいれるか？

そう思えたが止めにした

またカウンターで意識を刈り取られるのがオチだ

仕方なくマジンガーの操縦を始める事にした

が・・・

パイルダーをまともに動かせないシンがマジンガーを動かせる筈も無く一步目を踏みしめようとした直後、そのままバランスを崩して仰向けに倒れてしまった

再び衝撃が襲い掛かる

シンの顔が真っ青になった

かなりのGが襲ってきたのだ

モビルスーツでやった場合まずお目に掛かれない現象である

倒れたままでは不味いのでとりあえず起き上がるうとするも操縦が不慣れなせいかまるで氷の上で滑って転んでいる少年のようであったそれを見ていた甲児は腹を抑えて蹲り手を床に叩き付けて大声で笑っていた

シンは本気で怒ろうと思ったのだがやっぱり止めた操縦できない自分が悪かったのだから

\*\*\*

「あゝ、酷い目にあつた」

操縦を終えたシンがフラフラしながらパイルダーから出てきたそれを頭にタンコブを付けた甲児が出迎える

「よ、お疲れさん」

「おう、どうしたんだ？その頭」

「さやかさんにぶん殴られた・・・笑い過ぎだったさ」

「自業自得だ」

殴られた理由がそれなのでシンは心の中で「ざまあ見る」と呟いていた

「にしてもお前操縦下手だなあ」

「モビルスーツはさっきも言った通りコンピューターの援助があるんだ。だから面倒な動作はしなくて良いんだけど・・・あれの場合全部自分でやらないといけないから大変だぜ・・・ボタンも多すぎるし」

そうなのだ

初めてパイルダーの中を見た際にシンの目に映ったのは一面に張り巡らされたボタンの山であった

辺り一面にボタン、ボタン、ボタン、ボタン・・・である  
目が回りそうになるとはこの事である

正直こんなマジンガーを手足の如く扱える甲児が凄いとさえ思えた  
そして、本当にコイツナチュラルか？とさえ思えた

「ま、慣れれば簡単だよ、俺も昔は上手く動かせなかったからな」  
「そうなのか」

お互いそんな会話をしていると突如警報のアラートが鳴り響いた  
これが鳴る理由は一つしかない

「機械獣か！」

「それって、あの時の奴等か？」

「ああ、なあにどうせまたあしゆらが操ってるに決まってる。ちやちやっつと片付けてくるぜ」

甲児は余裕の表情で先ほどまでシンが乗っていたパイルダーに飛び乗ると慣れた手つきでそれを飛ばす  
見ていたシンは何処か悔しそうであった

「くそお、俺のガンダムが戦えれば一緒に戦えるのに・・・」

そう言つて無力な自分を呪っていた  
そんな時であった

「そんな事は無いぞおシン君」  
「三博士！」

振り返ると其処には白い白衣が油污れなどで汚れた三博士が居た  
しかも顔には疲労の跡が伺える  
そんな三博士が満面の笑みを浮かべてシンに近づくと  
それを見たシンが何かを察した

「も、もしかして！」  
「そうじゃ、来なさい。君の蘇ったロボットが待っているぞい」

\*\*\*

「マジーンGOー！」

甲児が叫ぶ

するとパイルダールの真下にあつた汚水処理場の床が二つに割れ、中から鉄の城「マジンガーZ」が現れた  
その真上に来たパイルダールが羽を折りたたみドッキングする

「パイルダーON！」

甲児の叫びと同時にドッキングが完了する

マジンガーの目が一瞬白熱に光り輝く

コンソール内のランプが一斉に点灯する

マジンガーは諸手を上げて雄たけびを上げる

甲児とマジンガーが一心同体になつた瞬間である

「さあ、きやがれ機械獣！」

甲児がそう叫びながら大地をマジンガーで歩く

一歩一歩踏みしめる度に振動が伝わってくる

そして、歩き出してから約30分辺り経過した時であつた

目の前に奇妙なロボットが立っていた

両手がハサミになっており華奢な体つきをした機械獣なのだ

「けつ、鎌の次はハサミかよ！芸のないってのはこの事だぜ！」

甲児が目の前の機械獣を鼻で笑う

そんな機械獣の上空には円盤に乗ったあしゆらが居た

「待っていたぞ！兜甲児」

「またてめえかあしゆら！いい加減諦めたらどうだ？てめえじゃ俺には勝てないんだよ」

「ほざけ！このフォーミュラーF1で貴様の息の根を止めてやる」

「まるつきり『F1』のパクリじゃねえか！」

さり気に甲児がツツコミを入れる

そして先手必勝の如くマジンガーの腕がジェット噴射を上げて向かっていく

だが、それが当たる寸前に機械獣は目に見えない速度で移動していた

「速い！」

それが甲児の感想であった

その直後、背後に衝撃が走る

見ると何時の間にか後ろに居た機械獣がマジンガーをそのハサミで殴っていたのだ

「野郎、それならこうだ！」

近くに居たのなら好都合とばかりに猛然と拳を振るう

だが、それもかわされてしまう

「くっ、このっ、ちょこまかつ、しゃがって！」

必死に手を振るう

だが、それも尽くかわされてしまうのだ

まるで掠りもしない

それでいて機械獣の攻撃は面白い程マジンガーに当たるのだ

巨大なハサミがマジンガーの顔、腹、足を攻撃し数歩よろける

「くそぉー！」

よるけながらも甲児は睨みつける  
その前では機械獣が右手のハサミを開く  
すると中から白熱の高出力ビーム砲が放たれた

「うわっ！」

甲児は声を上げた  
ビーム砲を受けた拍子にマジンガーが吹き飛ばされたのだ  
細身のボディに関わらず高威力のビーム砲を持っていたのだ  
甲児はマジンガーの装甲を見る  
ビーム砲を受けた装甲は黒く漕げてこそいるが傷ついてる訳ではない  
それでも何発も受けていてはこちらがもたないのだ

「良いぞ！フォーミュラーよ！今度はスーパーニトロ砲をお見舞い  
してやれ」

あしゆらの命に答えるように今度は左腕を開く  
すると中から巨大な弾丸が唸りを上げて放たれてきた  
マジンガーはそれを片手で受ける  
その直後凄まじい爆発と衝撃がマジンガーを襲った

「うおわああ！」

叫びを上げてマジンガーは更に吹き飛んだ  
甲児は頭を振って防いだ手を見た  
それを見てギョツとした  
マジンガーの腕が肘から下がゴツソリ無くなっていたのだ  
恐ろしい威力である  
あんな弾丸をまともに食らえばマジンガーでもバラバラになってしま  
うのだ

「良いぞ！フォーミュラーよ！もう一発お見舞いしてやれ」

フォーミュラーはトドメとばかりに再び左手を開く

だが、その時であった

突如上空から光り輝く何かが飛来したのだ

それは機械獣の左腕を切り裂きそのまま上空に舞い上がる

何だ？あれは

それは、甲児は愚か、あしゅら男爵さえも抱いた感情である

そして、それを放った者は上空に居た

角々しいボディ構成でありながらその手足は丸みを帯びた物になっており背中には大きな翼が生えていた

そしてその顔は特徴的であり、二本の目と額にはV字方のアンテナが取り付けられていた

「待たせたな甲児」

「その声、シンか？」

その声を聞いて甲児が連想した人物がそうである

甲児とマジンガーを助けたロボットはその前に降り立った

大きさはマジンガーと大差ない位である

「随分と派手にやられたみたいだな」

「なあに、たかが片腕一本持っていかれた位だ！まだいけるぜ」

「そうか？だけどアイツが相手じゃ流石のマジンガーも苦戦って訳だな」

「うーま、まあな」

流石に今度は甲児が言葉に詰まった

それを見てシンは面白そうな笑みを浮かべる

さっきのお返しのようなようである

「あいつは俺に任せな。高機動戦闘はモビルスーツの十八番だって事を機械獣に教えてやるよ」

そう言い放ってシンの操るガンダムは機械獣の前に歩み寄った

「ええい、何をしている！そんなロボットなど叩き潰せ」

あしゆらの命を受けて機械獣は再び高スピードでガンダムの背後に回り腕を振り下ろす

だが、腕がガンダムに当たる直前そのガンダムがまるで霧の如く消えたのだ

そして腕が大地に叩きつけられる頃にはガンダムの姿は何処にも無かったのだ

「な、何だ！何が起こったと言うのだ」

あしゆらは驚いていた

すると今度は機械獣の背後から衝撃が走った

突然の衝撃の為に前のめりに倒れる機械獣

その後ろでは先ほどのガンダムが機械獣の背中を蹴り倒していたのであった

「どうした？お前の自慢の高機動はその程度なのかよ？」

ガンダムに乗ったシンが笑みを浮かべて言う

それには機械獣も怒ったのかすぐさま立ち上がり右手のビーム砲を放った

「うおっ！」

シンは咄嗟に腕をクロスしてビームを防ぐ  
するとそのビームはまるで弾かれるように辺りに散ったのだ  
それを見て一番に驚いたのはシンであった

本来こんな高威力のビーム砲を直撃したら機体が蒸発してしまうのだ  
しかしこのガンダムにはそんな傾向が一切見受けられないでいた  
やがてビームが撃ち終わると、其処には両腕が少し漕げただけのガ  
ンダムが居た

「お返しだ！食らいやがれ」

そう言つてガンダムは自身の掌を機械獣に翳す  
すると掌から光子力色に輝くビーム砲が放たれた  
それもかなりのスピードである

それを食らった機械獣のどてっばらには巨大な風穴が空きそのまま  
数歩後ろに下がった後に、仰向けに倒れて爆発した

「な、何と言つ事だ！おのれえ！覚えておれよお」

悔し涙を浮かべながらあしゅらは引き上げていった

\*\*\*

「サンキューシン、今回は助かったぜ」

「礼は良いって。お前には前に助けられた借りがあるしな、これで貸し借りなしだ」

「へへ、そうだな」

夕日の輝く大地の上で甲児とシンがお互いに見合いながらそう言った  
そして、そんな中二人の手が硬く握り合う

「これから一緒に戦おうぜ！」

「任せろ！」

シンと甲児はお互い眩しい笑顔でそう言った

そしてそんな二人の後ろには勇ましく佇むマジンガーズと

光子力と超合金Zで蘇った「デスティニーガンダムZ」が立っていたのであった

#### 第4話 蘇る翼（後書き）

甲児と共にこの世界を守る事を誓ったシン  
果たして彼等に迫る次なる機械獣とは一体  
頑張れマジンガーZ

負けるなデスティニーガンダムZ  
お前達二人のコンビは最強だぜ！

第5話 紅の翼、蒼き翼（前書き）

今回でマジンガーが空を飛びます。  
そして・・・

## 第5話 紅の翼、蒼き翼

「この大馬鹿者があああああああ！」

今日も今日とてあしゆらはDr・ヘルにこつぴどく叱られていた  
そして彼の使う「機械道空手真空四連激」を食らっていた  
その連劇を食らい落下して微かに痙攣をしていた  
しかしそれからすぐにまたあしゆらは起き上がる

「お・・・お許し下さい・・・Dr・ヘル・・・」

痛む体を必死に立て直しながら起き上がるあしゆら  
だが、そんなあしゆらを側では笑っている男が居た  
その男は軍服を着ており何と片手で顔を持っていたのだ

「ぶ・・・ブロッケン！」

「良いザマだなあしゆらよ・・・まあ貴様らしいと言えばらしい  
がな」

「ぐ・・・おのれ・・・マジンガーZめ・・・おのれガンダムめ・・・

あしゆらが悔しそうな顔をしていた  
だが、その顔が突如笑みに変わった

「ですが・・・Dr・ヘル・・・ご安心下さい・・・もう間も無く  
私の可愛い娘達が奴等の首をヘル様の元へ謙讓してくださる筈です」  
「随分な自信だなあしゆらよ」

そんなあしゆらに未だに厳しい視線を向けるDr・ヘル

だが、あしゆらの言う娘と言う者にも弱冠の興味が沸いているのは事実であつた

\*\*\*

その頃、此処東城学園の屋上では今とんでもない事が起ころうとしていた

「本当にやるのかよ？ボス」

「あつたぼうよお！男が一度決めた事を今更引き下げられるかってんだよお！」

腕をボキボキと鳴らして佇むボスに対して呆れた顔で佇むシンがいるそしてそれを外野から眺める甲児とさやかが居た

「ボスウ・・・お前じゃ勝てねえよお」

「怪我する前に止めなさいよボス。シン君って結構強いよお」

甲児とさやかの野次にもボスは耳を貸さないで居た

一体何故こうなつたか・・・それは今から数時間位前に遡る

その日、何時もの如くシンはクラスの女子の注目の的であった  
今は休み時間なのだがそれでもクラスの女子が全てシンに群がって  
いた

それがこのクラスに居たボスには溜まらなく腹が立ったのである  
見て分かる通りボスはしゃくれ顎で腹が出ており決してもてる顔で  
はない

その為甲児に続いてもてるシンが憎いのであった

そんな訳でボスはその日の昼休みシンを屋上に呼んだのである

「何だよボス？」

「シン・アスカ！お前に決闘を申し込む！」

\*\*\*

と、言う訳である

「しっかし良くやるねえボスも・・・」

「単に負けず嫌いなだけでしょ」

甲児とさやかが肩を上げて言う

その向こうでは既にボロボロになっていたボスと全く手傷を負って  
いないシンが居た

「もういい加減にしろよボス・・・お前じゃ俺に勝てないって」

「うっせえ！男の勝負はまだこれからだ！」

「つたく・・・」

一言悪態をつくシン

その前では猛然と突っ込んでくるボスの姿がある  
拳を振り上げて殴りかかる

が、それよりも前にシンの一撃がボスの溝に決まった  
拳が深くボスの腹にのめりこむ  
体がくの字に曲がる

「終わったな」

確実に決まった

手の感触からそう察する事が出来たのだ  
だが、現実とは違っていた

「へへ、それはどうかな？」

「なに！」

「このボス様を舐めるんじゃない！」

自身の腹にめり込んでいたシンの腕を掴み上げてそのまま地面に叩きつけた

悲痛の声がシンの口から放たれる

其処からお返しとばかりにシンの両足を掴み上げてジャイアントスイングよろしく振り回す

そして壁のフェンスに叩きつける

叩きつけられたシンは痛みを為に思うように動けないでいた

「オラオラア！トドメと行くだわさあ！」

「ちっ・・・調子に乗るんじゃない！」

息巻くボスに完全に切れたシンが向かい  
お互いの拳が交差する

\*\*\*

「いやあ、良い物見せてもらったぜ」

学校の帰り道で甲児はご満悦な顔をしていた  
その横でシンは不満そうな顔をしている  
彼の右頬には大きな痣があった

「俺は見世物じゃねえぞ！」

「でも最後のあれは凄かったぜえ・・・何せ同時に顔面に拳が当た  
ったんだもんなあ」

「ちえっ、あれで倒せると思ってたのによお」

シンは鳩尾を殴った際の手を見てそう呟いた  
彼のシナリオではあの時鳩尾を殴られたボスがそのまま倒れると言  
う筋書きだったのだ

だが、実際には其処から反撃されて結局は痛み分けとなってしまうた  
それを愚痴っているシンに甲児が笑う

「お前、喧嘩あんまりやった事ないだろう？」

「ああ、オーブじゃあんま無いな」

「だからさ、お前が思ってる程此処の奴等は柔じゃないぜ」

甲児が笑う

その通りだ。現に自分は一度甲児と殴りあった事がある  
その際甲児は自分の拳を食らっても平気な顔をしてたのに俺は甲児  
の一撃を食らって延びてしまったのだ

誠に情けない話である。コーディネイターがナチュラルに負けるの  
は基本的に余り無いのだ  
だが、それはシンの世界での話し。此処ではナチュラルが以上に強  
いのだ

もうコーディネイター以上はあるんじゃないかねえ？ってな位に

「さあて、まずは光子力研究所によらねえとな」

「あり？何か今日あったっけ？」

甲児は素っ頓狂な顔をして言う

こいつ、もう忘れたのか

どうやらナチュラルの学生は脳に栄養が行ってないようである  
軽く溜息をついたシンが説明する

「昨日弓教授が言っただろう？今日俺のデスティニーとお前のマジ  
ンガーで模擬戦やるって」

「ああ、そう言えば言ってたなあ、確か今日だっけ、あれが完成す  
るのは」

「ああ、その為のテストも兼ねてるらしいぜ」

シンの言葉に甲児は腕を握り締めて喜びの声を上げた  
どうやら相当そのアレを楽しみにしていたようである  
顔には歓喜の文字が似合いますぎる顔立ちになっている  
それを見たシンがフツと笑う

まるでガキその者である  
と、それは自分も同じか  
気がつくと自分もマジンガーZと模擬戦が出来るのを心待ちにして  
いるのに気づいた  
似たもの同士って訳だな  
シンはそう思えた

「ま、何にしても今回の模擬戦は俺の完全勝利に終る予定だがな」  
「何言つてやがる！俺の勝ちに決まってるだろう？」

二人は後の模擬戦でどちらが勝つか激しい議論を述べていた  
今のデステイニーは超合金Zと光子力でパワーアップしている  
だが、それはマジンガーZも同じ事である  
その上以下にパワーアップしたとしても火力の差は埋まらない  
一撃の威力はマジンガーの方が上なのだ  
しかしマジンガーには致命的な欠点がある  
それは飛べない事だ

飛行能力を持たないマジンガーZに対しデステイニーガンダムZは  
飛行能力を有している  
空中から雪隠攻めすれば勝てるだろう  
しかし、そんな責め方をシンはしない。真っ向からぶつかりあって  
勝負をする

そのつもりでいるのだ  
でなければ模擬戦をする意味がない。シンは今どうしてもこの男に  
兜甲児に勝ちたい一心なのだ  
ナチュラルでありながらコーディネイターである自分を負かした男  
熱い魂を持ち其処に憧れた。甲児はシンに無い物を持っているのだ  
だからこそ勝ちたい  
そう思えたのだ

これは憎しみでも怒りでもない。純粹な思いなのだ

そうシンは思えた

やがてそれぞれのバイクの置いてある駐輪場に辿り着く二人自身のバイクのキーを差込みエンジンを掛ける

バイクの排気口から黒い煙が巻き上がり微かにマシンが振動するヘルメットを被りギアを動かしてバイクを走らせる

校門から出て真っ直ぐに光子力研究所を目指す二人であった

だが、そんな二人を遠くから見つめる影があった

その影は女性であった

金髪のロングをサイドで束ねたツインテールの髪に赤いシャツと白い丈の短いスカートと同じ色のブーツを履いた女性である

顔立ちは美しい女性その者であり、それだけなら間違いなく声を掛けられるだろう

だが、その女性の瞳に生氣は宿ってはいなかった

そして、その女性は同じ顔が三人居たのだ

更に付け加えれば、その後ろには数人の人間の惨殺死体が転がっていた

女性達は先ほどバイクで走っていった甲児とシンを見て不気味に微笑む

そして空高く跳躍してそれを追い掛ける

明らかに人間技ではない

その速度は自動車を追い越す程でもあった

そして、その女性達は甲児とシンも捉えた

「何だ」

「女？」

二人はバックミラーに映る三人の女性を見てそう述べた

正しく女性である

だが、その女性が60kmで走るバイクに追いつける筈が無いのだその女性はグングン距離を縮める

やがて距離が目と鼻の先辺りまで迫った時である

その女性が髪を振り回す

振り回された髪は黄金色に発光しまるで生き物のように靡いて甲児達に襲い掛かってきた

危ねえ！

咄嗟に二人はかわす

その直後、髪は地面のアスファルトを突き抜ける

コンクリートをぶち抜く程の威力があるのだ

思わずゾツとした

あんな物を生身で受けたら間違ひなくバラバラにされてしまう

食らう訳にはいかないのだ

「どうする？甲児」

「こいつらを研究所に行かせる訳にはいかねえ！此処でケリをつけるぞ」

「よし！」

甲児の提案にシンは頷く

確かにその通りである

あの能力からしてあの三人娘はDr・ヘルの差し向けた殺人アンドロイドであろう

だとすれば研究所に行けば研究所が危険に晒される事になる

此処でなんとかしても倒すしかないのだ

バイクを急停車させてそれから降りる

すると三人の娘は二人の目の前に止まりそれぞれポーズを決める

それは名前のようであり「ガミア」とも見えた

「お前等は何者だ？」

甲児は尋ねる

すると女性達是不気味に声高らかに笑う  
だが、その笑い方は機械的な笑い方であった  
そして、笑いを止めると答えだす

「殺人アンドロイド、ガミアQ」

「兜甲児、そしてシン・アスカ。お前達を地獄に叩き落す為に遣わされた」

「美しき死神だ」

三人は答える

笑い声も機械的なら話し方も機械的である  
益々不気味であった

そんな怪物が今甲児とシンの目の前に居るのだ

「やれやれ、美人のお誘いかと思ったらデート場所は地獄の一丁目  
かよ！悪いが俺は暗い場所は嫌いなんだ。デートを誘うのは地獄  
の鬼にしておけ！」

甲児は叫び懐から一丁の銃を取り出す

それはシンの世界にあった実弾を放つ拳銃ではない

先端はレーザーを放つ形になっている

光子力研究所が開発した護身用拳銃「光子銃」フォトンガンである

勿論それはシンも持っている

同様にシンもそれを手に持ち引き金を引く

甲児の放った光弾はガミアの片髪を弾き飛ばし、シンの弾丸はガミアの額を撃ちぬいた

流星はシンである。元の世界で軍属として訓練してきただけあって  
射撃の腕前はかなりの物だ

甲児自身も銃の訓練は受けてきたが本職の軍人とは腕前が違うのは当たり前である

いきなりの専制攻撃を食らって面を食らった顔をする二体のガミア恐らく予想外だったのだろう

「まさか・・・何時の間に光子力を携行化したのだ」

「シンのお陰さ・・・こいつが光子力の携行化の技術を教えてくれたのさ」

「つつてもこれはある人の受け売りだけだよ」

シンは此処に来る前にある人にそれに近い技術を教わった事があるそれはシンにとって恩師に等しい人でもあり、また・・・様々な事を教えてくれた人でもある

「誤算だった・・・マジンガーやガンダムに乗ってない貴様らなら楽に倒せると思っていただけだ」

「舐めるんじゃない！てめえら如きに負けてたら兜甲児様の名が泣くじゃねえか！」

「俺はどうなるんだよ？」

シンが甲児だけの名前しか出さないのに不満の声を漏らす

それを聞いて甲児が苦笑いで片手を上げて謝罪する

謝り方は正に甲児である

それを見たらシンも納得するしかない

やれやれ・・・こいつはこんなんだよなあ

甲児との付き合いは短い物の甲児の性格は良く理解している

良い意味で前向き、悪く言えば単純

だが、彼は誰とでも分け隔てなく向き合う心を持っているのだ

もし、もしこんな奴が俺の世界に居たら・・・悲劇は起こらなかつたのかもしれない

そうさえ今のシンには思えたのだ

「おのれ・・・こうなれば片腕だけでも！」  
「死ねえ！」

最早決死の覚悟でガミアは向かってくる  
だが、そんなガミア達にも慌てずに甲児とシンは引き金を引いた  
放たれた弾丸はそれぞれ向かって来たガミアに当たる  
有る物は額に、ある物は真つ二つにされて

その場に転がるガミアの亡骸を甲児達は薄気味悪い顔で見た  
例えアンドロイドと言えども此処まで精密に作られれば気持ち悪く  
もなる

余り良い気はしない物だ

「ちつ、Dr・ヘルメ・・・姑息な手を使いやがって」  
「急ごう、この分だと研究所もヤバイかも知れない」

シンの内心は恐ろしい事を想像していた  
もし、このガミアが二段構えの作戦であったなら  
もし、これが自分達を足止めさせるための作戦であったなら  
今頃研究所は危険な状態になっている筈である  
一刻も早く急がねばならない  
そう思えたのだ

二人は急ぎバイクを走らせて峠を越える  
山道の方が研究所に近いのだ  
スピードランプでは既に80kmを指している  
急げ、急げ・・・

祈るようにバイクを走らせる二人  
願わくば、研究所が無事であるようにと、只祈るだけであった

研究所は周囲にバリアを展開していた  
その目の前には一体の巨大な機械の怪物が立っていた  
機械獣である

四つんばいの姿勢で頭の上には鋭く巨大な角が取り付けられてあった  
それが今回の機械獣「トロスD7」である  
そしてそれを上空に浮ぶ小型の円盤の上に立ちバードスの杖を持つ  
たあしゆらが見下ろしていた

「フッフ、奴等の居ない光子力研究所など赤子同然！今の内に研究所を破壊してジャパニウムを奪うのだ！やれい、トロスD7！」

バードスの杖を掲げてあしゆらが命ずる  
それを受けたトロスが雄たけびを上げて立派な角を振り翳して研究所に突進してくる

角の衝突をバリアが防いでくれた

だが、その一撃は凄まじくバリアには細かい亀裂が入った  
もう一撃当たれば確実にバリアは碎ける筈である

バリアが脆いのか？否、機械獣の攻撃が凄まじいのだ  
その光景をバイクを走らせている甲児達は見ていた  
不味い、もう奴等は研究所に攻撃を掛けてやがる  
急ぎ迎撃をしなければならぬ

だが、今の自分達では機械獣と戦うのはまず不可能である  
まずは研究所に入る事が先決である

「シン、俺について来てくれ」  
「分かった！」

甲児に続いてシンも道を走る  
其処には丁度車一台が入れる位のスペースがあった  
其処から中に入れるのだ

道を走ると其処はマジンガーとガンダムを格納しているスペースであつた

有り難い、マジンガーもガンダムも発進準備を終えている  
すぐにも出撃出来る状態なのだ

だが、その間にもガラスの割れる音が響いた  
機械獣の攻撃でバリアが破壊されたのだ

最早一刻の猶予もない状況である  
急ぎ出撃せねばならない

「急ごうぜ甲児！」

「おうよ、あんな奴等に研究所を好きにさせる訳にはいかねえ！叩きのめしてやるぜ！」

マシンに乗った甲児とシンがそう呟く  
すると天井が開きターンテーブルが徐々に上に向かって上がっていく  
地上に居る機械獣を迎え撃つ為である

「先に行くぜ、甲児」

「ちえ、俺も空が飛べたらよお」

愚痴る甲児

しかし所詮は無い物ねだりである  
諦めるしかないのだ

そんな甲児の上を一足先にシンのガンダムが跳び上がっていく

跳び上がった先には研究所のバリアを破壊したであろう機械獣が唸りを上げていた

「野郎！研究所をやらせるか！」

跳び上がったガンダムは手に持っていたライフルを構えて引き金を引く

光の粒子が空を裂き機械獣に当たる

だが、その一撃は機械獣の装甲を僅かにゆがめただけに留まってしまい致命傷にはなっていない

何て、硬い装甲なんだ

今までの機械獣とは違い装甲が格段に厚くなっている

ライフルでチマチマ攻めていたんでは話にならないのだ

「待たせたな！」

其処へようやく甲児のマジンガーが到着する

しかしそれと同時に機械獣がZに向かって突進してきた  
完全に出鼻を挫かれた

機械獣の角がマジンガーの腹に当たる

装甲を貫通し内部に角が入り込んだのだ

「こ……こいつ！Zの装甲を貫通出来るってのか！」

「マジかよー！」

Zの装甲を貫通する

それは即ちデステイニーも同じである

だが、こうしててこまねいては勝てる物も勝てないのだ  
此処は一気に勝負に出るべきである

「デステイニーが射撃戦しか出来ないと思っただら大間違いだ！」

シンが叫び機械獣のまん前に立つ

そして右手を翳して機械獣を持ち上げる

デステイニーの武器の一つであるパルマファイオキーナである

それは機械獣の装甲を貫通し内部の機械を破壊した

破壊された機械獣はそのまま前方に放り投げられる

動かなくなった機械獣はかすかに手足を痙攣させている

今度は狙いをあしゆらの乗り込んだグールに定める

グールは上空から甲児のZに向かって爆撃を仕掛ける

激しい爆撃が当たりを振動させる

しかしZを落とすには至らないでいる

だが、中に居る甲児には溜まった物ではない

まるでグラスの中で揺れるビー玉である

このままでは先に自分が参ってしまう

「援護するぜ甲児！」

上空に居たガンダムがライフルを連射しグールを牽制する

それにより狙いを今度はガンダムに定める

ミサイルの雨がガンダムに向かって放たれるもシンには当たらない

下に居た甲児も上に向かって攻撃を仕掛ける

しかし地上からでは攻撃が当たり辛いのか放った光子力ビームが尽

く外れてしまう

「甲児君！聞こえるか？」

「弓教授！」

「たった今完成したZの翼を飛ばす・・・ぶつけ本番だが大丈夫か？」

「任せて下さい教授！俺そう言うの得意なんですよ！」

甲児は笑って言った  
少しでも緊張を紛らわす為・・・違つ、弓教授に要らぬ心配を掛け  
させぬ為である  
無論それは教授自身も知つての事である  
それを聞いて納得した教授はコンソールを操作する  
すると付近の岩陰が動き、その中から紅の色を持った一翼の翼が現  
れた

「あれが・・・」

「そうだ、マジンガーZを空へ飛ばす紅の翼「ジェットスクランダ  
ーだ」」

ジェットスクランダ・・・

甲児の脳裏にその名が過ぎる

何と力強い名前なのだろう

それこそがマジンガーを空へ飛ばす紅の翼なのだろう

それが唸りを上げて上空に舞い上がる

その翼がマジンガーに向かって飛んでくる

Zは空に飛び上がり両腕を突き出した姿勢になった

そして、そのZの背中にスクランダが装着される

ジェット噴射を巻き上げてマジンガーZが空に舞い上がる

「飛んでる！Zが・・・俺のマジンガーZが空を飛んでるんだ！」

歓喜の声に震えた

間違いない、甲児のマジンガーZは空を自由に飛んでいるのだ

大空を自由に飛びまわっている姿は正しく大空の覇者である

「やったな甲児」

「ああ、これでマジンガーは無敵だぜ！」

これでマジンガーに弱点は無くなった  
後はグールを叩き落すだけである

そう思っていた矢先であった

突如として二人の背後に巨大な次元の渦らしき物が現れたのだ

「な、何だありやあ！」

「あれは・・・あの時と同じ・・・」

シンの脳裏に蘇る物

それは自分をこの世界に召還したのと同じ現象であったのだ

そして、その渦の中にシンのガンダムと甲児のマジンガーZは吸い込まれてしまった

「うわあああああああああ！」

抵抗空しく二人は渦の中に吸い込まれてしまった

そして、二人を吸い込んだ後渦は無くなり、あたりには静寂が残るのであった

## 第6話 再会（前書き）

シンと甲児が飛ばされた世界  
其処は・・・

久しぶりの更新でお待たせしました

## 第6話 再会

「いてて……一体何があったんだ？」

目を覚ましたシンが回りを見回すとそれは驚きの光景であった。其処は甲児達の居た世界ではなかった。近代的な壁、窓の外に映る満天の星が映る空。そう、此処は間違いなく自分の居た世界であった。

「俺……帰って来たのか？」

立ち上がりシンがそう呟いた。すると、数名の足音が響き渡る。それは間違いなく自分に近づく足音であった。見ると数名の武装した兵士達がシンの前に現れた。緑色の制服を着ている。間違いなく、それは自分の元居た『ザフト』の制服であった。

「貴様、一体どうやって此処に入ってきた！」

兵士達は突然シンに対し銃口を向けた。それに驚くもシンは事情を説明する。

「ま、待て！俺はザフト軍ミネルバ隊所属のシン・アスカだ！」

「シン・アスカあ？聞いた事ない名前だぞ」

兵士の言葉にシンは驚いた。ミネルバ隊と言えばザフトでも最新鋭の戦艦を扱う部隊の筈だ。知らない筈がない。ましてや自分はインパルス、並びにデステイニーを扱った事があるのだ。自慢じゃないがそれなりに名前が知れ渡っている筈である。それが何故知らないのであろっか疑問を感じた。

「おい、こいつアスカと名乗っていたぞ。もしかしてアスカの知り合いじゃないのか？」

「馬鹿な、アスカは4年前に家族を失っているんだ。知り合いなんぞ居る筈ないだろう？ 大方連合のスパイだろう」

兵士達が口々に言い合う。それは聞いてて気持ちの良い物ではなかった。どうやら俺はこいつらにとってスパイか何かと勘違いされているようである。

「ま、待ってくれよ！俺はスパイじゃねえよ！それに何だよ。アスカって・・・俺の他にアスカを名乗る奴が居るのかよ！」

「ちっ、五月蠅いスパイだ！おい、こいつをひつとらえる！洗いざらい吐かせてやる」

「くそっ！」

捕まれば間違いなく只では済まない。そう判断したシンは踵を返した。こうなったら三十六計逃げるにしかずである。

「あ、待て！」

兵士達がそれを追う。銃を発砲しないのは恐らく付近を傷だらけにしたくないのと足でも充分に捕まえられると思えた慢心からであろう。だが、それは甘かった。

「馬鹿野郎、伊達に甲児達の世界で生活してた訳じゃねえぜ！」

圧倒的にシンの足の方が速かった。無理もない。コロニーのように人口的に作られた重力ではなく、地球のように自然の重力で鍛えられたシンの方が足が圧倒的に速かったのだ。あっと言う間に兵士

達を巻くとシンは脳内で状況の整理を行った。

(どうなってんだ？確か俺は甲児達の世界で機械獣と戦ってて・・・それで変な次元渦に巻き込まれて・・・まさか！此処は俺の居た世界じゃないのか？)

シンの脳裏にそんな予想が浮ぶ。

「其処に居るのは誰？」

「やべっ！」

突如として目の前に声が聞こえた。全く気づかなかった。油断した自分をシンは呪った。覚悟を決めて目の前に声を掛けた者を見る。そしてシンは息を呑んだ。其処には一人の少女が立っていたのだ。それも、シンが知っている少女であった。

「ま、マユ・・・」

「え？・・・お兄ちゃん」

\*\*\*

「いって~~~~、何だっただこの世界は？」

頭を振るって甲児は目を覚ます。見ると其処はパイルダーの中だ

と分かった。操縦桿を動かして機体を起こす。立ち上がったマジンガーの中から辺りを見回す。

「な、何だあ？空の上に町がある！一体此処は何処だよ？」

甲児は目の前の光景に驚かされた。上空に町が浮んでいるのだ。一体どうなっているのだろうか？少なくとも此処が地球ではない事は理解出来た。では一体何処なのだろうか？

「とにかく、今はシンを探さないとなあ・・・此処が何処か分からないし」

一人そう呟いてシンは辺りを探るように歩き出した。すると目の前に軍事基地を思わせるつくりの施設があった。あそこになら誰か居るだろう。胸の内に期待を膨らませながら甲児はZを向かわせた。だが、その期待は突如起こった爆音と共に萎んでしまった。

「な、何だ！いきなり爆発？」

甲児は驚いた。だが、その直後、爆発の起こった倉庫から三機のモビルスーツが現れた。黒、緑、青の三色のモビルスーツである。

「何だ？シンの乗ってたガンダムに似てるみたいだけど」

確かに顔は似ていた。二つの目がありアンテナがある。だが形状は弱冠異なっているようだ。すると、三機のモビルスーツがマジンガーZを見る。

「何だ？ザフトの新型か？」

緑のガンダムに乗っていた少年がマジンガーを見てそう呟いた。

「けど丸腰だぜ。楽勝じゃん」

青いガンダムに乗っていた少年がそう呟く。

「邪魔するなら・・・倒す！」

黒いガンダムに乗っていた少女も殺気だつてそう言う。

「どの道放つては置けないな。アウル、ステラ！折角だ。あのモビルスーツも頂くぞ！」

そう言つて三機は一斉にマジンガーに向かって来た。

「野郎！来るつてんなら相手になってやるぜ！」

向かつて来た三機に対しマジンガーが構える。その前に青いモビルスーツが躍り出た。

「馬鹿か？モビルスーツを前に丸腰で出て来るなんてよお」

少年がそう言つてガンダムの握っていた槍状の武器を振り下ろす。だが、それをマジンガーは片腕で弾き飛ばす。腕には火花が舞い散るが傷一つ負っていない。

「嘘だろ？直撃だったじゃねえか！こいつもPS装甲持つてるのか？」

「嫌、エネルギー反応はない。どうやらアイツは装甲で受け止めたみたいだぞ」

青いガンダムが驚くのに対し緑色のガンダムに乗っていた少年がそう諭す。

それを聞いた二人は驚いた。

「マジかよ！PS装甲なしでガンダムの武器を受け止めるなんて聞いてねえぞ！一体なんなんだよあれ？つてかあれもガンダムなのか？」

「俺が知るか！」

半ば怒り気味に返す。彼も気が動転しているのだ。何しろ予定通りにガンダムを強奪出来たと言つのに外に出てみれば突然現れた謎のモビルスーツ・・・なのかどうか微妙だがとにかくロボットが立っていたのだ。

しかもそのロボットはこちらの攻撃を全く受けつけないとまで来ているのだ。

「だったらこれはどうだよ！」

実弾が効かなければ光学兵器で攻めるまでである。3機は一斉にビームライフルで狙撃を始めた。

「にやろう！そんな眩しいだけの奴がマジンガーに効くかよお！」

甲児は咄嗟に両腕をクロスしてガードの姿勢を作った。

3本のビームは全てマジンガーの腕に命中した。しかしそのビームは何故かマジンガーの装甲を貫通せずにそのまま弾かれてしまうのだ。その光景には三人は最早驚きの声すら上がらなかった。

「くそ、一体どうなってんだよ！こんなモビルスーツが居るなんて

聞いた事ねえぞ！」

「おい、お前等何か勘違いしてるみたいだけどなあ。マジンガーはモビルスーツじゃねえぞ！」

『え？』

甲児の言葉に三人が一斉に声を上げた。そりゃ驚くだろう。何しろいきなりマジンガーがモビルスーツじゃないと言われたのだから。まあ元々おかしいとは思っていたのだが。何しろ大概のモビルスーツは一部の例外を除き殆どが武装しているのだ。それなのに目の前のマジンガーはと言うロボットはいわば丸腰なのだ。

その上PS装甲なしでガンダムの攻撃を受けていられると言う堅牢過ぎる装甲もまた疑問になる。現代の科学力でそれだけの装甲を生み出すのは不可能に近いのだ。

つまりこのマジンガーは現代の技術で作られた事ではないと言う事が推測される。

「大体何だよお前等？いきなり襲ってきやがって！ビックリしたじやねえか！」

甲児が額に青筋を立てて3機のモビルスーツを睨む。だが、それに対し三人は困惑していた。

(どうする？ステイング)

(良くは分からねえけどどうやらこいつはザフトじゃないらしいな。こんなモビルスーツ・・・っばいのも見た事ないし)

(ねえ、倒さないの?)

少女がマジンガーを指差して尋ねる。しかしそれに対してステイングと呼ばれた少年ともう一人の少年が声を揃えてこういった。

(無理だろう)と・・・

\*\*\*

その頃、シンは己の目を疑っていた。無理もない。今シンの目の前に居るのは既にこの世に居ないたった一人の妹なのだ。

そして、それは彼女もまた同じであった。彼女もシンを見て目を大きく見開いていたのだ。

「ど、どうして・・・どうしてマユ・・・お前が居るんだ？」

「それはこっちの台詞よ！どうしてお兄ちゃんが生きてるの？だって、お兄ちゃんはある時に死んだ筈なのよ！」

「な！どう言う事だ？」

シンには訳が分からなかった。

俺が死んでる？馬鹿な！一体どうなってるんだ？

さっぱり分からなかった。死んでるのはマユの方だ。そう、あの時マユはシンの目の前で腕一本を残して死んだ筈なのだ。それが今シンの目の前では自分と同じザフトレッドの服を着ているのだ。

と、言っても今のシンの服装は前の世界での東城学園での学生服なのだ。

とにかくこの世界ではマユは生きて、しかもザフトに入隊しているのだ。まるで自分と同じなのだ。

「マユ、教えてくれ！あの時何があったんだ？」

「何も覚えてないの？あの時お兄ちゃんを私を庇ってくれたんだよ！でも……そのせいで……」

マユの顔が突如として曇った。どうやら言いたくない過去なのだろう。それはシンも同じであった。

一瞬にして家族を失ったシン。その時から彼の心はおかしくなってしまうのだろう。そして、シンには分かる。

このまま行けばマユは自分と同じ過ちを犯す。そんな事をさせるわけにはいかない。そうシンは心に誓った。

「居たぞ！こつちだ！」

そんな時であった。自分を搜索していたザフト兵士がシンを見つけて大声で叫んだ。しまった！此処では自分は只の侵入者だったのだ。

「悪い、マユ！後でゆっくり話そう！とにかく今は俺は逃げる！んじや」

「ちよ、ちよつと待って！お兄ちゃん！」

逃げるシンに手を伸ばす。しかしシンはそれよりも遙かに早く走り去ってしまったのだ。見ればもう遙か向こうまで走ってしまった。恐るべき脚力である。

「アスカ！無事か？」

シンを見失ってしまった兵士達は仕方なくマユの安否を確認する。

「え、ええ……私は平気だよ」

「それは良かった。それより大変なんだ！式典に出すはずだった三

機のモバイルスーツが強奪されちゃった」

「ええ！」

「既にミネルバは準備を終えている。すぐに出撃を」

「分かりました！」

頷き、マユは走る。だが、ほんの少しだけ、シンの走り去った廊下に視線を送った。

（お兄ちゃん）

そして、内なる心の中で一言、そう呟いたのであった。

第7話 激突！ガンダム 対 マジンガー（前書き）

今回からかなり原作崩壊しちゃうかも知れません

## 第7話 激突！ガンダム 対 マジンガー

施設内でマユと出会ったシン。

本来なら色々と話をしたかったのだが今はそうはいかない。

何故ならこの世界では自分は既に故人らしく、しかもザフトからすれば自分は連合のスパイと勘違いされているのだ。

恐らく捕まれば間違いなくその場で銃殺されるのがオチである。

「冗談じゃない！何の偶然か知らないけど、マユがこの世界では生きてる。しかも・・・俺と同じ道を歩んでるって事は・・・アイツは、俺と同じ過ちを犯すって事になるんだ」

シンは確信した。

止めねばならない。

未来を知っている自分にしかこれは出来ないのだ。

今ならまだ間に合う。

時期的にはこれはまだミネルバの観艦式の辺りの筈。

となれば皆生きてると言う事になる。

死なせたくない。

もう誰も死なせたくない。

そうシンは心に強く思った。

そして、ふと笑みが零れた。

（散々あの人を甘ちゃん呼ばわりしてたってのに・・・結局俺も同じ結論に行き着くんだな・・・）

シンの脳裏に一機のモビルスーツが浮んだ。

光輝く羽を持ちドラグーンシステムを操り戦場を駆け抜ける圧倒的強さを持つ機体。

それでいて敵の無力化のみを行い決して命を奪わない戦い方をする青年。

「キラ・ヤマト」

初めは彼の戦い方は甘ちゃんやり方だと蔑み嫌っていた。

だが、今はどうだ。

今自分がしようとしている事はその甘ちゃんと同じやり方なのだ。

誰も殺したくない。

例え敵だったとしても。

そう思うとシンは笑みを浮かべてしまったのだ。

「もしかしたら、あのフリーダムのパイロットと話せる機会があるかもしれない」

内心そんな期待を胸にひたすら施設内の出口を目指して走り続けている。

止まるわけにはいかない。

止まれば即座に武装した兵士達に追いつかれてお陀仏である。

幸いに此処の兵士達は重力の甘い環境で育ったせいか地球で少しの間だけが生きてきたシンの脚力には追いつけないでいる。

シンは内心「自分もかつてはあんなだったのかなあ？」と不安がっていた。

そうこうしていると外に出れた。

が、出た途端シンは目を見開く結果となった。

其処には奪われた3機のモビルスーツが居たのだ。

それだけならまだ分かる。

しかし今そのモビルスーツと戦っているのは紛れも無いあの『マジンガーZ』であったのだ。

「な、何で甲児まで此処に来てるんだ？・・・って、このままじゃ不味い！」

シンは直感した。

このままでは甲児はきつと武器を使用する。

「光子カビーム」、それに「ブレストファイヤー」

他にも多数の武器を持っている。

地上であれば問題ないのだが此処では非常に不味い。

何しろ此処はコロニーなのだ。

薄っぺらい外壁に守られた世界なのだ。

もしその外壁に向かってマジンガーの武器が命中しようものなら「

コロニーなどあつと言う間に風穴が開いてお仕舞いである。

それだけはなんとしても避けねばならない。

しかし今のシンには通信出来る手段がないのだ。

困った事になった。

どうしようと辺りを見回していた。

すると。

「アスラン！何する気だ？」

「このまま黙って見ている訳にはいかない！あの謎のロボットに加勢する」

「無茶だ！ザクなんかで勝てる訳ないだろうが！」

「やってみなきゃ分からないだろう？」

其処では二人の男女が言い争っているのが見える。

どちらも見覚えがある。

『カガリ・ユラ・アスハ』と『アスラン・ザラ』である。

どうやらアスランがザクに乗ろうとしているのをカガリが止めているのだ。

それを見たシンの頭の中の電球が光った。

「おおい、ちよつと退けえ！」

「え？」「え？」

二人は声のした方を見た。

其処には学生服を着たシンが走ってきたのだ。

しかし当然二人はシンと面識などない。

したがって。

「だ、誰だ君は？」

「お前なんでこんな所に居るんだ？早く逃げろ！死にたいのか？」

当然こうなるのは分かっていた。

確かに逃げたいのは分かっているんだがこのまま放っておいたらあの甲児の事だから絶対コロニーに穴を開けるのは目に見えている。

モビルスーツがあるなら何とか通信出来るはずだ。

これは正に天の助けでもあったのだ。

「悪いけどそいつは俺が使わせて貰うぜ」

「な、何言ってるんだ！素人に扱える訳ないじゃないか！」

「少なくとも、あんたよりは扱えるぜ！アスランさんよ」

「な！何で俺の名前を？」

軽く挨拶しながらシンはザクに乗り込む。

アスランは何故シンが自分の名前を知っているのか分からず困惑していた。

それもそうだ。

今アスランは此処では本名は名乗っておらず、『アレックス・ディノ』と言う名前で通っているのだ。

すると、そんな二人の目の前でザクが悠々と起き上がる。

シンが起動させたのだ。

「やれやれ、まさか今更ザクに乗る羽目になるとはな・・・懐かしいねえ・・・って、言ってる場合じゃねえっての!」

ザクを起動させると即座にシンはマジンガーZを見た。案の定であった。

高速で動き回るモビルスーツに手を焼いている。

しかしそれはモビルスーツも同じであった。

流星のガンダムもマジンガーの装甲に傷を付ける事は無理なようだ。それで、攻撃が全く当たらない甲児がとうとう業を煮やして武器を使用しようとしているのだ。

マジンガーの両目が光っている。

恐らく光子カビームだ。

「待て待て待てえ!それを此処で撃つなあ!」

「な、何だ?って、その声はシンか?」

突如自分に向かって来た緑色のモビルスーツを見て甲児は驚いた。だが、その中からシンの声がしたのでシンが乗っていると思いとりあえずザクを見た。

「どう言う事だよシン!何で武器を使っちゃ駄目なんだよ?」

「当たり前だ!此処はコロニーの中なんだぞ!下手にマジンガーの武器を使って外壁に穴なんか開けた日には俺達揃って宇宙に投げ出されちまうんだぞ!」

「はあ?宇宙?何言ってるんだよお前?此処が宇宙だったのか?マジンガー?」

「マジもマジ!大マジだったの!外見てみる!まんま宇宙じゃねえか!」

シンのザクが外のガラス方面を指差す。  
其処を甲児が見る。

確かに其処からは満天の星空が見える。  
しかしそれだけでは宇宙とは断言しづらいのでは？

「夜なだけなんじゃねえのか？」

「じゃあ何で月が無いんだ？」

「え？あ、そうか！って・・・マジかよおおおおおおお！」

やっと事の重大さに気づいたのか甲児が頭を抱えて叫ぶ。

それに呼応してなのかマジンガーZも同じようなポーズで叫ぶ。  
それを見ていたシンは勿論三機のガンダムも困惑していた。

「もしかして・・・お前、知らなかったのか？」

「うん・・・危うくコロニーに風穴開ける所だった」

「後数分遅かったら今頃俺死んでたって訳ね・・・背筋が凍りそう  
だよ全く」

とことん運が良かったと思うシンであった。

しかしそんな二人に向かって再びガンダム達が攻撃を再開してきた。  
ビームライフルの応酬がこちらに迫ってきているのだ。

「撃て撃て！幾ら堅牢な装甲でもその内ぶっ壊れる筈だ！」

「おうよ！とつととぶっ壊してやる！」

「落ちろオオオ！」

それぞれ勝手な事を言いながらマジンガーとザクに向かって攻撃を  
掛けてくる。

マジンガーは平気だがザクはそうではない。

避けなければ一撃でお陀仏にされるのだ。

「冗談じゃねえぞお！こつちに武器って言ったらトマホークしかねえじゃねえか！」

「そりゃこつちだつて同じだつての！武器が使えないでどうやってあいつ等をぶちのめしや良いんだよお！」

シンが避けながら、甲児が受けながら愚痴りあう。そんな時であった。

青いガンダム。『アビス』ガンダムが鎌を振り上げてマジンガーの横に立っていたのだ。

「まずは腕一本頂きい！」

アウルが叫ぶ。

そして鎌が振り降ろされる。

一瞬の内であった。

正に一瞬の内にマジンガーの腕が切断されたのだ。

それを見てニヤリとするアウル。

しかし、切断した腕は突如ロケットを噴射して飛びまわったのだ。

「な、何だあれ？」

「まさか！ドラグーンシステムを内臓してるのか？あのロボットには？」

ステイングがマジンガーの腕をドラグーンと勘違いして見ていた。だが、そんな物は内臓してない。

あれこそマジンガーの十八番とも言える武器「ロケットパンチ」なのだ。

「へへえ、武器が使えないなら直接ぶん殴れば良いだけじゃねえか！それでも食らいやがれえ！」

間髪入れずにもう片方の腕を放つ。

二本の腕が自由自在に飛びまわり三機のガンダムを追いまわしていく。

「くそっ！どうなってんだよ！あいつ無茶苦茶じゃねえか！」

「俺に言つな！あんなロボットデータに無かったぞ！どうなってんだ？」

「腕が飛ぶ・・・凄い！」

ステイングとアウルは半ばパニックを起こしており、ステラは腕を飛ばすマジンガーを好奇心の目で見ていた。

「おい、頼むから調子に乗って外壁をぶち抜くのはやめてくれよな」

「大丈夫だって、そんなへましねえよ」

シンの言葉に甲児はシレっと言う。

しかし、悪い事は起こる物であり。

3機を追い詰めていざトドメと行こうとして加速したは良かったのだが、咄嗟に3機がかわしたのだ。

しかもその背後は外壁であった。

勿論言葉にもあるように車は急に止められないのと同じようにロケットパンチは急に止まらない。

従って、二本の腕はそのまま外壁をぶち抜き真空の宇宙に投げ出されてしまったのだ。

マジンガーのロケットパンチは地上用なので宇宙では意味を持たない。

即ち戻ってこないのだ。  
それを見た甲児とシンは啞然としていた。

「あ・・・やっちゃまった」

「ドアホオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

テヘツと言った感じで呟く甲児にシンが怒鳴る。

「チャンスだ！良い感じに穴が開いたぜ！此処から脱出するぞ！」

「へへ、案外間抜けが操縦してんだな。助かったぜ」

「もう帰るの？」

「ああ、ネオが待つてるしな。それにあんな化け物と戦ってたら折角奪ったガンダムがぶっ壊されちまう」

ステイングが腕を失ったマジンガーを見る。

本来なら両腕を失った時点で無力化してあり撃墜のチャンスなのだが、どうにも襲う気になれないのだ。

アイツにはまだ武器が隠されている。

そう思えたのだ。

ステイングのその判断は正しかった。

もしあのままマジンガーを攻撃していたら内臓兵器の雨霰を食らい即座に撃墜されていた筈である。

「とにかく、今は機体を持ち帰るのが最優先だ！ステラ！行くぞ」  
「分かった」

3機のガンダムはマジンガーの空けた外壁の穴から外へ逃げ出しました。

「やべえ！逃げちまう！追わねえと！」

「って、お前のマジンガー地上用だろう？宇宙じゃ使えねえだろうが？」

「え？何で？」

「ジェットじゃ宇宙は飛べないの！常識だろうが馬鹿野郎！」

「何だと！も一辺言ってみやがれ！」

甲児とシンがその場で喧々囂々言い合う。

その間に外壁は予備の外壁が張られとりあえず空気の流出は防げたようである。

しかし、問題はまだ起こる物でもある。

「ん？おい、あれなんだ？」

「え？」

甲児のマジンガーが上空を指差す。

それを見てシンも空を見上げる。

其処には一機の戦闘機とモビルスーツの上半身と下半身を思わせるパーツが飛行しているのだ。

その三機が空中で合体して一機のモビルスーツとなった。

その後、後から出てきた別の戦闘機から放たれたパーツと合体するとガンダムの色が赤くなった。

そのままマジンガーとザクの前に降り立ったガンダムは巨大な刀剣型の武器を振るいこちらを見る。

「まだこんな事を！そんなに戦争したいの！貴方達は？」

ガンダムから声が響いた。

だが、その声はシンが聞き逃す筈がない。

紛れも無い、その声はマユの声だったのだ。

そして、今そのマユの操る『インパルスガンダム』がこちらに敵意

を回しているのだ。

第7話 激突！ガンダム 対 マジンガー（後書き）

次回はマジンガーZ&ザク 対 インパルスガンダム・・・になる  
のかな？

第8話 パラレルワールド(前書き)

今回はギャグメインでしょうね

## 第8話 パラレルワールド

此処はザフトの新造艦ミネルバのブリッジ。

今其処には艦長のタリア・グラディスと副長のアーサー・トライン。そしてその他面々が揃っている。

んで、その中で・・・

「・・・・・・・・・・」

シンと甲児は固まっていた。

と、言うのも皆して甲児とシンを睨んでいるのだ。

黙らない訳がないのだ。

「もう一度聞くが、本当にお前等は連合のスパイじゃないんだな？」

金髪の青年「レイ・ザ・バレル」がしつこく甲児達に問い詰める。

かなり気が入ってるのかメチャ怖いのですが。

「だから何度も言ってるだろうが！俺達は日本の東城学園の学生で！光子力研究所に連絡入れてくれたら一発でわかるんだってば！」

甲児が何度も身振り手振りで言う。

しかし、遭えて言わせて貰おう甲児。

この世界に東城学園も、ましてや光子力研究もないのだ。

何しろ此処は間違いなくシンの世界なのだ。

この世界ではモビルスーツが主流となり人間同士が戦争をしている世界なのだ。

従ってそんな世界にマジンガーなどと言う化け物は存在しないのだ。

「さつきから何言ってるの貴方？光子力研究所なんて建物今まで聞いた事無いわよ」

赤いショート頭の『ルナマリア・ホーク』は腰に手を当てて首をかしげてそれを見ていた。

「聞いた事ないだつて？何言ってるんだよ！俺は確かにあの地球で機械獣から日本を守ってたんだぜ！それを知らないってどういう事なんだよ！」

「機械獣？何だそれは？新しいモビルスーツの事か？」

「だからあ！モビルスーツじゃなくて機械獣！」

ルナの呟きに甲児が大声で叫ぶ。

相当声がかかったのか皆耳を抑えている。

とりあえず甲児は保留にしておいて皆は一斉にシンを見る。

「で、問題はコイツだな」

「ねえ、あんた何者なのよ？」

レイとルナがまるで不審者を見るような目でシンを見ている。

前の世界ではチームメイトであったが、この世界では完全にシンの事を知らないのだ。

だから此処ではシンは不審者扱いをされているのだ。

「だから前にも言っただろう！俺はシン・アスカって言って。ザフト軍ミネルバ隊所属のパイロットだって！」

「それは何度も聞いたわよ！だけどねえ。そのシン・アスカって言うたらもう何年も前に死んでるのよ！それが何でこうして生きてるのか不思議なのよ！」

ルナが屈んで言う。

因みに言い忘れたがシンと甲児は両手両足を嚴重に縛られている。暴れられないようにする為だ。

まあ確かに甲児が暴れたらとんでもない事になるのは目に見えている。

何しろコーデイネイターであるシンを一発KOしたのだ。

並のコーデイネイターでは甲児に勝てる道理は無いだろう。

「皆さん、そろそろ良いんじゃないでしょうか？」

そんな甲児とシンに対してマユが助け舟を出した。

幾ら自分の知っている人間じゃないとは言え兄と瓜二つの少年がこうして尋問されているのは見るに耐えないようだ。

つてか、マジでシンはマユの兄貴なのだが世界が違うせいか本当にそうは思えないようだ。

「けどねえマユ。こいつももしかしたら連合のスパイかもよ？」

「その考えは否定出来ないな。もしかしたら我々を内部から攪乱する為に送り込まれた者かもしれないしな」

マユの言葉にルナとレイは未だに警戒を緩めない。

未だに痛い視線がこっちに飛んでくる。

すると、そんな中からアスランとカガリがやってきた。

今のカガリの頭には包帯は巻かれて居ない。

あの時シンがザクに乗り込んだので怪我する事がなかったのだ。

「それじゃ今度は俺の質問に答えて欲しい。何故俺の名前を知ってたんだ？其処の学生服の君」

アスランがシンを指して尋ねる。

確かに今シンは東城学園の学生服を着ている。  
しかしそんな少年が何故自分の事を知っているのか疑問に思っ  
たのだ。  
それを聞いたシンは正直返答に困った。

【俺は未来から来た。お前等のこれから俺は分かる】  
等と言っても到底信じて貰えないのは必然である。  
つてかそんなSF的展開実際こっちだつて信じられないのだから。  
しかしそうなるとう本当にどうやって説明したら良いか困った物であ  
る。

そんな時、再びシンの脳裏にあの光景が浮んだ。  
そのシルエットを見た時またピーンとシンの脳裏に閃きが浮んだ。

「キラさん。そうだ！あんたの事はキラさんから聞いたんだよ」  
「キラ！お前、キラと知り合いなのか？」

アスランを押しつけてカガリがシンの両肩を掴み上げた。  
つてかマジで痛いのですが。  
肩にカガリの指が食い込んで血が出そうなんです。  
マジで痛い。肉が引き千切れそう。

「いたた・・・ちょっと会っただけだよ！そんな知り合いつて程じ  
やないつて。只其処でアスランつて言う友人が居るつてのを教えて  
もらった程度なんだよ」

「なんだ、そうだったのか・・・すまなかつたな」

そう言つて肩を掴んでいた手を離す。

マジで痛かった。

思わず涙目になる。

「んで、これから俺達をどうするつもりなんだ？何度も言うが俺達は連合のスパイじゃないから情報を引き出そうとしても無駄だぜ」  
「その件は承知しているわ」

シンの言葉に今まで黙認を決め込んでいたタリアがやってきた。

「確かに貴方達は連合とは無関係のようね。でも、まだ問題があるのよ・・・其処の・・・ええと」

「兜甲児つてんだ。宜しうな美人な艦長さん」

甲児が場の空気を読まずに軽口を叩く。

それをタリアは軽くスルー！。

流石は艦長、大人だ。

「ええと、甲児くんね。貴方の乗っていたモビルスーツ・・・なのかしら？とにかく、あのマジンガーZと言うのは一体誰が作ったの？モルゲンレーテ社製なの？」

「あれは俺のお爺ちゃんが作ったんだ」

「お爺ちゃん？」

「ああ、兜 十蔵つて言つて有名なロボット工学の科学者だぜ」

「兜 十蔵？聞いた事ないな。それに一人の科学者があんな高性能のモビルスーツを作れるのか？」

「嫌、無理だろう？モビルスーツ一機作るのだって幾ら掛ると思ってるんだ？」

皆口々に言い合う。

確かに問題である。

一科学者があのようなロボットを作れる筈がない。  
それこそ天文学的な費用が必要になる。

「それで、あのマジンガーZの装甲材質と動力源は何を使ってるの？まさか・・・Nジャマーキャンセラーを使ってるの？」

「何だ？そのNジャマーズルゼイ？ってのは？マジンガーの装甲は超合金Zでエネルギーは光子力だぜ」

「光子力？何だいそれは？」

今まで影が薄かったアーサー副長が此処に来て甲児に問い掛けた。すると甲児は答える。

「光子力ってのは富士山麓にある希少鉱石『ジャパニウム』ってのから作れるエネルギーなんだ。微量で膨大なエネルギーになる上に無公害のクリーンエネルギーなんだぜ」

「嘘！そんな夢のようなエネルギーある訳ないじゃない！」

「何言ってるんだよ。現に目の前にそれを使って動いてるマジンガーが居るじゃねえか」

「そ、そりゃそうだけど・・・」

甲児の言葉にルナは黙り込んだ。  
確かにその通りなのだ。

「因みにその光子力の出力は原子力の数十倍はあるぜ」

『な、なんですとおおおおおおおおおおおおおお！！！』

シンのボソリと呟いたそれを聞いた一同はそれこそカルチャーショックを受けたと言う。

そりゃそうだ。

原子力・・・即ち核を越えるエネルギーなどともない代物なのだから。

シンは思った。

つくづくマジンガーってのは化け物なんだなあと。

\*\*\*

それから甲児とシンは揃って独房の中に入れられていた。  
一応スパイ容疑は晴れたようなのだが何しでかすか分からない為こ  
うした処置を施しているそうだ。

「あゝあ、何でいきなり牢屋に入れられなきゃならないんだろっ  
んあ」

「俺に聞くな・・・ったく、あの時だっってこうしてなきゃとんでも  
ない事になってただろうが！」

シンは言いながらあの時を思い出した。

それはシンと甲児の前にインパルスが現れた時に遡る。

此処から先は過去の話になるので会話部分を少し変更させて頂き  
ます。

【あ、あれ？奪われたGは？】

辺りを見回しながらマユが呟く。  
それを見た甲児とシンが。

【【あっち】】

揃って声に出しある方向を指差す。

と言ってもマジンガーには腕がないので肘その者を向けたのだが。  
見ると其処には巨大な風穴が開いた跡があり、其処から3機のGが  
逃げ出した事は明白であった。

【え？まさか・・・逃げられたの？】

【悪い、俺が戦ってたら間違って風穴開けちまったんだ】

【何て事するのよおおおおおおおおおおおおおおおお！  
！！】

大声で叫んだマユの乗るインパルスの巨大な剣がそのままマジンガ  
ーに振り下ろされる。

【あ、危ねえ！】

それを咄嗟にマジンガーは白羽取りの要領でキャッチする。

しかしあれって実際にやれと言われて出来る事ではない。

生身で出来てもそれをロボットでやるのは相当な運動神経がなければ無理なのだ。

それを甲児は平然とやってのけている。

やっぱり、兜甲児は化け物だ。

シンは内心そう思っていた。

【て、てめえ・・・いきなり何しやがる！ビックリしたじゃねえか  
！！】

【あんだこそなんてことしてくれたのよ！大事なGを逃したなんて・・・あんたもしかして連合の回し者なの？】

【知るかあ！ってかあれは事故なんだよ！故意にやった事じゃねえ！】

お互いに喧々囂々言い合いながらギリギリと激しい鏝迫り合いを演じている。

見ている分にはかなり面白いのだがこのままにしていると流石に不味いと思ひシンは止めに入る。

【お、おい・・・お前等その辺にしておけ・・・】

【ジャマしないで！】

【ジャマすんな！】

だが、そんなシンのザクに向かってマユのインパルスと甲児のマジンガーの同時の蹴りが炸裂する。

【ぐえっ！】

それを食らったシンが声を上げて吹き飛ぶ。

そしてそのまま後方にあつたビルに叩きつけられる。

普通ならこのまま失神しているだろうがシンは違う。

何しろ甲児の世界で散々鍛えられたのだから並大抵の事ではまず気絶すらない。

そして、先ほどの一撃が完全にシンの中の何かを切断したらしく。

【てめえらしい加減にしゃがれゴラアアアアアアアア！】

完全に切れたシンのザクが殴りかかる。

これにより三つ巴の完全な泥仕合並の喧嘩に発展してしまった。

マユのインパルスも何時の間にか剣を手放して拳で殴っている。それに負けじと甲児のマジンガーも太い腕で殴りかかる。そして、シンのザクは・・・一足先にリタイアしていた。無理もない。ガンダムとマジンガー相手にザクで殴り合いをしようものなら装甲が保つ筈がないのだ。んで、それからすぐにミネルバと護衛のモビルスーツ数機がやってきて即座にマジンガーとシンのザクは取り囲まれる事になった。だが・・・

【えっと・・・ねえ、レイ・・・】

【何だ？】

ザクに搭乗したルナはレイ問い掛ける。

【この場合・・・どうしたら良いの？】

【俺に聞くな】

二人が困った顔で見ている物、それは腕を掴み会ってレスリングの力比べをしているインパルスとマジンガーZ。

そしてその足元でスタボロになって倒れているザクの姿であった。

正直回りの兵士達も困っていた。

すぐに突入して拘束したいのだがどうにもあの二人には今は近づけない雰囲気なのだ。

下手に近づけば間違いなく巻き添えを食らう。

因みに言うが、腕と言ったがマジンガーは腕がないので肘のままガンダムと力比べしているのだ。

その為回りからしてみれば異様過ぎる光景である。

あのインパルス相手に腕なしのモビルスーツ（？）が互角以上の喧嘩（？）をしているのだから。

【て・・・てめえ・・・いい加減ギブアップしやがれ！勝負はついただろうが！】

【な、何言ってるのよ！私はこれでもザフトレッドなのよ！こんな所で負ける訳にはいかないのよ！】

【お前等・・・いい加減にしるよ・・・】

結局その光景は二人が力尽きるその時まで続けられる事になった。それは今からおよそ2時間後であったりする。

## 第8話 パラレルワールド（後書き）

次回はいよいよマジンガーが宇宙でデビュー……するかな？

## 第9話 最強のナチュラル(前書き)

マジンガー宇宙デビューはちょっと先送り。

甲児とシン

パラレルワールドで色々やらかす・・・かな？

## 第9話 最強のナチュラル

一体どれ位経ったのだろう。

シンと甲児は未だに独房の中であった。

幸いトイレはあるし定期的に体を拭く為のセットなどが届けられるので不便はないがとにかく暇なのであった。

「暇だなあ・・・何かこう面白い事ないのか？」

「俺に聞くな！俺だってこの時間をどう過ごしたら良いか困ってる  
とこなんだよ」

腕を組んで壁にもたれ掛ってる甲児にベットの上で腰を降ろしてる  
シンがそう突っ返した。

と、言うのも独房の中ではとにかくやる事が無い。

甲児は仕方なく一人しりとりをしたり壁を見ていたり元の世界で聞  
いていた歌を口ずさんだりしていた。

だが、シンは一人考え込んでいた。

（この世界ではマユが生きていて、代わりに俺が死んでいる。そし  
て、それを起にマユがザフト軍に入隊した。認めたくないがどうや  
ら俺は一種の『パラレルワールド』に来ちまったって事なのか）

シンは内心呟いていた。

この世界ではマユが生きている。

普通なら泣いて喜びそうなのだが、反面悲しくもなってくる。

それは、どうやらこの世界では変わりに自分が死んでいるようなの  
だ。

その為最初はマユもまるで自分を幽霊の様に見ていたのだから溜ま  
った物じゃない。

恐らく暫くシンのガラスのハートは傷だらけになってしまっただろう。盗んだバイクで走り出したくもなる・・・訳ないか。

とにかくこの世界ではマユがザフト軍の赤服・・・即ち『ザフトレツド』として生きているのだ。

因みにかなりのエリートだ。

どれ位エリートかと言うと株式会社で部長クラス辺り位偉い気がする。

(・・・何か物凄く話しが逸れた気がする)

シンが感づき始めたので話を戻すでしょう。

とにかくこの世界は一種の平行ワールドなのだ。

時間の誤差。

多次元空間。

その他諸々・・・。

とにかく今シンはその平行ワールドに来ているのだ。

(マユ・・・お前に俺と同じ悲しみは味あわせない！絶対に俺が止めてやる・・・その為にはまずあの人に会わないと)

シンの脳裏に一つの影が浮んだ。

かつて自身の戦争に赴くきっかけを作った人物であり自由を象徴とするガンダムに乗った青年。

そして、最強のコーディネイター・・・その名は『キラ・ヤマト』。恐らく彼もこの世界に居る筈だ。

だとしたら絶対に会わねばならない。

しかし、其処で大いなる誤算が生じた。

それは、シンはそのキラ・ヤマトと言う青年を知らないのだ。

声は何度か聞いた事はあるがそれもすっかり忘れ去ってしまい顔も全然覚えてないのか忘れたのか記憶が曖昧になっていた。

唯一の手掛かりとしては彼は戦後オーブに身を寄せていた事位である。

(参ったなあ……こうなったらオーブを虱潰ししらみつぶしに探していくしかないって事か……)

そう思うと思わず溜息が漏れる。

小国とは言えオーブは結構広い。

そんな中を徹底的に探すのはかなり難しい。

しかも、変に感じられると彼自身身を隠してしまう恐れがある。なるべく刺激しないように会わなければならぬのだ。

「面倒臭えなあ」

「ん？何がだ？」

「何でもねえよ」

自身の放った言葉に甲児が反応し、それにぶっきらぼうに返す。そんな感じで時間は悠々と過ぎていくのであった。

\*\*\*

その頃、マユは自室で膝を囲んで座っていた。所謂体育座りの様な物だ。そしてうな垂れていた。

嫌、考え込んでいたと言った方が正しい。

(あれは・・・間違いなくお兄ちゃんだった・・・少し雰囲気違ってたけど、見間違える筈がない・・・でも・・・お兄ちゃんはその時・・・)

マユの脳裏にあの時の記憶が蘇る。

それは、彼女がまだ民間人だった頃である。

オーブは連合の攻撃により戦闘状態に入ってしまった。

幼いマユとシンを連れたアスカ一家は必死に脱出艇まで急いでいた。だが、その際にマユは自身の携帯を落としてしまう。

それを取りに行こうとしたが母が止める。

それを兄であるシンが取りに行ったのだ。

「あつた！」

茂みの中でシンはマユのであろうピンク色の携帯を見つける。

それを手にした時、後ろから声が響いた。

「お兄ちゃん！」

「ま、マユ！馬鹿！何で来たんだ！早く行け！」

「嫌だ！もしお兄ちゃんに何かあつたらどうするの？」

何故親元を離れて危険な場所に来たかで二人は喧嘩になってしまう。

マユは兄であるシンが心配だったのだ。

また、シンも妹であるマユの身を案じていたのだ。

しかしそんな思いが故に二人は意見をぶつけ合い喧嘩となってしまうのだ。

そして、マユはシンにこう言い放った。

「お兄ちゃんの馬鹿！大嫌い！」  
「マユ……」

今でも覚えている。  
そして、今ではそれを後悔していた。  
それは、その直後であった。

「!!!!……マユ！危ない！」

咄嗟にシンがマユを庇うように倒れこむ。  
その直後であった。  
背後から激しい爆発が起こった。  
戦闘の流れ弾が生じたのだ。  
シンが妹であるマユを庇うようにしたのだ。

「うう……痛っ……お、お兄ちゃん……大丈夫？」

爆風から自身を守った兄であるシンに声を掛ける。  
だが、一向に声は返って来ない。  
疑問を感じ目を開くと、其処には額から血を流して動かなくなったシンが居た。

「お……お兄ちゃん！お兄ちゃん！」

マユが必死にシンを揺さぶる。

グラリ

その揺さぶりに呼応したのかシンの体がゆっくりと地面に倒れた。  
その背中を見た時、マユは驚愕した。

シンの背中には爆風で飛び散ったであろう金属の破片が背中に無数に突き刺さっていたのだ。

其処から止め処なく血が溢れ出ている。

それが死因であったのだろうか。

たった一人の妹を守る為に、この世界の『シン・アスカ』は生涯を閉じた。

「う……嘘……嘘！お兄ちゃん！……お兄ちゃん！」

信じられないと言った顔でマユは必死にシンを揺さぶる。

もしかしたら生きてるかもしれない。

そんな淡い期待を胸に必死に揺さぶる。

だが、そんなマユの手から伝わって来たのは、血のぬめりと、冷たい感触であった。

「そつだ！お父さんとお母さんは！」

マユはハツとして先ほど両親の居た地点を見た。

其処には確かに両親は居た。

但し、血まみれの状態で動かない骸となった状態で……

「おい、其処の君！大丈夫か？」

そんなマユを偶然オーブの軍人が発見した。

そつと肩を掴んで立ち上がらせる。

だが、その時であった。

「嫌……嫌嫌嫌……嫌あああああああああああ！！！！」

マユは大声で泣き叫んだ。

一瞬で、一瞬の内にマユは天涯孤独の身となってしまったのだ。兄を罵倒し、その直後に兄が死んだ。

もうどれだけ後悔しても後の祭りである。

幾ら謝りたくても、もう謝れない。

謝る人は、もうこの世に居ないのだから……

「あの時……どうしてあんな事を言っちゃったんだろう」

時は戻り、マユは深く後悔していた。

そして、突然現れた彼『シン・アスカ』を思い出した。

年としては自分が知っている頃のより少しばかり大人になってる。

恐らくそれでも自分より二つ上だろう。

それも、何処となく体つきもがっしりしていた。

以前のよりも遅しくなった兄が居たのだ。

だが、一体何故……何故なのだろうか？

「マユ、居るか？」

「レイ!？」

ふと、扉の向こうから声がした。

声色からしてレイのである。

マユが扉の方を向きその声に応じる。

「どうしたの？」

「ちょっと困った事になった。一緒に格納庫に来てくれ」

「ちょっと待ってて」

マユはレイを通路に待たせる。  
その間に目に溜まった雫を拭い去り、服を整える。  
流石に乱れた服のままレイに会う訳にはいかない。  
チームメイトとしては其処はきちんとしなければならないのだ。

「お待たせ」

少ししてマユが扉を開ける。

其処にはやはりレイが居た。

だが、何時もより少し顔が強張っている。

「どうしたの？」

「例の謎のモビルスーツの件だ」

「謎のモビルスーツ？それって・・・あのマジンガーZの事？」

マユの言葉にレイは頷く。

どうやら当たりのようだ。

しかしそれが一体どうしたのだろう。

確かに形状は何処となく、と言うか完全にモビルスーツとは違っている。

コクピットも剥き出しだし第一武装が非現実的過ぎるのだ。

腕が自由に飛びまわり、しかも一撃でコロニーの壁をブチ破った。

それだけでも相当な威力である事が伺える。

だが、宇宙では使えないらしく、あの後宇宙空間で浮んでいた腕をミネルバで回収したのだ。

そして今はマジンガーZはミネルバの格納庫でヴィーノ達が調査件整備を行っている。

其処で問題が生じたのだろう。

「一体どうしたの？」

「あのマジンガーZなんだが・・・OSが全く存在しないんだ」

「え？・・・本当？」

「本当」

「マジ？」

「マジ！」

「・・・レイ」

「・・・忘れてくれ」

レイが思わず視線を背けてボソリとそう呟いた。

それにはマユも笑みを零すのを抑える。

普段はクールなだけに先ほどのレイは笑えたのだ。

「で・・・そのマジンガーにOSが無いってのは本当なの？」

「ああ、マジンガーZのコクピットに入ったんだが、ボタンだらけでOSを入力するキーボードが全く見当たらないんだ。それで今ルナが試乗しているんだが散々な事になってな。変な踊りは踊るわ壁に激突するわで全く使い物にならない。あれでは宝の持ち腐れだ」

通路を歩きながらレイの話の聞く。

とんでもない話だ。

OSの無いモビルスーツを扱う、即ち全ての動作を手動で行わなければならぬと言う事になる。

そんな事可能なのだろうか？

だが、以前見た時にはそのマジンガーをまるで自身の手足の様に扱っていたのを覚えている。

相当の熟練したパイロットなのだろうか、あの少年は。

「兜・・・甲兎・・・だっただっけ？」

「ああ、今は独房に居る・・・どうする？格納庫に行くと言ったが、

アイツ等の所に行つて見るか？」

「うん、行く！色々話も聞きたいし」

レイの言葉にマユは頷き道を変えた。

\*\*\*

足音が近づいてくる。

音からして二人。

それをシンと甲児は感じ取った。

「ん？飯の時間か？」

「さつき食つたばつかだろつ」

「あれが飯？冗談じゃねえや！」

甲児がそう言つて先ほど手渡されたパックの入れ物を投げ飛ばす。中には栄養剤が入っていた。

「こんな物飯じゃねえよ！米食わせる！肉食わせる！」

「ねえよ！此処は宇宙なんだぞ？そんなもんある訳ないだろう！」

「畜生！宇宙なんて来るんじゃないか！地球が恋しいよお！」

「うるせえぞ馬鹿甲児！お前は黙ってるって事が出来ねえのか？」

流石にシンも半ば怒りが溜まっていた。

売り言葉に買い言葉。

そんな言葉があるようにシンの言葉を聞いた甲児の額に青筋が浮びシンを睨む。

「てめえ、俺に喧嘩売ってんのか？」

「だったらどうする？」

「面白え・・・あの時みたいに一撃でKOしてやんよお」

「あべこべに張り倒してやるよお」

お互い腕を鳴らして立ち上がり睨みあう。

そして互いの拳が唸りを上げる。

それから少ししてであった。

レイとマユは独房で繰り広げられている光景を目の当たりにしていた。

「これって・・・」

「・・・何があつたんだ？」

其処には双方の拳が顔面にめり込んだ状態の甲児とシンの姿を見た。それから全く動かないのだ。

所謂硬直状態である。

だが、少しして、お互いフラつくように後ろに下がる。

そして額を押さえる。

「ってて、てめえ何時の間にか良いパンチ持つようになったじゃねえか！」

「つつう、お前も相変わらず痛いパンチだなあ・・・鼻血が出たらどうすんだよ？」

双方罵りながら睨みあう。

その光景を見たマユは呆然としていた。

（何だか違う・・・この人はお兄ちゃんに似てるけど・・・お兄ちゃんはこの間に暴力的じゃなかった・・・もっと優しくて、それで・・・喧嘩は弱かった）

マユは喧々囂々と罵りあう二人を見てそう思ったのだ。しかし、時間とは貴重な物だ。

これ以上二人の喧嘩を見物してる訳にもいかない。

「お前達、出る・・・一緒に来て貰う」

レイがそう言っただけで独房の扉をあける。

それを見た二人が以外そうな顔をしていた。

「何だ？釈放か？」

「とりあえずはな、一緒に来い。お前もだ」

レイがそう言っただけでシンを見る。

それにシンは頷いた。

特に断る理由もないしこのままこんな退屈な独房に居るよりはマシだ。

そう思いながらシンと甲児は独房の中から出た。

そんなシンとマユは互いに見合う。

生き別れた兄と妹。

世界は違えどこうしてめぐり合えたのだ。

だが・・・

「こちらです。ついてきて下さい」シンさん  
「・・・」

マユの口から出たのは以外な言葉であった。  
シンさん。

自分を兄としてではなくシン・アスカ個人としてマユは見たのだ。  
それにシンは少しだがショックを受けた。  
だが、何時までもショックを受けてる訳にもいかない。

「ああ、分かったよ、マユ」

そう返す。

折角再会できたのだが、二人の前には大きな壁が立っていた。  
今のマユはザフトレッドのエリート。

それに対してシンは只の民間人。  
その壁はとても大きかった。

\*\*\*

「な、何じゃこりゃあ!」

格納庫に辿り着いていの一歩に声を発したのは甲児である。

見ると格納庫内は滅茶苦茶になっており、そんな中でマジンガーが  
変なポーズで倒れていた。

すると、その頭部にあるパイルダーの中からこれまたヌルリと人が  
出てきた。

ザフトレッドを表す赤いパイロットスーツを着ている。

「な、何なのよこのオンボロモビルスーツは！言う事全然効かないじゃない！」

ヘルメットを外してルナはマジンガーを見てそう呟く。

「何だとお！俺のマジンガーをよりによってオンボロだとお！聞き捨てならねえぞ！」

その声が聞こえたのか額に青筋を浮かべて甲児が歩み寄る。進路には勿論ルナが居た。

「あんたは・・・確か鎧甲一だっけ？」

「兜甲児だ！覚えるこの脳みそ筋肉女！」

「な、何ですってえ！」

これまた額に青筋を浮かべたルナが甲児を睨む。

このままだとまた喧嘩が始まりそうだ。

「まったく、おいしい加減にしるよ甲児」

「離せシン！俺はどうしてもコイツに一言言ってやんなきゃ気が済まねえんだ」

「そんなのは後にしろっての」

「何よアンタ！横からしゃしゃり出てきて何様よ！あっち行ってなさいよ！」

「お前も今は下がれ！此処で喧嘩しても迷惑なだけだろうが」

ルナと甲児の間に入ってシンが止めに入る。

しかし二人の火花は一向に消える気配がない。

「さっきのオンボロつての取り消せ！」

「オンボロはオンボロじゃない！OSも無いし操縦方法は滅茶苦茶だし・・・あれが動くって事態奇跡だわ！」

「お前等いい加減にしろよ。回りの目を少しは気にしてだなあ・・・」

「

「五月蠅えぞ地味野郎！」

「引っ込んでなさいよ影薄！」

「んだとゴラアアア！」

その一言がシンの脳内にあつた『堪忍袋の緒』を断ち切つた。

そしてシンとルナと甲児による三者三様の泥沼の喧嘩が始まつた。

「てめえら人が下手に出てりや調子に乗りやがつて！今度と言つ今度は容赦しねえからな！この脳みそ筋肉に暴力女！」

「んだとお！地味な癖に言いやがつたなあ！」

「そうよ！影が薄い癖に口だけは一端じゃない！」

「テメエらにだけは言われたくねえええええ！」

『そりゃこつちも同じじゃあああああああああ！』

お互いに叫びあいながらの喧嘩が描かれていく。

そんな中、マユとレイは初めて見る物が見れた。

それは、一種のギャグマンガ模様の砂煙が舞い上がり顔と手が出ると言つワンシーンであつた。

「ね、ねえ・・・どうする？レイ」

「とりあえずほとぼりが冷めるのを待つしかないな」

レイとマユはとりあえず三人の喧嘩が終るのを待つ事にした。

だが、どの時代にもKYと呼ばれる者は存在しており・・・

「おい、何の騒ぎだ!」

格納庫の騒ぎを聞いてやってきたのは青髪が特徴のアスランである。その隣にはカガリ、そして艦長のタリアアやアーサア、そしてギルバートが居た。

「ギル!」

「レイ、お客人はどうやら元気な方達のようにだね」

「お見苦しい場面をお見せしてしまい申し訳ありません」

「嫌嫌、元気なのは結構な事だよ」

深く謝罪するレイにギルは笑って許した。

そんな時にアスランはと言えば。

「おい、お前等良い加減にしろ!聞えないのか?」

三人の喧嘩の仲裁に入った。

だが、其処には運悪く。

「この野郎!」

「くたばれえ!」

「ぶべらあ!」

其処には甲児とシンが互いに渾身の拳を放った場面であった。

そして、それによって板ばさみ状態になったアスランはそのままヨロヨロと倒れたのであった。

「あ、あんた・・・確か、アスラン・・・『アスラン・ツラ』だったっけか?」

甲児が名前を言う。

だが、それを聞いた途端アスランの両目が光り輝いた。

「『ツラ』じゃない！『ザラ』だああああああ！」

渾身の叫びと共にアスランの右ストレートが甲児に迫る。  
だが……

「危なっ！」

それを間一髪で避ける甲児。

そして……

「何すんだてめえ！」

反撃とばかりに右ストレートをお見舞いする。

これがまた気持ち良い位にアスランの顔面にめり込む。

数歩下がったアスランの顔はまるで梅干のようになっていた。  
そしてそのまま倒れる。

「あ……あれ？おい……大丈夫か？」

甲児が倒れたアスランを揺さぶる。

だが、アスランは痙攣を起こしたまま起き上がらない。  
それを見たシンは細目で見っていた。

（俺達コーディネイターを一撃で倒すって……やっぱり甲児は化け物だな）

シンは甲児を改めて化け物として見る事にした。

だが、一言言わせて貰おう。

お前も少なからず化け物化してるんだぞシン・アスカ君。

## 第9話 最強のナチュラル（後書き）

甲児

「にしてもシンと良いアスランと良いコーディネイターって案外脆いんだなあ」

シン

「お前が強すぎるんだよ・・・ナチュラルなのにコーディネイターを殴り倒すって凄いで？」

アスラン

「顔が痛い・・・何でこうなるんだ？」

甲児・シン

「自業自得だろう？」

どうも作者です

今回は色々と原作と違うような場面がチラホラ見受けられたと思われ  
れます

その中には『あれ？違うんじゃない？』的な事もあるかも知れませんが  
まあ作者も原作を見ながら進めていくつもりなのでどうか温かい目  
で見守っていて下さい  
ではでは

## 第10話 マジンガー、宇宙へ(前書き)

簡単なキャラクター紹介を挟みます

シン・アスカ(16)

元居た世界ではアスランに倒されそのまま終戦を迎える筈が突如起こった次元渦に巻き込まれマジンガーの世界に来てしまったある意味不幸な主人公。

来ていきなり甲児に喧嘩を売ったは良いが殴りかかった所返り討ちに会う。

以降は甲児とは喧嘩友達のような間柄となり良く喧嘩をするようになる。

そのせいか知らぬ間に頑強な体になってしまっていた。

今では甲児の鉄拳を食らっても平気になっている。

現在はミネルバに乗艦しているが只の民間人扱いとなっている。

兜甲児(16)

この小説のもう一人の主人公。

突然異世界から来たシンに喧嘩を売られ、殴りかかられたのを逆に返り討ちにしたたり、アスランの拳を軽々と避けてカウンターを当てるなどコーディネイターを捻り潰している辺り凄い人。

コズミックイラ組曰く『最強のナチュラル』とも呼ばれている。

OSを全く搭載していない(当たり前)マジンガーを手足のように扱いパラレルワールドを爆走する予定。

シンと同じくミネルバに乗っており、こちらも民間人扱いとなっている。

喧嘩っばいのが性分のせいか所所でトラブルを起こす。

シンとのコンビはすっかり定着した模様でもある。

マユ・アスカ(14)

パラレルワールドでザフトレッドとなったシンの妹。

元居た世界では死亡しているがこちらでは逆に生存。

しかしそのせいかシンと同じく弱冠強気な性格になっている。

過去に兄と喧嘩してしまいその際に酷い言葉で罵倒してしまった事を未だに引きずっており、パラレルワールドからやってきたシンに対し兄が生き返ったと思ったが、性格や体格の違いや自信の前に立つ壁から距離を置くようにした。

こちらではインパルスガンダムのパイロットを務めているのだが原作とは違い甲児達がG3機と交戦した後に逃亡させてしまったので交戦しないままとなってしまうた。

これからどう転んでいくのかは今の所定かではない。

つてな訳でスタート！

## 第10話 マジンガー、宇宙へ

甲児、シン、ルナの三人の喧嘩は一先ず納まり、今では皆それぞれの場所に居る。

ルナはとりあえずマジンガーの操縦でかなり頭をぶつけた上に甲児やシンと喧嘩した際に出来た痣を手当てする為妹のメイリンと共に自室に行った。

んで、甲児とシンはと言うと・・・

「・・・・・・・・」

「あちゃあ・・・こりや完全に延びてるぜ」

「アスラン・・・お前そんなに虚弱だったっけか？」

シンと甲児は揃って大の字になり倒れて動かなくなったアスランを見下ろしていた。

ハッキリ言おう。

かなり無様だ。

喧嘩の仲裁に入りながらも自身も喧嘩に参加したシンも無様と言えば無様だが、こちらはそれ以上の代物であった。

何しろ喧嘩を止めようと割って入ったは良いがタイミング良くシンと甲児のクロスカウンターを諸に食らい、その後逆上して甲児に殴りかかった物の方法の体で返り討ちにあい現在に至るのだ。

「しっかしコーディネイターってのは皆こんななのか？弱すぎるぞ？」

「え？もしかして・・・お前ナチュラルなのか？」

アスランと共に来ていたカガリが驚いた目で甲児を見る。

「ああ、良く分からないけど俺はそのナチュラルってのらしいぜ」「  
「凄いな。ナチュラルがコーディネイターの、しかもアスランを一  
撃で殴り倒すなんて・・・それにしても」

カガリは肩膝をついてアスランを揺さぶる。

「起きろ！この馬鹿！」

「うん・・・ズラじゃない・・・ザラだあ〜」

カガリが声を掛ける中、アスランはそんな風に唸っていた。  
どうやら甲児に間違えられたのが相当堪えているようだ。

仕方なくカガリはアスランを放っておきそれを殴り倒した甲児を見  
る。

「ところで、さっきのあれってもしかして『クロスカウンター』つ  
て言つのか？」

「お！分かるのか？そうだぜ！相手の攻撃を利用しての攻撃！正に  
必殺の一撃だぜ」

「うむ、あの明〇のジ〇ーの必殺武器だな。私も好きだったぞ」

「え？マジ？お前それ知ってるのか？」

「当たり前だ！コミックス全巻持ってるぞ」

何時の間にかカガリと甲児で格闘技による話が始まった。

最初はある漫画の話だったのだが何時の間にか格闘技の話に発展し  
ていた。

こいつら、相性良すぎだろう。

今此処で延びてるアスランよりも・・・。

(アスラン、下手したら甲兎にカガリ取られるぞ)

動かないアスランにシンはそつと囁く。

だが、それでもアスランは起き上がらない。

そんな時であった。

艦内に突然の警報が鳴り響く。

それは敵襲を知らせる警報であった。

「なんだ？この音は？」

「敵だ！マユ、出るぞ！」

「ええ、ルナにも早く出るように言って！」

その場に居たマユとレイがそれぞれのMSに乗っていく。

「くそお、俺のマジンガーだって宇宙で戦えればよお」

「何言ってるんだ？もう宇宙用の整備だったら終わってるぞ」

「え？マジか？鶏冠へアー」

「誰が鶏冠へアーじゃ！これは一箇所だけ色変えてるだけだ！」

ヴィーノがマジになって叫ぶ。

確かに其処まで言われたら反論したくもなる。

シンは頷いた。

だが、其処で一つの問題が浮んだ。

「なあ、俺はどうすれば良いんだ？」

そう、シンには乗れるMSが無いのだ。

さっき乗ってたザクはそのまま乗り捨ててしまったし、ミネルバには予備のMSなんて1機も無い。

あるとすればルナの乗る予定のザクしかない。

「ま、お前は俺が敵を蹴散らしている間其処で体育座りして待ってな」

「って、体育座りかよ!」

「ツツコムとこ其処オ!？」

甲児の悪態にシンが叫び、それにヴィーノがツツコミを入れた。そんなこんな事をしている間にもルナのインパルスとレイのザク、そして甲児のマジンガーが漆黒の宇宙に出て行く。

「すげえ!一面星だらけだ!これが宇宙なのかあ?」

甲児は始めて見る宇宙を見て感動していた。そんな甲児にマユの通信が入る。

「聞こえる?甲児くんって・・・何て格好してるのよアンタは!」

「は?何て格好って・・・何時もの格好だけど?」

そう、甲児の姿は何時ものパイロットスーツなのだ。即ち、機密性『ゼロ』なのだ。

「宇宙には空気が無いのよ!そんな薄っぺらいガラスが割れたら一巻の終わりよ!」

「平気平気だって、んなもん当たんなきゃ良いんだしよお」

マユの言葉に甲児がヘラヘラしながら返す。

確かに当たらなければ良いのだが当たった場合はどうすると言っの  
だろつか。

「どうしよう？レイ」

「仕方あるまい。このままにしておくか。幸いマジンガーの性能は先ほどの戦闘で実証済みだしな」

「試作型とはいえ、3機のGを圧倒する力・・・とんでもないわね」

マユは改めてマジンガーを見た。

一見するとブリキの玩具にも見えなくもない外観からは想像もつかない力を秘めている。

まずはコロニーの外壁をブチ破ったあの腕だ。

ドラグーンシステムを内臓しているのか分からないがとにかく自立して腕が飛びまわり敵を追い詰めるのだ。

そして、恐らくあのマジンガーの中には更に強力な武装が隠されている気がするのだ。

何故なら今マジンガーは言わずとも丸腰なのだから。

\*\*\*

ミネルバから出撃したマジンガー達に対し3機のGと1機のMAが向かってきていた。

「ほおう、あれが例のアンノウンとか言う奴か。まるでブリキの玩具だなあ。本当にあれが強いのか甚だ疑問だなあ」

MA『エグザス』に乗っている仮面をつけた青年ネオが呟いていた。

「油断してんじゃねえぞネオ！あいつは只のMSじゃねえ！丸腰だけどアイツの中にはそれこそ武器の塊だからな」

「そりゃ恐ろしい。ザフトってなあ何時の間にそんな殺人兵器を作ったんだあ？」

「ってか、あれってザフトが作ったのか？あんなMSが居るなんて情報なかったぜ」

「うんうん」

アウルが情報の誤差を怒りステラが頷いていた。

それにはステイングとネオも同様に悩む。

だが、すぐに考えを切り替える。

情報が違っていたとしても目の前に答えがあるのだ。

何はともあれあれを倒せば良いだけなのだ。

そう思い一気にマジンガー達に迫る。

「さあて、噂のアンノウンの実力、見せて貰おうかあ！」

ネオが言い放ち、小手調べとばかりにレールガンを数発お見舞いした。

コレ位ならかわすだろうと思ったからだ。

だが、予想に反してマジンガーはそのレールガンの攻撃を直撃したのだ。

「おいおい、幾ら何でも鈍重すぎないかあ？あんなの普通避けられるだろう？」

苦笑いを浮かべながらネオが言う。

だが、その爆煙の中から現れたのは轟音と共に飛んできた二本の腕

であった。

「んな！なんじゃありゃあ！」

咄嗟にネオはそれをかわす。

だが、その腕はまるで操られてるかの如くそのままネオのエグザスを追い回す。

「ちいつ！まさかドラグーンシステムを搭載しているのか？にしても、それじゃ何てビームを撃つて来ない？まさか腕だけつてのか？そんな馬鹿な？」

顔では冷静を装っているが内心は混乱しっぱなしであった。

そりゃそうだ。

いきなりこんなドケイ腕を飛ばされたのだから普通はパニックに陥らない方がおかしい。

ともあれそんなネオを見た3機のGが腕を叩き落そうと向かって来た。

だが、それこそが誤算であった。

突如マジンガーの腕から巨大な二本の刃が現れたのだ。

その刃に驚いた3人は咄嗟にかわすも、その一撃でステイングの乗っていたカオスのガンポット、そしてアウルのアビスのジャベリンを切断した。

「何だあれ？いきなり腕から変な物が出やがったぜ！」

「それよりあれ、PS装甲を貫通しやがった！気をつける！あのMSにPS装甲なんざ紙に等しいぞ！」

ステイングが二人に言う。

そのまま腕が悠々とマジンガーに戻っていく。

其処には全く無傷のマジンガーZが居た。  
凹みどころか装甲に傷すらついていない。  
恐ろしい装甲であった。

「てめえ、いきなりぶっ放してくるなんざ卑怯じゃねえか！ビックリしたぞこの野郎！」

（な、何なんだ？あいつは）

ステイングはこれまた驚く事になった。

あのマジンガーと言うのも驚かされるのだが、乗っているのは戦争を全く知らない素人のようだ。

戦争に綺麗も汚いも正々堂々も卑怯もないのだ。  
あるのは勝利と敗北、そして生と死のみなのだ。  
なのにこの男はいきなりそんな事を叫んだのだ。

「は、はっ！戦争やってるんだぜ！綺麗も汚いもある訳ねえだろう！」

とりあえずマジンガーに向かってステイングは叫んだ。

その一言がそもそもいけなかった。

その一言が甲児の中の堪忍袋の緒を断ち切ったのだろう。

「上等だこの野郎！そっちがその気ならこっちだっつて徹底的にやってやらあ！」

そう言ってきた直後であった。

マジンガーの体からありとあらゆる武器が飛んできたのだ。

数百発の先端がドリルのミサイル。

戦艦に搭載されているような大型ミサイル。

高出力の光子のビーム。

数万度の熱線。

それらが一気に放たれてきたのだ。

勿論二本の腕も自在に飛びまわっている。

それらの内どれか一つでも当たればこんなガンダムなどバラバラにされてしまうのは目に見えていた。

「ちよつ、何だよこれは！あれだけの武器が一気に出るなんて反則じゃねえか！」

「どうなつてんだよ！デカさは同じなのに武器要領が桁外れじゃねえか！」

「お前等当たるなよ！当たったら痛いじゃすまないからな！」

「うわあ、綺麗な花火だなあ」

「花火じゃねえ！」

マジンガーから放たれた攻撃の雨霰にステイング、アウル、ネオの三人は四苦八苦しており、唯一ステラはそれを綺麗と言い張って目を光らせていた。

それに一同がツツコミを入れる。

どうやら此処ではステラはかなりの天然のようである。

だが、驚いているのは彼等だけではない。

「い、一体何なのよあのマジンガーってのは？一体どういう構造をしたらあれだけの武器が内臓出来るって言つの？」

「正に全身凶器だな」

マユが驚きの声を上げてレイが悪態をつく。

まあ、どう見てもこのまま放って置けば時期にケリがつくだろつと言つのは明白なのであった。

\*\*\*

その頃、ミネルバ艦内ではシンガルナのザクに勝手に乗り込もうと  
していた。

「おいアンタ！何勝手な事してんだよ！」

「このまま放つて置けるか！」

「って、お前MSの操縦出来るのかよ？素人じゃ無理だぞ！」

ヴィーノが乗り込もうとしているシンに対し叫ぶ。

しかしそんな事シンには無用の心配であった。

何しろ元の世界ではザフトレッドと呼ばれるエリートだったのだ。  
そんな彼がザクを操るなど朝飯前なのであった。

「心配すんな。MSの操縦なら手足を動かすのと同じだぜ」

「手足を動かすって・・・お、おい！」

「良いからさっさと退け！死ぬぞ鶏冠頭」

「だから鶏冠じゃねえ！」

遂にはシンにまで言われて完全に切れ気味になるヴィーノ。

だが、そんなヴィーノを無視してシンを乗せたルナマリア専用ザク  
は出撃した。

ミネルバから出撃して間も無くの地点ではやはりな光景が映ってい  
た。

甲児のマジンガーZがこれでもかと言わんばかりの攻撃の雨霞をお

見舞いしていたのだ。

今でこそステイング達はどうか避けているがそれも時間の問題である。

何しろ3機のGはまだ試作機であるのに対しマジンガーは言ってみれば永久的に動ける動力を持っているのだ。

即ちパイロットが諦めない限り攻撃は続くのだ。

そして甲児の性格は誰よりもシンが理解している。

まず間違いなくガンダムを落とすつもりだ。

「いい加減にしろこの馬鹿野郎！」

声を上げるなりいきなりマジンガーの後方からシンのザクの飛び蹴りが炸裂した。

それを食らったマジンガーがキリキリと宇宙の中で回りながら落ちていく。

「うわわあ！ど、どうなってんだあ？つてか誰だあ！後ろから俺に蹴り入れたやろうはあ！」

「てめえ、少しは手加減つてのを知らないのかこの馬鹿野郎！」

「その声・・・てめえかシン！」

甲児のマジンガーが赤いザクを睨む。

それに呼応するかの様に赤いザクのモノアイが光る。

「何の真似だこの野郎！人のジャマしやがってえ！」

「アホかてめえ！マジンガーの武器なんか使った日にゃガンダムなんか木っ端微塵だろうが！」

「それがどうしたってんだよ！相手は敵なんだろう？倒すのが当たり前じゃねえか！」

「そうかよ？じゃあ中に乗ってる奴はどうすんだ？」

「あ！」

シンの言葉で甲児はハツとした。

そうだ、あの中には人が乗っているのだ。

下手に撃墜すれば中のパイロットも死亡してしまうのだ。

それだけは甲児も出来ない。

幾ら憎たらしい相手だからって殺したくないし甲児も人殺しになりたくないのだ。

それからマジンガーの攻撃の手が止んだ。

「な、何だか分からんが今がチャンスのような」

「その様だ。とにかく今は三十六計逃げるに如かずだ！行くぞお前等！」

ネオを中心として3機のGが一気に後退していく。  
追いたいと思ったマユだが、それは適わなかった。

何故かと言つと・・・

「それよりさっきの蹴りは一体何のつもりだゴラア！」

「だからそれは謝ったじゃねえか！いい加減にしろよ！」

マユとレイの前ではシンと甲児が機体ごとで再び火花を散らしていたのだ。

このままだところちらにも被害が及びそうなのでその辺で止めて欲しいのだが。

しかし読者の方々は分かっておられると思うのだが、現在シンが乗っているのはルナマリアのザクなのだ。

従って・・・

『ゴラアアアア！私のザク勝手に使ってるのは誰じゃあああ！』

「げえっ！不味い！」

シンのモニターの目の前にいきなりドアップでルナの顔が映った。それを見た途端シンは青ざめる。

「え・・・ええと・・・ルナさん、これには深い訳があ・・・」

『言い訳なら地獄で聞きましようか？』

「あうう・・・」

「な、何か知らないが・・・元気出せよ」

さっきまでの険悪な雰囲気とは逆に意気消沈とするシンの乗った赤いザクにマジンガーの腕がそっと乗っかる。

\*\*\*

無事にミネルバに帰還したシンに待っていたのはルナマリアの怒涛のお仕置きであった。

「さあて、よくも勝手に私のザクを乗り回してくれたわねえ」

額に大量の青筋を浮かべたルナマリアの前でシンは正座させられていた。

今回の非はまあシンにある訳なので回りも弁解は出来ない。

って言うか弁解した途端半殺しにあうのは目に見えているので出来

ないのだ。

「な、何卒大岡裁判を」

「そんなんするかあ！一辺三途の川渡つて来いやああ！」

「んぎゃあああああああああああああああああ！」

それからの光景は余りに凄惨な光景だったので執筆できないのであった。

まあ、言ってしまうと、巨大なト○ホークを担いだルナの前でシンがぶっ倒れていると言った感じである。

そして、それを見ていた一同は以降『彼女を怒らせないようにしよう』と硬く誓うのであった。

特に甲児辺りは。

（な、何かさやかさんを見てるみたいだなあ）

甲児、そんな事を本人に聞かれたら今度はお前が半殺しにあうから気をつけるよお。

## 第10話 マジンガー、宇宙へ（後書き）

今回から予告を入れます

かなりふざけた感じで・・・

タリア

「さあさあ、皆様お立会い！」

今回のSEEDZはあの忌まわしき地『ユニウスセブン』での一戦に御座います！

突如現れた謎の部隊がそのユニウスセブンを地球に落下させようってんだからさあ大変！

急ぎ向うミネルバ隊！その中には勿論甲児とシンの姿もありやした。しかししかし、慣れない宇宙戦のせいかマジンガーは本領発揮が出来るはずミネルバ隊は徐々に追い込まれていくってんだからあていへんだあ！

次回はどうなる？どうなる次回は？

次回も見逃せねえ見逃せねえ！」

レイ

「・・・何やってんですか？艦長」

タリア

「・・・深くは問わないで」

笑天風な予告でした

第11話 ブレイク・ザ・ワールド(前書き)

お待たせしました

今回もかなり滅茶苦茶な設定だと思いますがどうぞ

## 第11話 ブレイク・ザ・ワールド

マジンガー初の宇宙戦デビューは散々な結果に終わってしまった。と、言うのもあれだけ撃つたと言うのに一機も撃墜出来ず、結局弾薬を無駄に使用しただけに終わったのだ。

「何でもつとちゃんと狙わなかったの？」

「良く言うだろう！下手な鉄砲数撃ちや当たるって言うのがさあ」

「だからって積載量の殆どを使用して一機も撃墜出来ないとは・・・

「ある意味天才ね」

レイとマユが甲児をある意味凄いと言う感じの目で見ていた。

その視線が甲児には何故か痛々しかった。

「止める！そんな目で俺を見るな！あれ？何だろう？涙が出てきた」

気がつくとも甲児は格納庫の隅で体を縮めて蹲っていた。

「ま、まあ甲児も悪気があった訳じゃないんだし、此処は穩便にしてやるっじゃないか」

しかし其処はフォローの達人であるアスランが止める。そしてそつと甲児の肩に手を乗せる。

「だから、お前も元気を出せ甲児」

「うう、有難うよお、アスラン・ツラア・・・」

「だから、俺はツラじゃなくてザラだって言ってるだろう」

慰めてもらったと言うのに結局名前を間違えられる不幸なアスランであった。

んで、その頃のシンはと言うと・・・

「ほらほら！まだ其処もあそこもそこかしこも汚れが残ってるんだからねえ！」

「へいへい」

勝手にルナのザクを乗り回したと言うのでその罰としてルナのザクを徹底的に磨き上げると言う罰を食らっていた。

「埃一つでもあったらまた百叩きじゃ済まないわよ」

「ぜ、善処します・・・」

ルナの脅しに真っ青になりながら頷くシンであった。

そして、彼の脳内では『ルナってこんなに怖かったっけ？』と疑問に思う節があったりした。

\*\*\*

此処は崩壊したプラント「ユニウスセブン」。

其処には1機のMSが居た。

『不幸な世界だ・・・こんな世界・・・滅んだ方が良いんだ』

日の光のせいで黒くなってしまい見えなかったのだが、そのMSには大きな翼と、そして二本のアンテナが生えていたのであった。そして、確かにそう呟いたのだ。

『滅んだ方が良いと・・・』

「だあああゝ、終わったあああ！」

その頃、シンはようやくザクの掃除が終り解放されたばかりであった。

「よ、お疲れ」

「おう、すっかりザクを徹底的に磨き上げるなんざ無茶な事言いやがるぜあいつ」

「だな」

そう言いながらシンと甲児は互いに座り窓の外から移る星を見ていた。

宇宙なので星がしょっちゅう見えるのだ。

「しっかし此処ってすげえよなあ。宇宙に出られるんだからよお」

「そっか、甲児達の世界じゃまだ宇宙に進出してないんだな」

「ああ、羨ましい限りだぜ。俺達も早く宇宙に出たいぜ」

甲児は憧れの目で宇宙を見ていた。  
それをシンは見ていた。

「へえ、甲児って馬鹿だけかと思っただけどそんな風な夢とか持つてるんだなあ」

「つまり前だろう！俺は将来自分の作った宇宙船で宇宙に行くんだ」「自作の宇宙船か・・・良いなあ、それ」

シンも甲児の夢には同意していた。

彼にだって夢はあったのだ。

しかし、戦争と言う悲しい事が起こってから彼は夢を見る暇などなかったのだ。

「何だ？シンには夢がないのか？」

「正直、元の世界じゃ戦争ばっかやってたからそんな事考えた事もなかったよ」

「じゃあ今から考えれば良いじゃねえか。俺達には未来があるんだぜ」

「未来か・・・そうだな、少し考えてみるよ」

甲児の言葉にシンは頷く。

そうか、今の俺には未来があるんだ。

元の世界では戦争に負けて何も無くなった気がしたが、まだ俺は生きています。

明日がある。

そうと分かると自ずと頭の中に色々な事が浮んでくる。

考えてみれば今の自分はまだ甲児と同じ十代なのだ。

やろうと思えば何でも出来る気がしてきた。

そんな時であった。

「大変だ！ユニウスセブンが突如コースを変えたって知らせが来た

ぞ！」

「何！」

突如慌ててそう言いだす兵士の言葉を聞きシン達はギョツとした。

「ユニウスセブン？おい、それって何だ？」

「プラントの名前で・・・俺達コーディネイターにとって忌まわしい物だよ」

シンは語る。

そう、そのユニウスセブンこそがナチュラルとコーディネイターとの血で血を洗う皮肉な戦いのきっかけでもあったのだ。

そして、今回もまたそのユニウスセブンが戦いのきっかけとなってしまうのだ。

\*\*\*

真つ先にユニウスセブンに辿り着いたミネルバは地球への落下コーラスへ向けて落下していくユニウスセブンにモビルスーツ、そしてマジンガーを降下させる。

「でっけえ、こんなのが地球に落ちたらとんでもない事になるんじゃないかねえのか？」

「そうだ、これが地上に落下したら世界規模の大災害になる。なんとしても阻止しなければ」

レイが言う。

「けどよあ、どうやってそれを阻止するんだ？細かく砕くのか？」

「そうだよ甲児くん、あそこに見えるメテオドライバーでユニウスセブンを粉碎して大気圏上で蒸発できる位の大きさにするの」

眉が指差す方には数台のメテオドライバーとそれを設置するモビルスーツ部隊の姿があった。

そして、その中には一機の白いザクが部隊に指揮を送っていた。

「あのカラーリングは、ジュール隊のイザーク隊長か」

「ジュール隊？イザーク？誰だそりゃ？」

当然イザークを知らない甲児はそんな反応をする。

すると白いザクがこちらに気付き振り返る。

「貴様等か、例のミネルバ隊と言うのは・・・それにしてもあれがマジンガーとか言うモビルスーツか？一体どんな構造をしたらそれが動くのか疑問だが」

「何だよ。お前俺のマジンガーに文句でもあるのか？」

「何だ貴様！俺はそんな言い方はしてないぞ！貴様こそ口の聞き方に気をつける」

「けっ、お生憎様だなあ！俺あ軍人じゃねえんだよ！こっに見えても極普通の学生だい」

「学生がそんなのに乗るか普通？」

等とイザークと甲児の口論が勃発している横ではイザークの部下であるディアツカがマユ達と会話をしていた。

「ま、メテオドライバーの起動までもう少しだからその間これを死

守すれば良いんだけどよ。この分なら無事に終われると思うぜ」

「そうですか」

「なんだか、私達が来たのって取り越し苦労だったみたいね」

「油断したら駄目ですよルナマリアさん。こんな時に限って敵が来る事だつてあるんですから」

「アハハ、そんな訳・・・」

『そんな訳ない』といい終わる前に突如として後方で爆発が起こった。

見れば数機のモビルスーツと1機のメテオドライバーが破壊されたのだ。

「何!」

「隊長! 敵です! 敵が出現しました」

「落ち着け! 敵機は何だ? 連合のモビルスーツか? それとも奪われたGか?」

「それが・・・ジンです!」

「何だと!」

部下の言葉にイザークは驚愕した。

見ればその通りであった。

頭上を飛びまわっているのは見間違える事なきジンであった。

しかもそのジンはただのジンではなかった。

高速戦闘に特化したハイマニューバであった。

「は、早え・・・何てスピードだよ! これじゃ狙えねえ」

マジンガーがキョロキョロしており、甲児が唸る。

「貴様のモビルスーツにはロックオン機能はないのか?」

「んなもん有る訳ねえだろう！攻撃なんざ大概は山勘だよ」

「一体何なんだそのモビルスーツは？ハイテクなのかローテクなのか微妙な所だな」

疑問に思っイザーク。

だが、話している場合ではない。

その間もジン部隊は次々にモビルスーツとメテオドライバーを破壊していく。

「くっ、各機散開！なんとしてもメテオドライバーを死守しろ！」

「あいよう、この俺とマジンガーに任しておけて！」

全機が一斉に散開する。

するとそれに呼応するかの様にジン部隊も皆陣形を変えてきた。

一斉にバツと散ったのだ。

そして多方面から一斉にマジンガーに向けて攻撃を行ってきた。

爆風と衝撃がZに襲い掛かる。

「いつてえ！この野郎、まずは俺から潰そうって腹か！」

甲児が唸る。

見ればマジンガーには傷一つついていない。

やはりこの世界ではマジンガーに傷を負わせる事が出来る戦力はいないようだ。

それにはジン部隊は勿論ジュール隊も驚かされる。

「ゲウレイト。どう言う装甲してんだあのマジンガーってのは？」

「私にも正確な装甲はわかりません。ですがあれは明らかに我々の技術を遥かに超えた代物だと言う事が分かります」

ディアツカの言葉にレイが返す。

「お返しだ！こいつを食らいやがれ！」

返しにマジンガーの両目が光り閃光が放たれる。放たれた閃光はそのままジンを貫き爆散していく。だが、そのジンを倒した直後であった。

「な、何だ・・・この嫌な感じは・・・」

突如甲児を不快感が襲った。

まるで物凄い乗り物酔いをした様な感覚であった。

甲児の顔が青ざめ異様な吐き気が襲い掛かる。

その時、甲児は思いだした。

この世界の人間はあのモビルスーツに乗って戦っているのだ。即ち、甲児は今人を殺したのだ。

「どうしたマジンガー？何処かやられたのか？」

「な、何でもねえ・・・何でもねえよ」

問い掛けるイザークに甲児は返すも先ほどまでの覇気が感じられない。

その間もジン部隊は再び陣形を立て直して襲撃を再開する。

だが、マジンガーはその場に棒立ち状態になってしまった。

甲児が動かせない状態になってしまったのだ。

「ちっ、各機、マジンガーを援護しろ！今のマジンガーは木偶の坊同然だ！」

イザークが命じる。

彼の言うとおりであった。

戦争を体験した事の無い甲児にとってこれは辛い体験であったのだ。初めてこの手で人を殺してしまった。そんな思いが甲児を苦しめていたのだ。

「しつかりしなさいよ甲児！それじゃマジンガーが泣くわよ！」

「甲児君、しつかりして！」

戦いを行いながらもルナとマユが必死に声を掛ける。

だが、それでも甲児は中々立ち直れないでいた。

その時であった。

猛烈なスピードでマジンガーに攻撃を仕掛けるジンが居た。

「我等の邪魔をするなあ！」

「ぐわ！」

甲児が声を上げる。

ジンの体当たりを食らったのだ。

その衝撃にマジンガーは地表に倒れる。

「な、何だてめえは！」

「我等はザラ議長の意思を継ぐ者だ！貴様等がデュランダル如きの思想に踊らされているがザラ議長こそ真に我等を導く存在であったのだ。それを貴様等はふぬけおつてえ！」

中に乗っていたサトーはそう言い放ち腰に挿してあった重斬刀を抜き放ちマジンガーに向けて振るう。

最初の一撃はどうにかマジンガーが手を使い防ぐ。

だが、それを今度は連続して放ってきたのだ。

「野郎！調子に乗る・・・」

反撃しようとする甲児の手が止まった。  
今此処で反撃に武器を使えば中に乗っている人間は死んでしまう。  
その思いが甲児に攻撃を躊躇させたのだ。

「甲児さん！今助けに・・・」

他の者達がマジンガーの救援に向おうとしたが、それをジン部隊が妨害する。

今、マジンガーは窮地に立たされていたのだ。

\*\*\*

ミネルバからそれを見ていたシンは居ても立ってもいられなくなっ  
た。

そして格納庫へ向う。

「おい、空いてるザクとかあるだろう？」

「さっき拾ったのが1機あるけど、まさかお前乗る気か？」

「当たり前だ」

「無茶言つな！さっき上手く行ったからって今度も上手く行く保障  
は無いんだぞ！第一此処は宇宙だ。無重力戦闘なんかお前経験した  
事ないだろう！」

ヴィーノがシンを指差して言う。  
だが、それに対してシンがフツと笑う。

「心配すんな。こつ見えても無重力戦闘の評価は高評価だったからよ」

「こ、高評価つて、お前本当に何者だよ？」

「見りゃ分かるだろう？只の学生だよ」

そう言つてザクのコクピットに身を滑り込ませる。  
慣れた手つきで機体を起動させてハッチを閉じザクに火を入れる。

「ハッチ開けてくれ！これじゃ発進出来ないからよお」

「ちつ、どうなつても知らねえからな！ハッチ開ける！」

言われた通りにハッチが開き、前方には満天の星空と落下していく  
ユニウスセブンが見えた。

「待つてるよ皆・・・シン・アスカ。ザク、行きまあす！」

久しぶりに叫びながらシンがザクを発進させる。

目指すは只一つ。

マジンガーを狙う隊長機である。

その時、サトーのジンは反撃出来ないマジンガーに更に攻撃を仕掛  
けていた。

「トドメだ！我等の恨み、思い知れえ！」

サトーが恨みの籠った言葉でそれを放つ。

「ふざけんじゃねえ！」

だが、それをシンのザクがショルダータックルで吹き飛ばして防ぐ。

「し、シン！」

「甲児、この馬鹿野郎！」

シンが甲児を見て怒声を上げる。

「ば、馬鹿だと！」

「ああ、大馬鹿だてめえは！何縮こまってやがるんだ！お前は誰かを守る為にそれに乗ったんじゃないのか？それともてめえは只カッコイイからって理由で乗ってたのか？」

「な！」

シンの言葉は甲児の胸に突き刺さった。

そうだ、自分は何故マジンガーに乗ったのか。

それはたった一つである。

誰かを守りたいからだ。

大切な家族を、人々を、世界を守る為に甲児はマジンガーに乗ったのだ。

決して自己満足の為ではない。

「戦争は確かに辛いさ。だけどなあ、お前がそんな事で縮こまったら、守れるもんまで守れなくなっちゃうんだぞ！それでもてめえは良いのかよ？」

「良い訳ねえだろうが！」

甲児は叫び立ち上がる。

その時の甲児の目には熱い闘志が宿っていた。

もう迷いはない。

「へっ、やっと吹っ切れたか」

「あんがとうよシン。さあて、反撃開始と行くぜえ！」

「おうよ！」

シンと甲児が叫び突撃する。

そのシンの前にはサトーの乗るジンが迫って来ていた。

「おのれ、我等の邪魔をするか！？」

「アイツは俺がやる。お前は雑魚を頼む」

「任せろ」

互いにうなずき合い分かれる。

シンはトマホークを抜き放ちジンの刀に対抗した。

激しい火花が漆黒の宇宙に光り輝く。

「貴様如き小僧に何が分かる！家族を奪われた者の苦しみを、怒りを、憎しみを貴様如き小僧が分かるはずがない！」

「分からねえよ！少なくとも逆恨みしてるてめえの心中なんざ知らねえし知りたくもねえ！」

「何？」

「戦争で家族を失ったのがてめえだけだなんて思うんじゃねえ！大切な人を失ったのは他にも居るんだ！それが辛いのは俺だって分かる。けどどなあ、その苦しみを罪の無い奴にぶつけるてめえのやり方は虫唾が走るんだよお！」

怒号が響き渡った。

それと同時にザクがジンを蹴り飛ばす。

体制を立て直そうとしたジンの目の前にはザクの手元から投げ飛ば

されたトマホークが飛来してきていた。  
飛んで来たトマホークはそのままジンの頭部に突き刺さりメインカ  
メラを潰す。

コクピット内に漆黒の闇が訪れる。

「お、おのれえ！」

「あんたがするのは復讐じゃない！死んでいった家族の分まで生き  
る事だろう！それを履き違えて何が復讐だ！そんな事に他人の名前  
を使うんじゃない！喧嘩するんだったら他人の禪ふんし使わずにてめえで  
やりやがれえ！」

ジンの頭部に突き刺さっていたトマホークを抜き取りそのまま頭部  
と両腕を切断する。

これでジンは最早達磨ダルマ同然であった。

そしてそのままジンの胴体に蹴りを入れて倒しコクピットにトマホ  
ークと突きつける。

「チエックメイト・・・日本風で言うなら詰みだ。機体を捨ててさ  
つさと逃げな。別に背中からあんたを撃つ気はねえよ」

「小僧・・・舐めるなあ！」

サトーが叫ぶ。

するとジンのバーニアが限界まで噴出しそのまま急加速していく。  
その先には最後のメテオドライバーがあった。

「まさか・・・あいつ！」

「妻よ・・・娘よ・・・今俺は復讐を果たす・・・見ている！」

サトーが決死の叫びと共にジンごとメテオドライバーと激突した。  
それによりメテオドライバーは全壊し、全てのメテオドライバーは

破壊されてしまった。

「不味い、このままではユニウスセブンが地上に落下するぞ」

「悔しいが、作戦は失敗だ・・・此処は全員撤退するしか・・・」

「まだだ、まだ諦めちゃいねえぜ！」

皆が撤退しようとする中甲児だけが立ち上がった。

「こ、甲児君、一体どうするつもりなの？」

「こうなったら最大出力でブレストファイヤーをぶっ放してこいつを溶かしてやる」

「無茶よ！これだけの体積を溶かすなんて出来る筈ないわよ！」

ルナの言うとおりである。

残骸とは言えユニウスセブンの大きさはかなり大きい。ぱっと見ただけでもミネルバの数倍はありそうである。

それを溶かすなど普通は出来ないのだ。

だが、甲児はそれでも尚諦める様子はなかった。

「マジンガーは・・・マジンガーZは伊達じゃねええ！」

マジンガーはすぐさまユニウスセブンの落下コースに陣取る。

両手を天に突き翳して仁王立ちして胸を大きく張り上げる。

Zの胸に取り付けられた赤い放熱板が熱を帯びていき、やがてそれは赤い熱線となりそれに降り注いだ。

徐々にユニウスセブンが赤身を帯びていく。

だが、それでもあれだけの質量を溶かしきるのは難しい問題でもあった。

「野郎、こうなったらとことんまでやってやる！どっちが碎けるか

勝負だ！」

甲児が叫び更に出力を限界まで押し上げる。メーターが徐々に危険ゾーンへと入っていく。辺りに警告音が響き渡る。

これ以上放出し続ければ爆発する危険性だつてある。

だが、それでも甲児は手を止めない。

どちらかが先に倒れるまでやめないつもりなのだ。

甲児の額に汗が滲み出た。

目の前には巨大な岩の塊が迫ってきている。

そして後ろには広大な地球が見える。

そして、この岩の塊が地球に落下すれば多大な被害が出るのだ。

なんとしても止めねばならないのだ。

だが、マジンガーのブレストファイヤーを受けても尚巨大な岩の塊は迫って来ていた。

最早目の前にまで来ている。

もう此処までが限界であった。

「くっ……こん畜生おおおおお！」

悔しさの声を上げ、甲児は拳を突き出した。

それに連動するかの様にマジンガーも目の前の岩に殴りつける。するとどうだろうか。

あの巨大な岩に亀裂が入りそれが元で巨大な岩の塊がバラバラになつてしまったのだ。

「え？」

「嘘だろ！」

「グ・・レイトオ」

それに一同は息を呑んだ。

あの巨大な塊を殴っただけでバラバラにしてしまったのだから。最もその前にありつたけの力でプレストファイヤーを浴びせた為に岩事態が脆くなっていたと言うのもあるのだが、それでもあれだけの大きさを砕くのは相当な物である。

しかし、それでも地上の被害は甚大な物でもあった。

各地では津波などの被害があり多くの死傷者が出たそうである。更に、悪い情報はこれだけではなかった。

「お、おい！何だよこれ？」

ミネルバに帰還した甲児が真っ先に見て叫んだ映像がこれである。其処にはユニウスセブン落下事件の首謀者として映し出されたジンの姿があったのだ。

これによりユニウスセブンの地球落下を引き起こしたのはザフトであると民衆に信じ込まされる結果となってしまった。

そして、これにより再び果てしない戦いの幕が上がってしまったのである。

続く・・・

第11話 ブレイク・ザ・ワールド（後書き）

ルナ

「1番！ルナマリア・ホーク！シンを血祭りに上げます！」

シン

「ふざけんなあ！」

メイリン

「2番！メイリン・ホーク！早口言葉を言います！  
えいと、なまむぎゃっ！」

シン

「早速噛んだし！」

レイ

「3番！レイ・ザ・バレル！30秒間黙ります！」

シン

「そりゃもう放送事故じゃあ！」

マユ

「4番！マユ・アスカ！次回予告します！」

シン

「ふざけんなあ……って、良いのか」

ルナ

「と、思ったらもう時間ね」

マユ

「なあんだ、それじゃ次回までお預けだね」

シン

「嫌、しろよ予告（汗）」

**第12話 新たなる強敵、新たなる脅威（前書き）**

今回遂にあれが出てきます

そして恐ろしい出来事が・・・

## 第12話 新たなる強敵、新たなる脅威

ユニウスセブン落下事件、またの名を『ブレイク・ザ・ワールド』がザフト、プラントが原因と言う根も葉もないでっちあげが世界各地に流されてしまった。

これにより世界各国では反プラントの意思が強まっていた。そんな中、ミネルバは大西洋辺りに着水していた。そして、甲板の上で甲児達は海を見ていたのであった。

「くあ〜〜！空気が美味えや！やっぱ地球はサイコーだぜえ！」

胸一杯に空気を取り入れて甲児が呟く。

どうやら地球育ちの甲児にとって狭い艦内での生活は気が滅入ったようだ。

「おい甲児、あんまり変な事言っくなよな。此処はお前の居た世界じゃないんだぞ」

「わあってるっての！」

そっと耳打ちするシンの言葉に甲児はぶっきらぼうに答える。今の所シンと甲児が別世界から来たという事実は隠している。

下手に言えばそれこそ大騒ぎになるからだ。

一応謎が複数ある物の甲児とシンは輸送船内に紛れ込んで入り込んだ難民と言う扱いになっていた。

スパイ疑惑は晴れた物の、やはり民間人が軍艦に乗っていると云うのは異質なようので、クルーが甲児達を疑問の目で見ていた。

「んでよあ、これからどうするんだ？お前知ってるんだろ。元居た世界なんだし」

「まあな、恐らくは次はオーブに向かって補給と整備だな」  
「オーブ・・・確か、お前の生まれ故郷だっけか」

甲児は思い出した。

初めてシンに会った時にシンがそう言ったのを思い出したのだ。  
それにシンは頷く。

「ふうん、でっ、其処で何するんだ？」

「確か上陸許可が出る筈だ。俺はそれでオーブに降りる」

「ん？買物でもするのか？」

「いや、人を探すんだ・・・どうしても会わないといけない人に」

シンは思いつめた顔をした。

この世界は余りにも自分の居た世界に似ている。

事件、時間、世界の風景、人、全てが酷似しているのだ。

唯一違うのが自分とマユの存在位だ。

この世界では自分は既に死亡し、変わりにマユがザフト軍に入っている。

そして、運命の悪戯か、今度はマユが間違った道を進もうとしているのだ。

止めねばならない。止めなくてはならない。

同じ過ちを、同じ苦しみを味合わせる訳にはいかないのだ。

だが、今のシンには力がないのだ。

例え想いがあっても、例え真実を貫ける心があっても、力が無ければそれは只の無力なのだ。

（この世界の歴史を変えるんだ！その為には・・・どうしてもあの  
人に・・・キラ・ヤマトに会わなきゃならないんだ）

シンは思った。

とにかく今は少しでも良いから行動を起こす必要がある。  
勿論キラに会う事で事態が好転するとは思えない。  
だが、それが何かにつながると言うのなら行動すべきなのだ。  
最強のコーディネイターであり、フリーダムのパイロットをしていた人物に。

「んでよお、その人って誰だよ？もしかして彼女か？」

「はあ！？んな訳ないだろう」

「じゃあ教えてよ」

「え！」

会話している時にいきなり横槍の如く言葉が投げられた。  
振り返ると其処には興味津々な顔で見るルナ、そしてマユが居た。

「誰に会いに行くつてえ？」

「い、いやあ・・・そのお・・・」

「お、その態度！やっぱお前彼女に会いに行くんだろう！」

問題を更にややこしくさせるかの様に甲児がシンを指差して囁し立てた。

そして更に周りにいるメンバーに大声で聞こえる様に叫んだのだ。

「おおい、皆聞けえ！シンの奴おー『やかましいい！』グエツ！」

言い終わる前にシンの鉄拳が放たれる。

後頭部目掛けて放たれた一撃に溜まらず甲児は倒れる。

痛そうに鼻っ柱を抑えながらよろよろと立ち上がりそのままでシンを睨んだ。

「て、てめえ！いきなり殴るんじゃないやねえよ！鼻打っちゃまったじゃね

えか！」

「うつせえ！話をややこしくするてめえが悪いんだよ！」

「んだとゴラア！」

忽ちつかみ合いの取っ組み合いにもつれ込もうとしていた。

そんな時であった。

「やれやれ、どうやらお前達二人は相当血の気が多いみたいだな」

「「ん？」」

取っ組み合う二人を見て呆れる様に呟いたのはアスランであった。まるでやんちゃ坊主を見て呆れる兄貴のようである。

「そんなに体力が余ってるんだったら、訓練でもしたらどうだ？」

「訓練ねえ・・・ま、良つか。丁度体も鈍ってた所だし。暇つぶしにはなるかな」

「そうですね。俺もやりますよ。こいつの相手なんかしてたら体もたないですし」

アスランの誘いに二人は乗る事に決めた。

シンが多少突っ掛かるような事を言ったようだが、それに気づく甲児ではなかったようだ。

その証拠にやる気充分で通路を歩いていくのだから・・・

\*\*\*

ブレイク・ザ・ワールドは世界に多大な影響を与えた。  
世界各地では死傷者が多数出てしまい。

しかもその発端がプラントにあると言う事にされてしまい市民の怒りは頂点に達していた。

その光景を見て一人笑みを浮かべる男がいた。  
膝には黒毛の血統がよさそうな猫を抱えて優雅にしている男である。

「フツ、まさかこうも上手く事が運ぶとは思わなかったよ」

「だけどもしいもしい邪魔が入ったね。まさかあれだけの質量の塊を砕く事が出来るモビルスーツがいたなんて」

「ま、それも範囲内なのだろう？君にとっては」

男性があるモニターに映る人物と対話していた。

後ろ光のせいで顔が分からないが声色からして若年の青年と言うのが分かる。

「まあね、僕はこの後一回ミネルバを小突いた後、暫く身を潜めるつもりだよ。後は君達が好きに動けば良い」

「有難う。君には感謝しているよ。貴重な情報のほかにもこの様な素晴らしい力を貸し与えてくれたのだから」

男性がそう言ってモニターを操作する。

すると青年の横に別のモニターが映った。

其処に映っていたのは異様な姿をした不気味なロボット達、そして巨大な要塞であった。

「この力ならば、忌まわしきコーディネイター共のモビルスーツなど赤子同然。ククク、奴らが滅ぶ日も近いな」

『気に入って頂けて光栄だよ。ジブリールさん』

青年が男性の名を呼ぶ。

それを聞いたジブリールは笑みを浮かべて青年を見る。

「私も、君と一緒に戦える事を誇りに思うよ」

ジブリールはそう言って青年に向かい手に持っていたグラスを掲げた。

その目にはとても黒い野心の炎が渦巻いていたのであった。

\*\*\*

「射撃訓練……!?!」

訓練スペースに訪れた際に甲児が言い放った第一声がこれである。今目の前には数台のターゲットと射撃スペースが設けられている。其処に甲児とシンは連れられてきたのだ。

「本来民間人にこんな事をさせる訳にはいかないんだが、お前達二人はどう見ても只の民間人には見えないんでな」

(流星はアスラン、鋭いな)

シンは内心毒づいた。

下手な嘘はアスランには見抜かれてしまう。  
今の所皆は甲児とシンを民間人と思っ  
ているようだがアスランは違  
う。

早くも疑いだしているのだ。

と、言ってももう既に自分達の事はばらしているのだがその殆どを  
信じている物などいない。

大方嘘八百と思っている物が殆どである。

その中でアスランだけが微かに信じているようなのである。

「ま、良いか。気晴らしにはなるかもな」

そう言つて甲児が手近にある銃を持ち片手で構えた。

(片手が・・・)

甲児の構えを見てアスランがそう思った。

本来なら両手で持つのだが甲児は片手であつた。

相当自信があるのか、はたまたゲームセンター感覚でやろうとして  
いるのか考えは様々であつた。

ふと、周りを見ると何時の間にかギャラリーが集まっていた。

レイ、ルナ、メイリン、マユは勿論、若手のクルーは殆どが集まっ  
ている。

皆興味を持っているのだ。

甲児の、そしてシンの腕前を。

「君もどうだ？」

「良いですよ。俺は見ての通り学生です。銃なんて握つた事もない  
ですしね」

「その割には、モビルスーツの扱いは上手いな、それに・・・元ザ  
フトレッドなんだろう？」

「・・・・・・・・」

アスランの勘は鋭かった。

やはりこれ以上学生として隠し通すのは無理だと思えた。  
無論隠し通す必要もない。

既に自分の正体は粗方喋ってしまったのだ。

今更隠す必要などないのだ。

シンは軽く溜息をつき、アスランから銃を受け取った。

「分かりましたよ。俺も気晴らししたいですし」

軽く言いシンもまた銃を構えた。

そしてスタートのシグナルと同時にターゲットが現れる。

二人は揃って発砲した。

弾丸は見事にターゲットのど真ん中、即ち急所に命中した。

その光景にギョラリから声が上がる。

その声にもせず二人は続ける。

次々と現れるターゲットに対し二人はまるで全く同じ動きであるかの様に急所を狙い打っていく。

正に神業とも言える光景であった。

「驚いたな・・・まさか此処までやるなんて」

誘った本人とは言えアスランもかなり驚いていた。

やがて終了のブザーが鳴りターゲットが消えると二人は耳当てを外し銃を台に置いた。

結果発表が目の前に記載される。

得点としては僅かに甲児が上であった。

「へへえん！どうでえ。俺の勝ちだぜえ！」

「へいへい、全く訓練如きで何そんなに熱くなってんだよ」

シンに勝ちご満悦な甲児にシンが呆れながらそう言った。  
だが、ギャラリィは皆啞然としていた。  
信じられなかったからだ。

ナチュラルである甲児がコーディネイター？であるシンを負かしたのだから。

本来ならありえない話である。

「おいおい、お前本当にナチュラルなのか？信じられねえぞ」

「何だよ。まだ疑ってるのか？俺は紛れも無くお前等と言うナチュラルだつての！」

「それにしちや凄すぎるぞお前。」

クルー達の視線が甲児に向けて一斉に放たれる。  
そりゃそうだ。

甲児の射撃訓練の点数は99・6点。

シンの射撃訓練の点数は99・4点であった。

殆ど僅差であったが、それでもこれだけの高得点をたたき出すのはコーディネイターでもそうそういない。

それをこの二人はやりとげたのであった。

そんな中、マユは一人シンの点数をみてやはり曇った顔をしていた。

(やっぱり・・・お兄ちゃんは銃すら握った事がなかった・・・そのお兄ちゃんがあれだけの事出来る筈がない・・・やっぱり、この人は似てるだけの別人なの？)

マユの中にまた疑問が浮かび上がる。

だが、その想いなど今のシンには感じ取れる物ではなかった。

「ま、銃なんざしょっちゅう撃つてたからな。慣れればこの通りつて奴さ」

「しょっちゅう撃つ？甲児も戦争をしてた口なの？」

「いんや、俺が闘っていたのは人間じゃなくて機械の人間、サイボーグ兵士とかだな」

「サイボーグ兵士？何だそりゃ？」

甲児のその言葉にヴィーノは首を傾げる。

その横でシンはバツの悪い顔をする。

（甲児、この馬鹿！）

（あ、やべえ！）

咄嗟に甲児は口を押さえる。

そもそもこの世界にはあのDr・ヘルも居なければ機械獣も居ないのだ。

即ち甲児の常識は此処では非常識に繋がる事になる。

むやみな発言は控える方が良いだろう。

「甲児、そのサイボーグ兵士とか言うのは・・・その、マジンガーズと何か関係があるのか？」

「ま、あるっちゃあるかな？前にも言ったが俺は・・・」

甲児が観念したかの様に口を開こうとしたその時であった。

突如としてミネルバの周囲に巨大な水泡が湧き上がる。

それに甲板に居た殆どのメンバーがどよめきだす。

膝をついた甲児とシンは水泡の中から現れた不届き者を見た。

其処から現れたのは巨大な数体のロボットであった。

皆不気味な外観を持っている。

その不気味なロボットを見た途端、甲児とシンは我が目を疑った。

「お、おい！ 甲児・・・あれはまさか！」  
「嘘だろう？ 何で此処に『機械獣』が!？」

二人が不気味なロボットを見てそう言った。  
機械獣とそう言ったのだ。

「な、何よあれ？ 連合の新型かなんか？」  
「甲児、シン、お前等はあれを知っているのか？」

アスランが二人を見る。  
その問いに二人が振り返る。  
二人とも青い顔をしていた。

「ゾラ！ お前等は早く此処から離れる！ あいつらは俺とシンで相手をする」

「ちょ、ちょっと待ってよ！ あれは何なの？ 連合の新型か何か？」  
「馬鹿！ あれはそんな生易しい奴じゃない。 あれは機械獣だ！」

冷や汗を流しながら甲児が叫ぶ。  
その青ざめた顔の甲児を見てクルー一同に不安が募る。  
あの最強のナチュラルと名高い甲児が青ざめる程なのだからあの機械獣と呼ばれるのは余程の物なのだろう。

「だが、お前達だけでは辛いだろう。 俺達も援護する」  
「って、おい分かってるのか？ あれはお前等の知ってるモビルスーツとは訳が違うんだぞ！」

「だからって貴方達に全て任せる訳にはいかないわよ！ 私達だって軍人なんだから」  
「ちっ、勝手にしろ！」

舌打ちして甲児は踵を返す。

「行くぞ、シン！」

「分かった！」

甲児に続きシンもミネルバ艦内に走っていく。  
目指すはマジンガーZのある格納庫。

\*\*\*

その頃、ミネルバブリッジでは半ばパニックに陥っていた。  
無理もない話である。  
何しろ突然あの様な怪物が現れたのだから仕方ないと言えば仕方無い事なのだ。

「レーダー監視は何で此処までの接近に気づかなかったの？」

「分かりません！レーダーに何の反応もなかったんです！」

艦長のタリアの言葉にレーダー監視を行っていた兵士がパニック寸前の声色で叫ぶ。

彼もパニック寸前なのだろう。

直ちに艦内にコンディションレッドを発令し、MS部隊の出撃を促す。

だが、それより一足早く甲児のマジンガーZとシンのザク（またレントル）が出撃した。

「シン、お前のザクじゃ多分機械獣には対抗できない！此処は俺に任せろ！」

「馬鹿言つな！幾ら相手が機械獣だからってお前一人に任せておけるかってんだ！」

モニター越しに甲児とシンが会話をする。

その会話の中で甲児がシンの身を案じ退く様に言った。

だが、それに対しシンはかぶりを振った。

「お前、相手がどんな奴かだって分かってるだろう？」

「嫌って程分かってるさ。俺もあいつらと戦ったことがあるしな、けどなあ。喧嘩仲間をこんなところで失う訳にはいかねんだよ！」

「シン・・・ちえっ、良い事言ってくれるじゃねえか！思わず目にゴミが入っちまったぜ」

言い訳をしながら甲児が目に溜まった雫をふき取る。

そして再び目の前に居る敵を見る。

外観は今まで戦ったのと同じ形の機械獣だ。

問題なく倒せそうだろう。

そう甲児は思えた。

「まずは先手必勝だ！」

甲児は叫び、マジンガーZがそれに呼応して拳を繰り出す。

だが、その一撃を何とその機械獣はヒラリとかわしたのだ。

そしてカウンターの如きに回し蹴りをZの後頭部に放つ。

「んがぁ！」

それを食らったZが頭から海面に突っ込む。  
水しぶきを上げて転ぶZ。

すぐさま起き上がり機械獣を見る。

機体には傷は全く無い。

どうやら損傷はないようだ。

だが、甲児は驚愕していた。

「ど、どうなってるんだ？この機械獣・・・まるで人が動かしてるみたいだ」

「その通りだ！兜甲児！」

「何！」

甲児を呼ぶ声。

それは空の上からした。

甲児は空を見上げた。

出来れば見上げなければ良かったと後悔した。

だが、見てしまった。

其処に居たのは甲児にとっては余りにも御馴染み過ぎる人物であった。

半分が女性、もう半分が男性の怪物であった。

黒と紫の縦半分に彩られたローブを身に纏い長い杖を持ち奇妙な円盤に乗っている。

そう、甲児の宿敵？とも言える存在である者が居た。

「何で・・・なんでてめえが居るんだ？あしゅら男爵！？」

「あ、あしゅらだとお！」

甲児の言葉にシンも驚き空を見上げた。  
其処には確かにあしゆらが居た。  
シンも知っている。

最初シンも奴を見た時には正直肝を潰した程だ。

「きゃあ！な、何あれえ！」

後ろから悲鳴が聞こえた。

声色からしてマユだ。

他にもルナやレイも出ている。

だが、その殆どの人が青ざめた顔をしている。  
無理もない。

一体どの様な遺伝子操作をしたらあの様な化け物が出来上がるのか？  
嫌、普通なら出来ない話である。

そう、出来ないのだ。

なのにその出来ない筈の存在が目の前に居る。  
それ自体が恐怖の対象となっているのだ。

「やいやい、一体何のようだてめえ！まさか俺達の尻を追っかけて  
来たって訳じゃねえだろうなあ！」

「それは違うぞ！我等も貴様等と同じあの渦に巻き込まれてしまっ  
たのだよ」

「な、何い！」

あしゆらの言葉に驚いたのはシンであった。

確かにあの時謎の次元渦は起こった。

だが、それに巻き込まれたのは確かシンと甲児だけであった筈だ。  
それなのに何故あしゆらまで巻き込まれたと言っのだろうか？

疑問は募る。

だが、それよりも問題は目の前にあった。

「あしゆら男爵！あの機械獣は何だ？まるで人が乗ってるみたいじゃねえか！」

「その通りよ。そいつの中にはあのブレイク・ザ・ワールドを手伝ってくれたテロリストの脳を使っているのだ！」

「の、脳だと・・・」

レイは戦慄した。

一体誰がこのような狂気じみた行いをするのか。

嫌、誰もする筈がない。

本来は出来る筈がないのだ。

人間が人間の体の一部、それも脳髓を使用すると言う暴挙を一体誰が行っただろうか。

それは正しく狂気のなせる業なのだ。

「に・・・人間じゃない」

あしゆらの行いを聞いたルナが思わずそう呟いた。

その言葉を聞いたあしゆらが笑みを浮かべる。

「娘、貴様の言う通りよ。私は人間ではない」

「私は偉大なる科学者『Dr・ヘル』に作られた忠実なる僕しもべ。貴様

等愚劣なる人間と同じなどとは片腹痛いわ！」

「愚劣なる人間・・・貴方は人間じゃないんですか？」

「フハハハハ！この世界の人間は皆愚か者のようだなあ。互いが互いを潰しあう。この世界程攻め易い世界はないぞお！」

あしゆらが下卑た笑みを浮かべる。

その言葉に甲児は怒りを露にした。

「ざけんんじやねえ！何が愚かだ！何が愚劣だ！この世界の人間だつて皆必死こいて生きてんだ！それを愚か者だと！？だったら見せてやる！愚か者の力をなあ！」

『殺ス・・・』

「何？」

と、機械獣から声が聞こえた。

甲児はその機械獣を見た。

口が動いている訳ではない。

恐らく音声通信の類だろう。

だが、その類で確かにこう聞こえてきたのだ。

『殺シテ・・・ヤル・・・殺シテ・・・』

「その声・・・まさか！あの時のおっさんか！」

甲児は身に覚えがあった。

あの時、ユニウスセブン落下事件の際に甲児のZを襲ったジンのパイロットの男であった。

『殺ス・・・娘ノ・・・カタキ・・・妻ノ・・・カタキ・・・』

「ちつくしよう・・・報われねえぜ・・・あんたは死んでもその命を利用されてるってのかよ」

甲児が齒噛みした。

実際甲児はその男、サトーを知っている訳ではない。だが、彼の苦しみ、悲しみは理解出来る。

甲児もかつて家族を失ったのだ。

父と母を事故で失い、祖父もまた・・・死んだ。

それでも甲児は挫ける訳にはいかなかった。

立ち止まる訳にはいかなかった。

それが甲児の強さに繋がるのだ。

だが、サトーは違った。

家族を殺された憎しみから復讐に走り、その結果がこれである。あしゅら男爵に利用され、機械獣の手足とされてしまったのだ。

「甲児、まさかこの機械獣には・・・」

「ああ、間違いない・・・あの機械獣には全てあの時のテロリストの脳髓が使用されているんだ」

「嘘でしょ・・・人間の脳を使用するなんて・・・」

その事実を知ったシン以外のパイロット達の顔が青ざめた。

そんなパイロット達を二人は見た。

恐らく今のルナ達は戦力にはならないだろう。

あのレイでさえ多少青ざめている。

無理もない。

あしゅらの様な暴挙を今までこの世界で行ってきた人間など居ないのだから。

死んだ人間の脳を使用して奴隷の様に扱う行為など。

\*\*\*

「始まったみたいだね」

遠くからミネルバ隊と機械獣の戦いを見つめる者が居た。

薄明るい空の中に生える白い機体に青い翼を生やした一機のMSが居た。

その外観から感じられる者は平和の象徴ともとれた。だが、その内から感じられる感情はそれとは全く逆の物であった。全てを血の赤に染める事を望むかの様な恐ろしい感情が感じられた。その恐ろしい気迫を放ちながらその機体は戦いを見守っていた。

「さあ、見せて貰おうか。鉄の城の・・・そして、もう一人のSEEDの持ち主の力を・・・」

そう呟き、その機体のパイロットは笑みを浮かべたていた。

第12話 新たなる強敵、新たなる脅威（後書き）

アスラン

「兜甲児！貴様に一言言っておく！」

甲児

「ん？何だ？」

アスラン

「俺はアスラン・『ツラ』じゃない！アスラン・『ザラ』だ！」

甲児

「どつちでも同じじゃねえの？」

アスラン

「全然違うだろう！ザとツの何処が似てるってんだ！発音も文字も画数も全然違うぞ！これは大きな誤解なんだからなあ！」

ヴィーノ

「そつだそつだ！ついでに俺のこれは鶏冠ヘアーじゃねえ！」

甲児

「じゃあ染めるの失敗したって奴か？」

ヴィーノ

「何でそつなるんじゃあああああ！」

シン

「良いから予告しろてめえらあああああ！」

**第13話 強き想い、無力なる力（前書き）**

続けて投稿しました。

最近になってシードデステイニー見てます。

頑張って知識を得ています。

ではご覧になって下さい

### 第13話 強き想い、無力なる力

甲児は憤怒していた。

あしゆらの非道な行いに。

余りにも非人道的な行為に甲児はかつてない程の怒りを感じていた。

「あしゆら・・・俺は今までで一番、てめえをぶちのめしてえと思つたぜ！」

「ふっ、やってみろ！だがこれを操っている奴は中々の手馴れだぞお。果たして今まで通りに倒せるかなあ？」

あしゆらが笑みを浮かべる。

その笑みがまた甲児の中の怒りを煽る事となる。

そしてその怒りはシンの中にもあった。

屈折していたとは言えシンの中身は甲児と若干似ているのだ。

甲児が怒るとすればそれはシンもまた怒る事なのだ。

其処が二人は何処か似ている事になるのだ。

「甲児・・・俺も同じ思いだ・・・例えさつき殺した人間だったとしても、それを眠らせずにこうして奴隷の様にまた闘わせる・・・あいつはあのロゴス以上の奴らだ」

「シン、こうなったらこいつらを眠らせてやるしかない」

「ああ、だが・・・出来るのか？お前に・・・」

シンはと、そして甲児を見た。

甲児は事故でこちらに来てしまった。

戦いを経験していたとは言え甲児に戦争の経験はないのだ。

故にユニウスセブンの戦いの際には人を殺した際に甲児は異様な不快感を覚えた。

それは人を殺めたと言う罪悪感にあるのだ。

シンもかつてはそれを感じていた。

だが、これも全ては生きる為であった。

殺らなければこちらが殺られる。

そんな現状で甘い理想など見ていられないのだ。

だからシンは闘った。

だが、それが何時しか間違った道へと進んでしまい、最終的にシンはその運命に負けてしまった。

だが、今シンは生きている。

そしてこうやって闘っているのだ。

だからこそシンは怒っている。

命を冒流しているあしゆらに、憤怒の如く怒っているのだ。

そして、甲児とて戦争を経験してないとは言え素人ではない。

列記とした戦士なのだ。

その為甲児にも覚悟はある。

かつて甲児が倒してきたサイボーグ戦士も元は同じように生きていた人間であったのだ。

その人間を殺し改造したのだ。

だから甲児も全く人を殺してない訳ではない。

「やるぜシン。こうして命を利用されるのを黙って見てる訳にはいかねえ。確かにいけ好かないオッサンだったけど、あのままじゃ可愛そうだ。せめて奥さんや娘さんの居る所に送ってやるっぜ」

「ああ、そうだな」

甲児とシンは互いに頷き合う。

現状でまともに戦えるのは自分と甲児の二人だけだ。

ルナやレイ、それにマユの3名は機械獣との戦いには慣れていない。性能的には機械獣はこの世界のMSを遥かに凌駕している。

その上今までの電子頭脳とは違い死んだパイロットの頭脳を使用し

ているのだ。

その為戦闘能力が今までより高いのだ。

下手に挑めば返って撃墜されるのがオチだ。

となれば自分達でやるしかない。

だが、其処でもまた問題がある。

それはシンの搭乗機である。

「しっかしお前って案外それに乗るのが多いなあ」

「うっせえ！これしか乗れるのが無いんだよ！」

シンがぼやく。

無理もない。

今インパルスはマユが乗っているし現状で乗れるのと言ったら余っていたザク位なのだ。

そのザクで機械獣を相手にするのは正直キツイ所がある。だが、やるしかないのだ。

「甲児、悪いけどあのオツサンの相手は俺にやらせてくれ。あのオツサンを倒した手前ってのもあるんでな。出来れば俺の手で眠らせてやりたいんだ」

「分かった。んじゃ俺はもう一体の奴を片付ける」

甲児は別の機械獣の方へ向かった。

そしてシンは目の前に居る一体の機械獣と向き合った。

髑髏どくろの顔に二本の鎌を取り付けた機械獣だ。

その機械獣がシンの乗っているザクを睨む。

『小僧・・・貴様ノ・・・貴様ノセイデ・・・』

「恨みたいのか？だったら恨めば良いさ。俺は恨まれるのには慣れてるんでな」

シンが呟きトマホークを振るう。  
ザクのトマホークと機械獣の鎌が交差しあう。  
激しい火花が舞い散りぶつかりあった。  
すぐさま距離を置く。  
ふと、トマホークを見た。  
ぶつけた箇所が異様に抉れている。  
ビームを纏ったと言うのにお構いなしである。  
やはり機械獣は化け物じみている。

『殺シテヤル・・・貴様ダケハ・・・殺シテヤル・・・』

恨みがましい言葉で機械獣がザクに向かい再び鎌を振るう。  
今度は両手に鎌を持って振るってきたのだ。  
それを紙一重でかわしていく。

「ちっ、流石に機械獣だ。性能がダンチって奴だな」

愚痴りながら鎌をかわし後頭部へ蹴りを放つ。  
蹴られた機械獣が多少よろける。  
だが、それだけであった。  
すぐさま体制を立て直して鎌を振り回す。

「うおわあ！」

咄嗟にスラスターを噴かして空中でバク転の要領で回転し鎌をかわす。  
そして今度は隙だらけになった首筋に向かいトマホークを叩き付けた。

『ガギイーン!』

嫌な音が響いた。

見ればザクのトマホークが歪に折れ曲がっていた。

ビームの粒子がすっかり消えてしまい最早使い物にならない代物になってしまった。

「くそっ!ザクの武器じゃダメってか・・・けどなあ!」

シンは叫びトマホークを強く握り締める。

それに対し機械獣が再び鎌を振り回す。

だが、鎌の軌道は既に読めている。

間違っても当たる事はない。

そして一気に距離を詰めて今度は機械獣の頭部へと向かった。

恐らく全てを統括する部分は頭部にある筈だ。

其処をどうにか破壊出来れば倒せる筈なのだ。

そうシンは思った。

「これで・・・どうだあああ!」

渾身の力を振り絞ってザクはトマホークを思い切り切り機械獣に向けて振り下ろした。

その時、シンは自信の運の良さを喜んだ。

偶然か、それとも必然なのか、たまたま振り下ろした箇所が機械獣の装甲の薄い部分であった為に、機械獣の頭部を縦に真っ二つにしたのだ。

その中にはやはり機械獣の・・・人間の脳髄で作られた人工頭脳が置かれていた。

それごとシンのトマホークは両断した。

余り気持ちの良い物ではなかった。

既に死んでいる人間とは言えその脳を直視するのは辛い物なのだ。やがて、人工頭脳を失った機械獣はそのまま力を失い倒れた。もうその機械獣が再び起き上がる事は、もうない。

『死ネ・・・死ネ・・・』

「悪いけどなあ。俺だって此処でくたばる訳にはいかねんだよ！」

甲児が叫びマジンガーZがもう一体の機械獣とぶつかりあう。二本の長い首を持った巨大な機械獣だ。

その首から示される通り機械獣二体分のパワーを有している。

その上その首のそれぞれに人間の頭脳を使用している。その為に動きに切れがあるのだ。

油断は出来ない相手である。

「舐めるんじゃねえ！人間の脳を使ってるって、マジンガーに勝てるかってんだよ！」

機械獣の首を腕で挟んで掴む。

そして片首を力任せに引き千切った。

千切られた機械獣がよろめきながら憎らしげにマジンガーを睨む。

その機械獣の前ではZが千切った首を両手でぐしゃぐしゃに握りつぶしていた。

「これで一つ・・・後はあそこ・・・」

甲児が片首だけになった機械獣を見る。

あの首の中にも人の頭脳が納まっている。

このまま永遠の苦しみを与える位なら人思いに葬ってやる方が良かったろう。

そう思った甲児の手は早かった。

手元にあるボタンを押す。

Zがそれに呼応し両手を天に突き翳して仁王立ちする。

胸の放熱板に熱が籠り光輝き、やがてその光が機械獣目掛けて放たれた。

赤い熱線砲。

マジンガーZ最強の武器であるブレストファイヤーである。

ブレストファイヤーを食らった機械獣は必死に抵抗しようと片首からレーザーを放った。

だが、そのレーザーごとブレストファイヤーは燃やし尽くす。

やがてその機械獣の装甲はドロドロに融解し、物の数十秒後には液状の物体に変貌していた。

其処にはもう人間の頭脳など影も形もない。

「ど、どうでえあしゆら！てめえの虎の子の機械獣を蹴散らしてやっただぜえ！」

荒い息遣いでありながらも甲児は目の前に佇むあしゆらを睨む。

だが、そのあしゆらは未だににやけていた。

「ふん、今日のところはほんの挨拶代わりだ。だが、いつかはマジンガーZも、ガンダムも、そのミネルバとか言う戦艦も纏めて沈めてくれる・・・覚えておれい！」

そっぴい残しあしゆらは乗っていた円盤に乗り悠々と空へ舞い上がっていく。

追おうとしたが甲児はやめた。

また何か罠を用意していると思えたからだ。

それに、今自分がミネルバを離れる訳にはいかないのだ。

現状でもしマジンガーがミネルバを離れれば機械獣に対抗出来る存在がなくなると言うのだ。

その為に甲児は下手に動く事をしなかったのだ。

\*\*\*

「へえ、あんな雑魚で機械獣を倒すなんて。やっぱりSEEDの持ち主なだけの事はあるね」

上空で見ていた黒い機体のパイロットが呟く。

その顔にはSEEDの持ち主、即ちシンの上げた戦果にご満悦とも言える面持ちであった。

「でも、残念だなあ・・・彼には強い思いも、そして魂もあるのに、肝心の力がない。これじゃ僕の相手は務まらないね」

青年はそう呟きコンソールを操作する。

其処に映っていたのはかつて、シンが乗っていたデステイニーガンダムであった。

「折角だけど・・・今これを渡す訳にはいかないよねえ、まだまだこれを渡すステージじゃないし、暫くは無い力で頑張っつて貰うとしてどうか」

そう言い終わると、青年の乗っていたMS『ガンダム』は踵を返し

夜明けの空へと消えて行つた。

\*\*\*

「それにしても、一体なんだつたのあの怪物は？」

戦闘を終えた後、シン達はミネルバに帰還していた。

そして、戦闘で多大な戦果を上げた甲児とシンの機体を皆は見ている。た。

マジンガーZは特に問題はなかった。

あれだけの戦闘を終えたと言うのにZには目だった傷は一つもなかったのだ。

だが、問題はシンの乗っていたザクである。

装甲はひしゃげてしまい、無理をしたせいか機体はもうボロボロであった。

その上機械獣を倒したトマホークは歪に折れ曲がってしまっていた。

「あゝあ、こりゃもう使い物になんねえなあ」

ボロボロになったザクを見てヨウランは呟いていた。

それにヴィーノも同じであった。

「な、なあ・・・これ・・・直るのか？」

「嫌、無理だろう。此処までボロボロなんだぜえ。こんなの直して

たら日が暮れちまうよ」

「ま、確かにそうだなあ……ってちょっと待て！それじゃ俺の機体はどうなるんだ？」

「知るか！只でさえ余ってない機体を勝手に乗り回した挙句ぶっ壊してんだ。其処まで面倒見切れるかっての！」

流石のヴィーノ達も匙を投げる始末であった。

それにシンが青ざめる。

だが、其処へ助け舟がやってきた。

「直すのが面倒なのか？ならいつその事改造しまえばどうだ」

「はあ？無理言うなよ。只でさえ物資が不足してるってんだからよ

お

「部品ならあるじゃねえか……あれ」

甲児がそう言って外に放り出されている機械獣の残骸を指差した。

それを見たヴィーノとヨウランが揃って腕を叩く。

「おお！」

「その手があつたか！」

「どうせなら俺のマジンガーを参考にしたらどうだ？例えば肘からミサイル出したりとかさあ」

「うえ！ま、マジでそんな物があるのか？」

「それだけじゃないぜえ。他にもあんなところからやこんな所からとか……」

と、甲児とヴィーノ、ヨウランの三名は忽ち楽しそうな会話をしていた。

恐らくシンの乗っていたザクは近いうち機械獣の残骸を使って魔改造される危険性を孕んでいた。

しかしそんな彼等の邪悪な考えなどシンには何処吹く風であり・・・

「ふう・・・」

戦闘を終えたシンは一人物資の上で一息ついていた。

正直ザクで機械獣を相手にするのは骨が折れた。

今まで甲児の世界で居たようにガンダムで闘っていた時であれば性能のお陰でどうにか勝てたかも知れないが今度はどうなるか分かった物じゃない。

「くそつ、よりによって甲児の世界のあの機械獣まできやがった・・・このままじゃ益々この世界が滅茶苦茶になっちまう・・・どうすりゃ良いんだ」

一人シンは愚痴った。

戦いをこの世界から失くしたい。

そう思っているシンのそれとは裏腹にこの世界は益々混沌の戦いの泥沼へと入っていく。

その証拠に今回の機械獣との戦いである。

本来この世界には無い力。

マシンガンと機械獣。

それらがあるせいでこの世界は以前の世界より熾烈な戦いの渦へと巻き込まれて行くのであろう。

そうシンは思えた。

「大活躍でしたね、シンさん」

「・・・マユ」

そんなシンにマユが近づいて口を開いた。

そんなマユをシンは見た。

その視線には機械獣を倒したシンの力に嫉妬する様な目線であった。その視線にシンは気づいた。

「そんなに俺の力が羨ましいのか？」

「・・・あの時、私にも力があれば、家族を失う事なんて無かったです・・・あの時！」

マユが俯き拳を硬く握り締める。

その目から熱い雫がこぼれそうになるのをシンは見た。

そっとシンはマユに近づき頭に手を置く。

ハッとしたマユだが不思議と抵抗はしなかった。

「あんまり自分を責めるな。それじゃ自分を潰す羽目になっちまうぞ」

「何でそんな知った風な口を聞くんですか？」

訝しそうに尋ねるマユにシンはフツと笑みを浮かべた。

「俺も昔そうだったんだよ。家族を失って、大事な人や、大切な物も、いろんな物を全て失ったんだ」

「やっぱり、力が無かったからですか」

「嫌、それもあるが・・・俺は力を手にしたが、その力で、俺は狂ってしまったんだ」

「え？」

シンのその言葉にマユは目を大きくした。

その間もシンは言葉を続けた。

「俺は力を・・・運命を変える力を手にした・・・だけど、その為に俺は狂ってしまったんだ」

シンがふと思い出す。

かつてシンは自分の怒りのままに突き進み、只目の前の敵を打ち倒し続けてきた。

だが、その結末は悲惨な物であった。

仲間を、愛する者を失い、最後には言われるがままに狂気の道を進む事となった。

だが、その道に進んでしまった自分を止めてくれたのが他でもないアスランであった。

そして、シンはそのまま甲児達の世界に行き、甲児達と出合った。

其処では正に驚きの連続であった。

だが、其処でシンは知った。

強い心に、そして正しい力の使い方を。

だからこそシンには分かるのだ。

このままにしておけばマユはきつと間違った道を進む事になる。

かつての自分と同じ様に……

「それで、何が言いたいんですか？」

「力を手にすれば良いって訳じゃないって事さ。良いかマユ、くれぐれも力に押し潰されるなよ」

「馬鹿にしてるんですか？私はそんなに弱くありませんよ！」

(やれやれ、とことん俺と同じだなあ)

内心シンは毒づいた。

まさか此処まで似ているとは……やはり兄妹の成せる事なのだろうか。

「マユ……もし、お前が間違った道を行った時は……俺が助けてやる！これだけは言える」

「はあ……でも、それも無駄に終わると思いますけどね。私は私

の信じる道を行ってるんですから」

マユはシンの言葉を聞き流すかの様にそう言い返しそのままシンから遠ざかった。

その背中をシンは見ていた。

(もう、間違いなんて起こさない・・・俺と同じ苦しい思いを、お前にさせる訳にはいかない・・・俺が絶対に守ってやる！)

そう思っていた時のシンの拳は不思議と、硬く握り締められていた。

第13話 強き想い、無力なる力（後書き）

ステラ

「ねえねえ、マジンガーって花火とか出せないの？」

甲児

「おう！マジンガーに不可能はないぜ！花火だろうと何だってだせるぜ！」

ステラ

「じゃあ私線香花火見たい！」

甲児

「え、偉くちやつちいなあ・・・ま、それならこれで良いか」

シン

「っておい、お前何を使おうとしてるんだ？」

甲児

「決まってるだろう？その辺のMS使って花火にするんだよ」

ステラ

「ワクワク」

シン

「すなああああああああああ！」

第14話 慰霊碑での出会い（前書き）

今回遂にあの人が出ます。

多くの人が待ち望んでいた事でしょう？

では、どうぞ

## 第14話 慰霊碑での出会い

機械獣との戦闘を終えたミネルバは一路中立国オーブへと入港していた。

「・・・え？展開が速すぎないかって？」

「知りませんがな！世の中スピードアップが求められるんじゃないか！」

等と作者の暴走はさておきミネルバはオーブに入港していた。オーブに着くなり、ミネルバを降りたカガリに待っていた者は例のアレであった。

「カ~~~~ガリ~~~~」

なんとも気の抜けそうな声でカガリに近づくなり主室に抱きついてきた男性が居た。

その男性にカガリは困惑し、アスランは何処か面白くない顔をしていた。

「んで・・・。」

「おわ！誰だあのアンちゃん！いきなりカガリの奴に抱きついてるぜえ！」

「馬鹿、甲児！」

空気を全く読まない甲児はいきなり外に出るなりカガリと例の男性

『ユウナ・ロマ・セイラン』を目撃して声を上げる。

当然周りからの痛い視線が甲児に向けられる。

しかしそんな事鈍感な甲児には何処吹く風であり。

「よおよお、お熱いねえご兩人!!」

と、馴れ馴れしく近づいて囃し立てる。

「えっと・・・カガリ、誰だい？この礼儀知らずな子は・・・」  
「す、すまない・・・その、道中で拾った民間人なんだ」

どう説明したら良いのか分からず仕方なくカガリがしどろもどろに説明する。

それにユウナは納得した。

「へえ、もしかして君がああの例の黒いモビルスーツを操ってる子なのかい？」

「は？黒いモビルスーツ？何じゃそりゃ」

「ほら、あれだよ！確か名前はええっと・・・そう！オジンガーZだったh・・・」

言い終わる事はなかった。

その前にユウナの顔面には甲児の鉄拳が突き刺さっていた。

「『オ』ジンガーじゃねえ！『マ』ジンガーだ！」

額に青筋を浮かべて叫ぶ甲児。

だが、その時周囲に居た兵士達の銃口が一斉に甲児に向けられる。無理もない話である。

何せいきなりしゃしゃり出た上に代表である彼の顔面にパンチを入れるのだから。

だが、たかが拳銃如きでビビる甲児ではなく・・・

「上等だあゴリア！纏めて掛かってきやがれえ！」

完全にぶち切れた甲児があるう事かオーブ兵に対し喧嘩を吹っかけようとしていたのだ。

其処へ・・・

「いい加減にしろてめえはあああ！」

「あぐばあ！」

後ろから甲児の後頭部に思い切りとび蹴りが放たれる。

それを食らい頭から地面に叩きつけられる甲児。

当然甲児を蹴ったのはシンである。

つて言うか、彼とまともに喧嘩出来る人間はこの世界ではシン位である。

「て、てめえ！何しやがる！」

「それはこつちの台詞だ！お前自分が何してるのか分かってるのかあ！」

忽ちシンと甲児の殴り合いが始まった。

二人からして見れば何気ない喧嘩なのだろうが側から見るとかなり凄い展開になっていた。

「こつなつたらもう手加減しねえ！今度こそ叩きのめしてやらあ！」

「そりゃこつちの台詞だ！今度はおべこべにてめえを倒してやる！」

互いに怒声を放ちながら凄まじい勢いで拳を繰り出す二人。

その拳と拳の応酬がとんでもなかったのだ。

「な、何だあの二人・・・並のコーディネイターでもあれだけの事は出来ないぞ？」

「し、しかもあの甲児って呼ばれてる奴はナチュラルみたいだぞ」

「ま、マジかよ！ナチュラルがコーディネイターと互角に喧嘩してるのか？普通ありえないぞ！」

周りではすっかり二人を取り囲んでおり二人の喧嘩を見ていた。

何時の間にかユウナを殴ったことなどそっちのけになってしまい、と言うか殴られたユウナ本人もその喧嘩に見入っていた。

しかも囲みの外ではどちらが勝つかと言う事で賭けまで始まっている始末である。

だが、そんな暴挙が何時までも続く筈もなく、終わりは訪れる物であった。

「くおおおおらああああ！あんた達何やってるのよおおおおお！

！！」

「「げえ！」」

その声の主を見た途端二人・・・特にシンは青ざめた。

其処には額に大量の青筋を浮かべて怒り心頭な状態のルナが居た。しかもその手には巨大な金棒が握られていた。

「あんたたちい・・・あんた達が暴れるせいで私達の上陸許可が下

りなかったらどうするつもりなの？責任とれるの？どうなのお？」

「い、いやぁ・・・それは・・・」

「えと・・・そ・・・そのお・・・」

ルナの顔を見て甲児とシンが青ざめる。

この後の展開が読めたからだ。

「な、何卒・・・」

「お、大岡裁きを・・・」

「ある訳ないでしょうがあああああああ!!」

許しを請う二人の願いなど聞く耳持たずなままるナの鉄拳制裁が下された。

その光景を見ていた野次馬達は先ほどまでの興味の視線とは裏腹にこの世の終わりを思わせる程青ざめていた。

そして、血まみれの金棒を持つルナマリアの前には血まみれになりスタボロの状態になって横たわっているシンと甲児が居た。

\*\*\*

「いってえ・・・マジで死ぬかと思った」

「つうか、俺ってマジで頑丈になったよなあ・・・つくづくそう思うよ」

甲児とシンの巻き起こした騒動はとりあえず一段落し、あたりにはまた静けさが戻った。

今シンと甲児は先ほど殴りあいをした港の所で座っていた。

因みに今更ながら二人とも未だに学生服のままである。

やはり民間人にザフトの軍服を着せるわけにはいかない為だ。

つまり度々ザクを乗り回しているシンはいつてしまえばかなりの重罪を犯している事になる。

しかし余りに突出した操縦技能のお陰でタリア艦長が黙認してくれている為罪にはならなかった。

だが、今回の騒動は別物であった。オーブに着た途端代表の顔に鉄拳を叩き込み、更には大騒ぎまで起こしてしまっただから。

あの後ルナに半殺しにされた後、タリア艦長にこっぴどく説教を食らい暫くの間ミネルバに入る事を禁止されてしまったのだ。要するにたたき出されたという感じだ。

尚、マジンガーはまだミネルバ内にある。

このまま持ち逃げ・・・と言う危険性もあったがそれは稀有であった。

シンは知っている。

マジンガーの操縦は熟練のパイロットでも厳しい代物だ。

何しろこの世界は面倒な操作はOS操作でやってくれる。

だがマジンガーはその操作を全て手動で行わなければならないのだ。その上コクピットがむき出しな上にかなりのGが来る為すぐに乗り物酔いしてしまう事も判明した。

現にルナマリアもマジンガーに乗った後酷い乗り物酔いに襲われたようである。

では、そのデータを持ち逃げされるのは・・・それも心配なかった。現状のコーディネイターでもナチュラルでもマジンガーの解析はほぼ不可能だったからだ。

全く未知の合金に無限のエネルギー。

本来なら喉から手が出る程欲しい代物なのだが使い方が分からなければ只の木偶の坊である。

故にミネルバもこのままマジンガーを置いておくのは正直言ってスペースの邪魔であったのだ。

パイロットの居ない機体など置いておいても仕方ないからだ。

だからシンは特に心配などしていなかったのである。

「ほんつとづに、あの二人は血の気多すぎ。ナチュラルも皆そうなのかなあ？」

そんな二人をミネルバ艦内に居るルナが見て呟いた。

その隣ではルナの言葉を半分聞き流しながらじつと二人を見つめて  
いるマユが居た。

「ねえマユ、貴方はどう思う？」

「へ、何が？」

全然聞いていなかったらしく素っ頓狂な声をあげるマユにルナは額  
に手を当てて溜息をつく。

「あの二人よ。甲児はともかくあのシンっての、確か私達と同じコ  
ーディネイターなんでしょ？なのに何であんな古臭い学生服着てる  
訳？あれって何世紀も昔に日本で作られてた学生服じゃん。今時あ  
んなレトロな服ないのにねえ」

「そ、そうだね」

ルナの言う通りである。

甲児とシンの着ている学生服は今のこの世界では既に化石化してい  
てもおかしくない代物なのだ。

その服装がまた二人を怪しい人物だと思わせる要因となった。

だが、マユが見ていたのはむしろそれを着ている人物であった。

（あの人はやつぱり・・・でも、もう生きている筈がない・・・だ  
って、お兄ちゃんはある時私を庇って死んだ・・・じゃあ、今日の  
前に居るのは一体誰なの？）

マユの目には自分の兄であるシンしか映っていなかった。

だが、マユは覚えている。  
それも鮮明に覚えているのだ。  
かつて、自分を庇って血まみれになり物言わぬ骸と化した兄の姿を。  
もうこの世に兄は居ない。  
では、今目の前に居るのは一体誰なのだ？  
そんな疑問がマユの中を駆け巡っていた。  
と、そんな時であった。  
マユの目の前でシンが懐を弄り、中から何かを取り出した。  
携帯であった。  
ピンク色の折り畳み式で、可愛いストラップが付けられたいかにも  
女の子っぽさが見える携帯である。

「うわあ、何あれ？あいつあんな趣味とかあつた訳え？」

当然そんな物を見れば幻滅するのも無理はない。  
早速ルナが呆れた声を出す。

だが、その携帯を見た途端眉は時間が止まった感覚に襲われた。  
何故、何故彼がそれを持っているのだ。

思わず急いでマユが懐から自分の携帯を取り出した。  
ピンク色の折り畳み式で、それでいて可愛いストラップがつけられ  
た携帯である。

もう一度マユはシンの持っている携帯を見た。

其処にはマユが持っていたのと全く同じ携帯が握られていた。

「あれ？同じ携帯。しかも同じストラップなんて、凄い偶然じゃな  
い」

マユの持っていた携帯を見てルナが驚く。

無理もない。

機種も、色も、つけているストラップさえも全く同じだったのだ。

「ま、まさか・・・」

マユは半分祈る思いで携帯を開きボタンを叩いた。

画面下部には叩いた番号が映し出されていた。

マユはそれを確認すると、脈打つ鼓動を気にしながら送信ボタンを押した。

\*\*\*

「にしても、お前結構趣味悪いなあ」

「何がだよ」

ムツとするシンに甲児が顎で指差す。

その先にあるのはシンが握っている携帯であった。

「その色、それにそのストラップ。どう見たって女用じゃねえの?」

「当たり前だ。これは・・・俺のじゃない」

「え?じゃあ誰のだよ」

首を傾げる甲児。

それに対しシンが少し暗い顔をしてそつと口を開いた。

「・・・妹のだよ」

「妹？何でその妹のお前が持つてるんだ？」

「前にも言っただろう。俺は戦争で家族を失ったんだって」

「そ、そうか・・・悪い」

途端に甲児も黙り込む。

そんな中、シンが携帯を開いて画像を見せた。

「ほら、これが俺の妹『マユ・アスカ』だ」

「へえ、結構可愛い・・・ってちよつと待て！この子ってあのマユちゃんじゃねえか！何だよお、死んでねえじゃねえか！脅かしやがって」

「忘れたのか甲児？此処は俺の元居た世界とは違うんだよ。所謂パラレルワールドって奴だよ」

シンの言葉に甲児は「そうか！」と納得した。

その通りだ。

この世界は以前シンに聞かされた世界に良く似ているが細かい部分で違っている。

そしてその大元がシンの存在である。

この世界にも同じようにシン・アスカが存在していた。

だが、この世界のシン・アスカは4年前のあのオーブでの戦いで、マユを庇いその命を散らしたのだ。

そしてその代わりにマユが生きているのだ。

しかし、そのマユもかつてのシンと同じように負の運命の道を進もうとしているのだ。

このままではマユはシンと同じく運命の力に負けてしまう。

それだけはさせてはならないのだ。

そう思っていたときであった。

シンの持っていた携帯が音を立てて震えた。

着信していたのだ。

「お、誰かが掛けてきたみたいだな」

「まさか……」

シンは驚愕した。

今シンが持っている携帯は死んだ妹のだ。

その携帯番号を知っている人間などこの世界に居る筈がないのだ。もし、居るとしたら……

「……はい」

シンは着信ボタンを押して携帯を耳元に置く。

『やっぱり……その携帯は……』

「その声、マユか……」

携帯から聞こえてきたのはミネルバ内に居るマユの声であった。シンの視線がミネルバに向けられる。

其処には自分と同じ携帯を耳に傾けるマユが居た。

『教えて下さい。その携帯は何処で……』

「俺の……妹のだ」

『それは……私のです』

「そうか……そうだったな」

二人は静かに会話をした。

異なる世界の二人。

同じ機種携帯。

その二つの鍵が二人を更に混迷の渦へと誘っていく事になる。

「やれやれ、地球つてのにはこんなおつそろしい者が居るんだねえ」  
地上で起こったミネルバ隊の戦闘映像を見てネオは呟いた。  
其処にはマジンガー、そしてザクがああ機械獣と闘っている映像であつた。

「機械獣ねえ・・・正直あんなのが敵じゃなくてホツとするよ」

ネオは心底そう思っていた。

今の所あの機械獣はザフト、そしてミネルバ隊を敵と認識しているようだ。

だが、だからと言って決して味方とも言えない辛い相手である。

まあ、触らぬ神に祟りなしである。

どうせ連中の相手はミネルバ隊、正しくはマジンガーを標的にしている。

性能的にはマジンガーとほぼ互角に戦えている相手と見える。

上手く扱えば戦いを好転できるかも知れないのだ。

そう、ネオは思っていた。

それとは別の部屋、其処でステイング、アウル、ステラの3名は部屋で話をしていた。

「地球か・・・なあステイングウ・・・まさかあのマジンガーって

化け物とまた一戦交えるって事になるのか？」

「だろうなあ・・・しかし俺達もファントムペインだ。初戦は黒星だったが、次は負けねえ。今度は絶対に叩き落してやる！」

「マジンガーかあ・・・また会えるかなあ？」

ステイングとアウルの二人は話しながらマジンガー攻略を考えてる横で、ステラはある事かマジンガーに興味を抱いていたのであった。

\*\*\*

「んで、これからどうするんだ？」

携帯の会話を終えた甲児はシンに尋ねた。  
その横でシンは携帯を見て少し沈んだ顔をしていた。

「とりあえず、町に出る。そして・・・探すんだ」

「例の、キラさんって人か？」

甲児の問いにシンは頷く。

「けどよあ、お前その人の顔とか分かるのか？もしくは声とか？」

「いんや、全然」

「んなあにい！」

シンのその返答に甲児は思わずさっさくける。  
そりゃそうだろう。

探そうとしている人物の情報がその人の名前が「キラ・ヤマト」である……と言う事しか知らないのだから。

「で、どうやって探すんだよ？そのキラ・ヤマトって奴を」

「勿論、しらみつぶしに探すだけだよ」

「はあ？お前何考えてるんだよ！そんな事したら日が暮れちゃうどころか1年掛かるぞ！」

「だとしても、やるしかねえ……この世界を平和にする為にはどうしてもあの人の力が必要なんだ」

シンの顔が何時に無く真剣になる。

その顔を見て甲児は察した。

どうやらシンにとってそのキラと言う青年はどうしても会わなければならぬ人物なのだ。

しかしオーブは広い。

しらみつぶしに探すって言ったって移動手段もない上に地理もない。一体どうやって探せというのだろうか。

そう思っていた時であった。

「おやおや、どうやらお困りのようだねえお二人さん」

「ん？あんたはあの時の……」

甲児とシンの目の前に居たのはあの時甲児が顔面をぶん殴った青年であった。

今でも痛むのか鼻柱が赤い。

「確か、あの力ガリと熱烈ラブなアンちゃんか？」

「いやあ参ったなあ。そう言われると照れちゃうじゃないかあ」  
「なあに言つてんだよお。あんなおおっぴらに抱きつくなんざあ、あんたやるじゃん」

「よしてくれよお。困っちゃうなあ」

気がつけば甲児とその青年は楽しそうに会話をしていた。

ありえない光景である。

オーブの代表と一民間人がこうして楽しげに会話するなどありえない事なのだ。

だが、彼も馬鹿ではない。

その周囲には気づかれぬように数人のSPが居た。

隙あらば、そして何か変な動きをすれば二人揃って撃ち抜くつもりなのだろう。

だが、それに気づいていない甲児はその青年と楽しげに会話をしていた。

「俺、兜甲児ってんだ。あんたは？」

「僕はユウナ。ユウナ・ロマ・セイランと言つよ。宜しくね甲児君」

「おうよ、応援してるぜ。頑張つてカガリを落とせよおユウナ。でねえと俺が貰っちゃまうぜえ」

「そ、そりゃ大変だ。例のあのコーディネイターならともかく君が相手となつては分が悪すぎるねえ」

「ダハハハ！冗談だよ」

本当に楽しげである。

シンには最早呆れるしかなかった。

セイラン家と言つたら連合とオーブを結びつけた家柄だ。

シンにとっては憎むべき敵のだが、今のシンにはどうしても彼を憎む事が出来なかった。

あんなにも甲児と親しげに話している彼をどう憎めというのか？

つくづく自分の心境の変化に驚かされる事となる。

「なあ、あんたこの地に、ええと・・・オーブに詳しいのか？」

「ははは、なに言ってるんだい？僕はこの地の代表だよ。この地の情報なら軍事施設から公衆トイレの場所まで全部頭の中に入ってるんだからねえ」

おおっぴらに自慢するユウナ。

それを聞いた甲児は目を輝かせる。

「そっか、んじゃキラ・ヤマトって人の場所とか知ってる？」

「勿論、あのコーディネイターの少年の場所なら僕はちゃんと知ってるよお」

「ほ、本当か！・・・ですか！」

その言葉に今度はシンが反応する。

それに多少驚くユウナだがすぐに戻る。

「ああ、この座標に彼の住んでいる家がある筈だよ。それ以降は残念だけど僕も知らないんだよねえ」

「充分だぜ！あんた案外良い人だなあ。有難うよ」

甲児は笑顔でユウナに向けて言った。

そして更に嬉しい事が起こった。

「幾ら小国とは言ってもオーブは広いよ。せめてこれに乗って行く  
と良いよ」

そう言ってユウナが見せたのは2台のバイクであった。

「うつひよお！ヴァイクだあ！しかも見たことねえ型だぜえ！くく、たまんねえよお！」

「あはは、余程君はバイクが好きなんだねえ」

「ああ、俺は三度の飯よりバイクが好きってな位だからよお」

「とにかく、助かります」

礼儀を知らない甲兎に対してシンは礼儀正しくユウナに礼を言う。

それにユウナも軽く手を振り後にした。

それに連なって彼のSPも後に続く。

シンは今正に飛び上がりそうな気持ちであった。

まさかこうも早くキラ・ヤマトに出会えるとは。

正に喜ばしい事であった。

となれば最早グズグズしている余裕はない。

「行くぞ甲兎！今日中にキラさんに会うんだ」

「へっ、言ってくれるぜ！俺のバイクテクニクを舐めるんじゃねえぞお！」

意気揚々と二人はバイクに跨りエンジンを掛け、ユウナの教えてくれた座標へと向かう事となった。

\*\*\*

「さてと、そろそろ小突く頃合かなあ？」

オーブに入港し、キラ・ヤマトの元へと行こうとするシンと甲児を見て青年は呟いた。

また、青年にとつては楽しみにしていた時でもあった。

今の甲児には力があり、シンには強い思いがある。

お互いに欠けている物があるがそれをお互いが庇いあっているのだ。その為に今の二人はこの世界の中でも強い存在となっている。

唯一の心残りと言えばシンに力がない事なのだが最早待っているのも限界となっているようだ。

「さあて、それじゃ見せて貰おうかな？ 異世界で見つけた力の使い方って物を」

青年がそう呟き日が傾きだしてきた空の中へと消えていく。

時刻は夕刻。

その時シンと甲児は教えられた座標へと向かっていた。

其処で二人が見ていたのは廃墟となった家であった。

「お、おいおい・・・」

「まさか・・・ブレイク・ザ・ワールドのせいだ・・・」

シンはその場に膝をついた。

目の前にはボロボロになった人形が砂にまみれていた。

それをシンはそつと手に取る。

先ほどまでであった希望は一転して絶望に変わった。

キラが居たであろう家は影も形もなく、其処に勿論キラは居ない。

ガクリと頂垂れた。  
そんなシンの肩に甲兎がそつと手を置く。

「なに頂垂れてるんだよ。お前言っただろっ？しらみつぶしに探すつてよ。だったら今度はそれで行こうぜ」

「あ、ああ・・・そうだったな！」

シンは立ち上がる。

今こうして絶望に打ちひしがれてる場合ではないのだ。  
時間がある今ならば力の限り探すだけだ。

それがこの世界を平和に導く手段だというのなら・・・

\*\*\*

乾いた銃声が射撃訓練場に響く。

其処で一人銃を手にターゲットを撃ち抜く者が居た。  
薬莢を取り替えて再びターゲットに銃口を向ける。

「随分熱心だな」

「レイ」

振り向いたレイに向かい名を呼ぶ。

その者を見てレイは呆れたような感じで笑みを浮かべる。

「上陸許可、下りたんだろう？降りなくて良いのか？マユ」  
「降りたく・・・ないんだ。あの地に・・・オーブには」

俯き、銃を見たマユ。

しかしその後すぐに銃を手に構えターゲットを撃ち抜く。  
その横でレイもまた銃を手にターゲットを撃ち抜く。

「だが、甲児とシンは下りた・・・と、言うより下ろされたぞ」  
「あの人達、甲児さんとおにい・・・シンさんは違います。彼等は  
民間人なのです」

そう割り切りマユは再びトリガーを引く。

その時放たれた弾丸はターゲットの頭部のご真ん中を撃ち抜いたの  
であった。

二人が訪れたのは墓地であった。

その前でシンと甲児は頂垂れる結果となってしまうた。

「はぁ・・・完全に手詰まりって奴だな」

「残る場所は・・・此処だけだと思っただが・・・此処もダメか」

あの後、甲児とシンはそれこそオーブ中を探し回ったのだ。

それこそ彼の回りそうな場所を探し回ったのだ。

だが、結局全て徒労に終わってしまったのだ。

そして最後に残った場所が、此処であったのだ。

だが、其処もまた徒労に終わる事になりそうであった。

「やれやれ、どうすっかなあ・・・この後」

「くそっ、此処にも居なかつたか・・・一体何処に・・・ん？」

ふと、シンが海岸にある慰霊碑のところに視線を置く。其処には一人の青年が立っていた。

その時、シンはあるデジャブを感じた。

前にも、確かこんな風な事があつた気がする。

そう感じた時、シンの足は一人でに青年に近づく。

すると、青年は振り返る。

茶色の髪をした優しくそうな顔の青年であつた。

「慰霊碑・・・ですか？」

「そう・・・みたいだね。でも、僕も良く分からないんだ。僕も初めて来たから」

青年は応える。

すると、またシンの中でデジャブが起こつた。

（まただ、俺は・・・俺はこの光景を知っている・・・そして、この人とも前に会つた事がある）

シンは今の自分自身に困惑していた。

この後どう言つたか、それをすっかり忘れてしまったのだ。

その為に言葉が出ない。

困惑するシンに対し、青年がふつと微笑む。

「ごうやって、僕達が出会うのは・・・2度目だね」

「え！ま、まさか・・・あんた！」

シンの目が驚きと同時に一種の希望の光に輝く。

そして、青年の口から言葉が出た。

その言葉は正しく彼が、シン・アスカが望んでいた言葉であった。

「僕は・・・「キラ・ヤマト」って言うんだ。君は確か・・・「シン・アスカ」君だったね？」

「キラさん・・・あんたが・・・あんたがキラさん・・・だったのか」

シンはキラを見てそう呟いた。

それは彼が待ち望んでいたことでもあったのだ。

そして、それがシンにとって望むべき事でもあったのだ。

第14話 慰霊碑での出会い（後書き）

カガリ

「ところでアスラン！さっき甲児と話して私は遂に物にしたぞ！」

アスラン

「え？甲児と？・・・一体何を物にしたんだ？」

カガリ

「勿論！このクロスカウンターだ！」

アスラン

「兜甲児いいい！一体カガリに何教えたんだああ！」

カガリ

「腕を引き締めて！抉りこむように・・・討つべし！」

アスラン

「字が違う・・・ってうんぎゃあああああああ！」

カガリ

「あ、アスラン！アスラアアン！お前、顔が梅干になってるぞお！」

甲児

「でも、絶対食いたくないよな。こんな梅干」

シン

「同感だな」

## 第15話 力を失くした翼（前書き）

シンはオーブに辿り着く。

其処で当初の目的であったキラ・ヤマトの搜索を開始した。

甲児と共にバイクに跨りオーブを失疾走する二人。

だが、結果は散々であり結局キラは見つけられずに至っていた。

最後の望みにと訪れた慰霊碑の前でシン達は一人の青年に出会う。

そして、その青年こそが「キラ・ヤマト」であったのだ。

## 第15話 力を失くした翼

日は傾き、夕方も色濃くなった頃、シンは遂に出会えた。

其処は、かつて自身がある不思議な青年と出合った慰霊碑の前であった。

そして、その前には前と同じ様にその不思議な青年に出合った。その青年こそが・・・あの『キラ・ヤマト』であったのだ。

「キラ・・・ヤマト・・・」

「シン君・・・」

キラとシンは互いに向かい合っていた。

シンにとっては念願の出会いであった。

最初この世界に訪れた際には彼に出会えればきっと世界が好転すると思えたのだ。

だが、実際に出会ってみるとどう会話をしていれば良いのか分からなくなってくる。

実際、キラには個人的に恨みがあった。

家族を奪い、以前に心を通わせた女性である「ステラ・ルーシエ」を彼は図らずも殺害してしまったのだ。

そして、シンとキラは激しくぶつかりあった。

その時、シンはキラを甘ちゃんだと馬鹿にしていた。

だが、今は違っている。

今のシンの心境はキラと同じであった。

例え敵だとしても、その尊い命を奪いたくない。殺したくない。

その強い思いが「不殺」の念をシンの胸中に深く刻み込んだのだ。だが、それだけではダメなのだ。

シンにはもつと力が必要なのだ。

誰も殺さずに皆を生かす為には強い思い、そして力、何よりも強い魂が必要なのだ。

それを全て揃える為には彼の助けが必要だと、シンはそう考えた。その為にシンはキラに出会う事を強く願ったのだ。

「シン君・・・ごめんね・・・」

「!?!?!」

キラから口にされた言葉を聞いた時、シンは目を大きく開いた。思いがけない言葉だったのだ。

そして、少し俯いた後、シンの目から涙が零れ落ちるのをシンは感じた。

「ず・・・ずるい・・・何時だって、あんたはずるいよ・・・」

「シン君・・・」

「何で・・・なんであなたは俺より先に言う事を言っちゃうんだ！謝るのは・・・寧ろ俺の方だ！・・・俺が・・・俺が運命に負けちゃったばかりに・・・」

「違う、君はまだ運命に立ち向かえるんだ・・・まだ完全に負けた訳じゃないんだ」

「き・・・キラ・・・さん・・・お、俺は・・・」

二人が俯き静かに語り合う。

とても重苦しい空気が流れる。

『もつ良い、鬱陶しい!?!?!』

その空気をぶち壊すかの如く二人の頬に凄まじい衝撃が響いた。その拍子にシンは数歩よろめき、キラは勿論すっ転ぶ。

「づつ・・・こ、甲児！」

「痛・・・な、何？」

シンは殴った人間が誰なのか理解していたのだが、キラは一体誰が殴ったのか皆目検討もつかずしどろもどろしていた。

そんなキラの胸倉を掴み上げるのは勿論甲児であった。

そのついでにシンの胸倉も掴み上げて目の前に引き寄せる。

「大の男が二人揃って何湿っぽい事言ってるんだよ！こつちまで湿っぽくなつちまうじゃねえか！」

「こ、甲児・・・」

「え？ええ！・・・だ、誰？君、誰なの？」

シンは甲児の反応を当然だと思っていたがこんな介入をされた為に反応に困り、キラに居たつては全く知らない人間がいきなり出てきたのにパニック状態に陥っていた。

「まずシン！お前折角会いたいと思っていたキラに会えたんだろう？だったらもつと喜べよ！諸手を上げて「やったぞお！」って喜んだり「会いたかったぞお！」って言って再会を喜び合ったりしろよ！それがなんだよ！会った途端「ごめん・・・」だとお！暗いんだよ！暗すぎるんだよお！見てて胃が痛くなるわあ！」

そう言ってまずシンを吹き飛ばす。

余りに強烈な力だった為にシンはそのまま数メートル飛んだ後にし

りもちをつく。  
そして今度はキラを見る。

「お前もお前だ！会っていきなり「ごめん・・・」だとお！男がそう簡単に謝ってどうする！そんな女々しい事してんじゃねえ！」

「う、うん・・・」「ごめん」

「だあかあらあ、謝るなっつってんだろうがあああ！」

反キレした甲児がそのままキラを上空に持ち上げた後に地面に叩きつけた。

その衝撃にキラは呼吸が出来なくなりかなり咽る。

「げほっ・・・げほっ・・・」

「ったく、この世界の奴らは皆何か暗いんだよなあ！もうちょっと明るく出来ないのかあ？これじゃ俺将来剥げちまうよ」

「え？ど・・・どう言う事？」

さっぱり話題についていけないキラが頭に大量の「？」マークを浮かべる。

まあとにかくである。

甲児の介入のせいで思いつきり話が逸れてしまったが此処は話の展開を読むとして強引に話を戻す事にする。

「と、とりあえず甲児・・・お前はちょっと退いててくれないか？」

「何だよ？俺の出番此処だけかよ？それって無いんじゃないのお？」

「良いから退いてるっての！」

強引に甲児を退かしシンはキラと向き合う。

「キラさん、単刀直入に言いたい。俺に力を貸してくれ！」

「シン君・・・その為にも君の知っている事・・・全て話してくれないかい？」

「分かりました・・・全て話します」

「おおい、俺はあ？」

「無視無視・・・」

シンはキラに全てを打ち明けた。

かつて、自分が運命に負け、間違った道に進みそうになった事。それをキラとアスラン達に止めてもらった事。

その後自分は甲児達の居る全く異なる世界に飛ばされて、其処で様々な事を学んだ事。

そして、自分の居た世界とは異なるこの世界に来てしまったこと。

其処にはかつて死んだ妹が軍として入隊しており、その妹が自分と同じ間違った運命の道を進もうとしている事。

そして、その道を正すためにも自分が止めなくてはならない事。

そして、その為にもシンはキラに出会う事を心に決めた事であった。

「これが・・・俺の見てきた、感じてきた全てです」

「分かったよ・・・シン君・・・でも、ごめん・・・今の僕じゃ、力になれないんだ」

「そ、それって・・・それって一体どういう意味なんだよ！あんたは最強のコーディネイターなんだから？フリーダムのパイロットだったんだらう？それが何で？」

「今の僕には・・・今の僕には「力」が無いんだ」

「力がない・・・それって一体どういう・・・」

いかにも緊迫した会話が展開していた。  
だが、そんな時であった。

『グゥ・・・』

そんな音が響いた。  
俗に言う腹の音である。

それを聞いたシンとキラの二人は甲児の方を見た。

「わ、悪い・・・あんまり長い時間探し回ってたせいか腹減っちゃまった」

「あ、あのなあ・・・」

「あはは・・・」

場の空気を全く読まない甲児にシンは呆れ果てて、キラは苦笑いを浮かべた。  
そんな時であった。

「あらあらあ？キラのお知り合いですのぉ？」

と、こんな風に間延びした声で三人に近づく者が居た。  
声色からして  
女性であった。  
ピンク色の長い髪に青い瞳のおとなしそうな女性であった。

「ん？あれ・・・この子・・・まさか！ラクス・クラインンン！！」

「ええ、私はラクス・クラインですわぁ・・・貴方はどちら様ですのぉ？」

「うおおお　　！モノホンのラクスちゃんだぁ　　！感激だぁ　　！」

ラクスを見た途端甲児の目が滅茶苦茶輝いた。  
そしてラクスをマジマジと見る。

そんな甲児に流石のラクスも若干引き気味になっている。

「あ、あのお・・・」

「すっげえ！マジで本物だあ！テレビで見たのと全く・・・似てるかどうか微妙だけど、とにかくラクスちゃんだああ　　！」

ラクスを見た甲児のテンションはどんどん上昇していく。

さっきまで怒り心頭だったのに対しラクスを見た途端まるで子供の如くはしゃぎまくっている。

その光景にキラとシンはあきれ果てていた。

何故甲児がラクスを知っているかと言うと・・・それはある時、ミネルバに居た時の事であった。

戦闘の無く静かな航海の時、暇なので甲児はヴィーノ、ヨウランと共にテレビを見ていたのであった。

その時に映っていたのがライブで熱唱中のアイドルであるラクスであったのだ。

そして、そのラクスを見て三人が声を揃えて叫んだ。

『L・O・V・E！ラ・ク・スウウウウ　　！』

三人が声を揃えて叫ぶ。

その光景は側から見るととても痛々しい光景であった。

当然それをシンも見ていた。

余りにも痛々しかった為にシンはそのままスルーしていたのであった。

そして、現在に至る。

「おい、甲児……」

「まあ、貴方はあの兜甲児様ですね？お噂は聞いていますわあ。黒き巨人を操り機械の怪物を薙ぎ倒したお方ですね」

「え？マジ！俺ってそんなに有名人なの？いやぁ感激い！」

すっかり嬉しくなってしまった甲児。

最早会話などそっちのけであった。

それにシンとキラは互いに見合って呆れるばかりであった。

と、そんな時に甲児が振り返りシン達を見る。

「なあなあシン。今夜の晩飯さあ、あのラクスさんが奢ってくれるんだってよお！折角だし飯奢って貰おうぜえ！」

「な、何言ってるんだてめえ！第一時間見るよ！もうすぐ日も傾くんぞ！戻らないとやばいだろう！」

「平気平気い。どうせ俺達民間人だし。居なくたって問題ないだろう？」

「お、お前なあ……」

余りに自分勝手な甲児にシンはげんなりしていた。

どう言えば良いのか。

返答に困っていたシンであったが、其処でキラが助け舟を出す。

「僕は別に良いよ。折角会えたんだしもうちょっと話もしたいし……」

「す、すみませんでしたキラさん……ったく、少しは空気読めよなあ甲児」

「へへえ、やったあ！」

甲児は諸手を上げて喜ぶ。

それにキラ、シン、そしてラクス達はまるで子供の様にはしゃぐ甲児を見て笑みを浮かべるばかりなのであった。

\*\*\*

時刻は既に夜になり、空には満月が真上にまで上っていた。

海は既に漆黒の色に染まっている。

だが、そんな海の中を黒い影がよぎっていた。

しかし、その黒い影に気づく者は・・・この時には誰も居なかったのであった。

「うんめええ！」

その頃、甲児と言えばキラやシン達と共に夕食を食べ、それに舌鼓を打っていた。

「お口に合つてとても光栄ですわあ」

「最っ高だよお！今まで食ってきたのって言ったら味気ない宇宙食ばっかだよお！あんなの人の食うもんじゃねえっての！其処へ来たらこれ最高だぜ！これこそ人間の食べる飯って感じだよなあ！」

そう言いながらガツガツと料理を口に放り込んでいく甲児。  
その横に居たシンが呆れていた。

「つたく、少しは人の目とか気にしろつての」

「まあ、気にしなくて良いよ。元気なのは良い事なんだし」

向かい側に座るキラもラクスも元気な甲児を見て笑みを浮かべていた。

そんな時であった。

「隙ありい!!」

「ん?・・・あああ　　!」

シンが自分の皿を見た。

その時までにはあった丸皿一杯に乗った焼き色のついた肉汁たっぷりの美味そうなステーキがすっかり無くなっていったのだ。

そして、視線はそのまま甲児の方に向く。

其処には甲児が本来シンの皿に乗っていたであろうステーキを頬張っている光景であった。

「甲児・・・一つ聞きたいが・・・それは何だ?」

「ん?ふふええふいぐあぐえどお?(ん?ステーキだけどお?)」

「んじゃもう一つ聞くが・・・それは誰の皿に乗ってた奴だ?」

「ふおふやあもふいふおん、ふおふあえふおふあらヴあくえぐお(そりゃ勿論、お前の皿だけどお)」

その言葉を聞いた途端、シンの中の何かが切れた。

「てめえ!それ俺のステーキじゃねえか!」

「へっへえん！のんびりしてるてめえが悪いんだよおだ！」  
「ふっざけんなあ！返せ！俺のステーキ返せえ！」

怒鳴り甲児を見るシン。

しかしその時には既に甲児がステーキを丸呑みしていた後であった。

「もう食っちゃったもおん 残念でしたあ」

「て・・・てめえええ」

完全にぶち切れたシンとあっかんべーしながら逃げる甲児の喧嘩がまた始まった。

その光景を見ていたキラとラクスが腹を抑えて笑うのを必死に堪えていた。

其処へ、また料理の追加を運んできた物達がいた。

「おやおや、今夜の客人は賑やかなのが居るねえ」

「でも、賑やか過ぎるのもちよっと・・・ね」

そう言ってみてきたのは片目をつぶっている何処か三枚目を思わせる青年と、年相応な美しさを放つ女性であった。

「お！マリユールさんにおっさん！」

「おいおい・・・おっさんはないだろう？おっさんは・・・」

「あはは・・・マリユールさんもバルトフェルドさんも一緒に食べます？」

「ええ、一緒に緒させて頂くわ」

「折角だし、どうだいご兩人。今回のコーヒーには自信あるんだよ  
お」

そう言っただけ料理の追加を各々のテーブルに置き、そのついでにカツ

プに注がれたコーヒーを置く。  
そのコーヒーを見て甲児が首を傾げる。

「ん？おっさんコーヒーとか作ってんのか？」

「ああ、こつ見えてもコーヒーにはちと五月蠅いんだぞお兄さん  
は」

「へえ、そうなんだあ」

そう言つて甲児は座りコーヒーをまず一飲みする。

「なあ、これつてインスタントコーヒーと何ら変わんないんじゃないかね  
？」

「ぬがあ！予想外の返答にお兄さんのガラスのハートはブレイクし  
ちやつたよお・・・」

余りに甲児の酷いとも思える返答にバルトフェルドは膝を突きガツ  
クリとする。

そんなバルトフェルドを見てマリユを加えた一同が苦笑いを浮か  
べていた。

その矢先であつた。

「隙ありい！」

「ああ？んのおおああああ

！」

今度は対照的に甲児が叫んだ。

見れば食後のデザートにと運ばれた筈のイチゴシヨートの乗った皿  
が甲児のだけは皿だけになっており、見ればシンの口の周りには生  
クリームがついていた。

そして口をモゴモゴしている。

「シン……一つ聞くが……その口の中に入ってるのって……なんだ？」

「ん？イチゴシヨートだけど？もう食っちまったけどなあ」

「因みに……それ誰の皿にあった奴だあ？」

「勿論……兜甲児って言う馬鹿野郎の皿だけどあ」

いかにもわざとつばく言うシン。

そんなシンを見て甲児の額に青筋が浮かび上がる。

「てめえええ

！俺のイチゴシヨートを食いやがったなああ

！」

「やあああ、ざまあみるお！さっきのステーキのお返しでえい！」

今度は逆に甲児が怒り心頭でシンを追い回し、シンがあっかんべーしていた。

その光景に最早我慢の限度が尽きたのかバルトフェルドを除く殆どのメンバーが机に突っ伏して笑っていた。

え？バルトフェルドはどうしたかって？

彼なら未だにブレイクハート中ですが……

「何故だ？一体何がいけなかったと言うんだ？水、量、時間……全て今回は完璧だった筈。なのにインスタントコーヒーだとお！一体何がいけなかったんだ？一体何が？」

とまあ、こんないつちゃった叔父さんは放っておいてシンと甲児はと言うと激しい喧嘩をおっばじめていた。

「何故シヨートケーキを食った！アレは俺が食うべきケーキだったんだ！」

「ステーキを食った貴様の言う事かあ！」

「だから・・・だからショートケーキを食ったというのか！？貴様  
はああ　　！」

「貴様だって・・・食っただろうにいい　　！」

と、何処かの某宇宙世紀アニメで言っていたような台詞を叫びながら二人が激しい喧嘩を行っていた。

それでも机や部屋に被害な無いのを見るとどうやら二人とも一応気を使っているようである。

やがて、食事を終えてさあ帰ろうと思ったのだが、其処でまた甲児が「もう動きたくない、だるいい、折角だし泊まってこうぜえ」などと駄々をこねだした為に結局その日だけお世話になる事となった。

「いやあ、これこそ人の暮らして奴だよなあ。久々に生きた心地がしたぜえ」

「良いか、明日は明朝にミネルバに帰るからなあ。これ以上の駄々はもう聞かないからな！」

「へいへいい、わあつたよお」

片手でヒラヒラして甲児はそのままフカフカのベッドに沈んだ。

そんな甲児を見て呆れながらもシンもまたベッドに体を埋める事にした。

時刻は既によい子はおねんねの時間である。

そんな時、キラは一人自室で今回であったシンの事を考えていた。

( やっぱり、感じたとおりだ、彼は強い・・・ひよつとしたら・・・彼になら、託せるかも知れない・・・この世界の命運を・・・ )

キラはそう思っていた。

そして彼もまた静かに目蓋を閉じて今日一日を終える事にした。だが、どうやら彼等の夜はまだまだ続きそうである。

「良いか？遺体は必ず処理するんだ！何としてもラクス・クラインを抹殺するんだ」

「了解」

海岸を上陸したダイバースーツを着ていた数名の兵士達が手に武器を持ち口々にそう言い合う。

そして目の前にはキラたち、そしてシンと甲児の寝ている屋敷を見た。

「・・・ん!？」

シンは目を覚ました。

どうも首筋がチリチリとするのだ。

人間の本能なのか、それとも単にシンの勘の良さから来る物なのか。とにかくシンは目を覚ました。

隣では甲児も目を覚ましていた。

「甲児・・・お前もか？」

「ああ、どうにも嫌な予感がしやがらあ・・・ま、元の世界があれだったからかねえ」

「そうかもな」

そう呟きシンはそつとカーテンを開いて外を覗く。

其処から映った物は、海岸から上陸して静かに屋敷に潜入しようとする数名の兵士達であった。

明らかに工作部隊、又は暗殺部隊とも思える輩である。  
それを甲児も見ている。

(あいつら・・・誰かを殺す為にどっかから送られた部隊か?)

(へっ、折角だ。腹ごなしの運動がてら蹴散らしちまうか)

(やれやれ・・・お前が言つと本当にやっちまうから怖えよなあお前は)

そう言いながらも甲児とシンは互いに笑みを浮かべた。

それとほぼ同時刻。

バルトフェルドとマリューは互いに臨戦態勢をとっていた。  
手には銃が握られている。

どうやら気づいたのだろう。

「どうやら、相当やばそうなお客人が来たみたいだなあ」

「そうね・・・私はラクスさん、そして甲児さんとシンさんの元へ向かいます」

「俺は坊主の所へ行く。その前に奴らが来ない事を祈るしかないか・・・」

お互いにそう言いながらマリューとバルトフェルドは動く。

マリューは最初、ラクスの寝ている寝室に向かい、ラクスを起こした。

だが、その後で甲児とシンの寝ている寝室に向かったが、其処にシンと甲児の二人は居なかった。

「あ、あの二人・・・一体何処に?」

心配になり窓から外を見る。

其処には信じられない光景が映っていた。

「どうした？つて、おいおい・・・あの二人はどうしたってんだ？」

「バルトフェルド！こつち！」

「はあ？・・・つて、おいおい」

バルトフェルドも同じように外を見る。

其処に映っていたのはとても信じられない光景であった。

「うおおりゃああー！」

「げふう！」

屋敷の庭では甲児、そしてシンがやってきた暗殺部隊を素手で殴り倒している光景であった。

「な、何だこいつら！我等コーディネイターを相手に素手で戦うだとおー！」

「やいやい！人の寝込みを襲ったあふてえ野郎だぜ！そんなひん曲がった根性この兜甲児様が叩き直してやらあ！」

「あんまやりすぎんなよ甲児。お前が本気で殴ったらこつちの奴らなんて死んじまうんだしよあ」

と、笑みを浮かべるシンもまた素手で暗殺部隊を殴り倒していたのであったりするが。

当然暗殺部隊も銃を乱射するが何故か当たらない。

嫌、二人とも当たらないようにかわしているのだ。

そしてかわしざまにカウンターの要領で攻撃して一撃の下に倒して

いるのだ。

「お、おいおい・・・俺は夢でも見てるってのか？じゃなかったらこれは一体なんてヒーローショーだあ？」

「凄まじいわねえ。あのシン君は見た所キラ君と同じコーディネーターみたいだけど、甲児君は明らかにナチュラル・・・にも関わらずあぁしてコーディネーターを殴り倒すなんて・・・これを言うと失礼だけど・・・まるで化け物ね」

「ま、マリューさん・・・それはちよつと酷いんじゃないあ」

マリューのその一言にキラが苦笑いをして言う。  
だが事実そうなのだ。

やがて数分経った頃には当たりには暗殺部隊の殆どが気絶していた。残っていたのは隊長格と思える男だけであった、

「ば、馬鹿な・・・お前等・・・本当に人間なのか？」

「ばつきやるおい！見て分かるだろうが！俺達あ列記とした人間でえい！」

「時期が悪かったなあ。たまたま俺達が寝泊りしてたってだけでこの有様なんだしなあ」

隊長の前で甲児とシンが腕を鳴らす。

この後の結果を隊長は心ならず理解していたのだろう。

咄嗟に懐からナイフを取り出す。

苦し紛れに自殺しようと思ったのだろう。

だが、その前に甲児とシンの鉄拳がそれぞれ隊長の顔面に突き刺さった。

「けっ、後味の悪い事するんじゃないや！」

「全くだ！・・・だけど・・・こいつら」

シンは気絶した暗殺部隊を見てふと疑問に思った。

「ん？どしたあシン？」

「こいつら・・・コーディネイターだぞ？」

「はあ？そのコーディネイトって確かお前の仲間だろう？それが何で？」

「俺が知るか！でも・・・一体何で？」

シンが首を傾げていた。

明らかにおかしい。

コーディネイターと言えば恐らくプラント側の部隊となる。

だが、それが何故この屋敷に。

シンの脳裏に一つの疑問が浮かぶ。

(まさか・・・議長が？だが、何故？)

シンの脳裏に浮かぶ結論。

だが、余りにも情報が少な過ぎる。

そう結論付けるには早すぎるのだ。

そんな時であった。

突如として海岸を突き破って何か巨大な物が現れた。

漆黒の海から現れた物。

それは巨大な機影であった。

丸みを帯びた体に長い腕を持ち、胴体には巨大なファンが取り付けられている。

明らかにモビルスーツとは違った外観を持った姿であった。

「き、機械獣！」

「畜生！こんな時に！肝心のマシンガーは今ミネルバの中だったの

に！」

甲児が愚痴る。

今シンと甲児には戦える力がないのだ。

今からミネルバを呼ぶにも手段が無いしあつたとしても時間がない。それに幾ら中立国だとしてもオーブの戦力では機械獣には到底勝てない。

それは先の戦闘で既に分かっている事なのだ。

だが、このままでは・・・

「おいおい・・・やばい客人の次は噂の機械獣かあ？今夜はぐつすり眠れそうにないねえ」

「愚痴つてる場合じゃありませんよ。あのままじゃ甲児くんやシンくんが・・・」

キラが窓越しに二人を見る。

今の所シンと甲児も困った顔になっていた。

如何に生身で暗殺部隊を蹴散らしたとは言え流石に機械獣は無理である。

「キラ？」

「ラクス・・・ごめん、鍵・・・貸して」

「キラ・・・でも、あれは」

ラクスの顔が曇る。

その鍵とは、どうやら彼等にとって何かのいわく的な物を封印している物なのであろう。

その為にラクスは鍵を渡すのを渋っていたのだ。だが、そんなラクスの肩にキラが手をそつと置く。

「ラクス・・・僕にとっては君達やあの子達を守れない事の方が僕には辛いんだ」

「キラ・・・分かりました」

ラクスは遂に決心し、キラに鍵を手渡す。

これを強く握り締めてキラは決意の表情になる。

（甲児君・・・シン君・・・力の無い僕だけど・・・今の君達を守る位なら出来るはずだ）

\*\*\*

「おい、シン！何とか無いのかよ！ミネルバに通信する手段とかさあ！」

「無理だ！第一俺達民間人なんだぞ！通信機すら渡してもらってないのにどうやって通信するってんだよ！」

シンの言う通りである。

いかに元の世界ではミネルバのEースパイロットであつただろうか。この世界ではシンは民間人に過ぎないのだ。

今はその卓越した操縦技術を買われて艦に置かれている身だが別の

意味では拘束されているのと同じ意味である。

「でもよあ、あんだけ巨大な敵が出たんだぜ！ミネルバだつて出撃しないのか？」

「俺が知るか！・・・だが、だからってオーブの軍まで出ないってなあどう言う意味なんだ？」

シンが疑問に思った。

何故自国に機械獣が攻めて来たと言つのに軍は動かないのか？

それにシンは疑問を感じた。

だが、今問題なのはこちらである。

このままではこちらが機械獣に踏み潰されるだけである。

そう思つた矢先の時であつた。

突如として山肌に一筋の閃光が放たれる。

それはビームの光であつた。

そして、その後一体の機体が飛び上がる。

それは白き機体に蒼き翼を有した機体「ガンダム」であつた。

「な、何だありやあ？」

「あれは・・・フリーダム！」

シンは名を叫んだ。

何故その名を呼んだのか。

それはシンがその名を知っていたからだ。

そしてそれに乗っていた者の名も。

『シン君！甲児君！』

「その声・・・キラじゃねえか！お前が乗ってるのか？」

『あの敵は僕が相手をする！君達は今の内にマリユールさんと一緒に地下シエルターに！』

「大丈夫なんですか？あんだ確か・・・力がないって？」

『何とかしてみる。このまま放っておいたら君達どころかまたオリーブまで焼かれてしまう。もうこれ以上悲しむ人を作りたくないんだ』  
『！』

キラは強く言い、そして二人の前に降り立つ。

その背中には二人に「此処は任せろ」と言っている様にも見えた。それを見たシンは察した。

「いくぞ甲児！」

「シン！」

「キラが・・・キラさんが闘ってる間、ラクスさんやマリユーさん達を守れるのは俺達の役目だ！」

「そうだな。分かった！」

甲児は頷き、シンと共に屋敷内に駆け込む。

それをキラは横目で見送った。

そして視線を目の前にたたずむ敵、「機械獣」に向ける。

「頼む、フリーダム！力ない僕に力を貸してくれ！」

キラは祈るように操縦桿を強く握り締めてフリーダムを突き動かす。それに呼応してフリーダムは動いた。

だが、それよりも早く機械獣の長い腕がフリーダムに襲い掛かった。長い腕がフリーダムの横腹に直撃し吹き飛ばされる。

「ぐあっ！」

思わず声を上げるキラ。

だが、機体には何ら外傷はない。

PS装甲がどうにか防いでくれていたようだ。  
だが、立ち上がり、もう一度機械獣を見た時、キラの口からはうっすらと赤い血が流れていた。

\*\*\*

「おいおい、何だよありやあ？」

「そんな・・・馬鹿な！アレくらいは攻撃、普通避けられるだろう？」

その頃、地下シエルターに逃げ込んだ甲児達はフリーダムが初戦の一撃で吹き飛ばされたのを見て驚愕していた。

無理もない。

シンはフリーダムの、キラ・ヤマトの強さを知っていたのだ。

あれは強い、正に鬼神の如き強さなのだ。

それなのに、今のフリーダムには、キラ・ヤマトにはその強さが欠片も感じられないのだ。

それどころか、今のフリーダムは目の前の機械獣に苦戦を強いられていた。

「キラは・・・かつての力を失ってしまったのです」

「ラクスさん！それって一体・・・」

「ご説明致します・・・あの戦いの後、キラの身に起こった悲しき出来事の事を・・・」

屋敷の外でフリーダムは飛翔しサーベルを抜き放つ。  
そして大きく振りかぶりそれを機械獣目掛けて振り下ろす。  
だが、その腕を機械獣の長い腕が絡みつかせてそのまま海面に叩きつけた。

「あぐっ……や……やっぱり、今の僕には……力がない……」

キラは悔しがりながら己の無力さを愚痴った。  
今のキラにはフリーダムを満足に操れる程の力がないのだ。  
そのせいか今のフリーダムには満足に機械獣を倒せる力がないのだ。  
その為にこうして苦戦を強いられているのだ。

「でも……例え力が無くても……僕は負ける訳にはいかないんだ！」

それでも、キラは強い目で機械獣を見る。  
そのフリーダムを機械獣は不気味な目で睨みつけていた。  
その目はまるで確実な勝利を知っているかのようにであった。

「くっ！」

キラは歯噛みしてフリーダムのライフルを放つ。  
目標は機械獣の頭部だ。

だが、その時機械獣の腹部にある巨大なファンが回転する。  
回転したファンがフリーダムの放ったライフルを吸い込んでいく。

「なっ！ビームを……吸収した！」

その光景にキラは驚愕した。  
本来ありえない事だからだ。

ビームを弾く、防ぐなどはあってもそれを吸収する事などありえないからだ。

すると、今度は長い腕をフリーダムと片足に絡める。

そしてゆっくりと自身の胴体にある巨大なファンに引き寄せていく。  
恐らくフリーダムすらも取り込もうとしているのだ。

「フリーダムを……この機体を渡す訳にはいかない！この機体には大勢の人の思いが籠っているんだ！お前達なんかは渡せられない！」

キラは叫び巨大なファンに向かい両腰に備わっている砲弾を放った。  
その砲弾すら巨大なファンは飲み込もうとした。

だが、砲弾がファンにぶつかり爆発した。

その拍子に機械獣は吹き飛び、その拍子にフリーダムは自由になる。

「よし、今なら……」

キラは機械獣の上空に飛翔する。

起き上がる機械獣は突然目の前に居なくなったフリーダムを探す。

どうやら電子頭脳を使用しているせいか知能は低いようだ。

「つ……強い……嫌、違う……僕が弱くなってる……どうすれば……どうすればあれに勝てるんだ？」

キラは困惑した。

自身の弱った腕前もそうだが目の前に機械獣は明らかに強い。

このままでは皆を守れない。

どうすれば良いか。  
そう思っていた時であった。

『聞こえるか？キラ・・・キラさん！返事してくれ！』  
「その声・・・シン君？」

『良いですか！あの機械獣は基本的に前面は無敵だけど背面は脆い！其処に全弾叩き込めばもしかしたら・・・』  
「有難う・・・その情報だけでも嬉しいよ！」

キラは笑みを浮かべて言う。

そして真下に居る機械獣を見る。

その時、遂に機械獣は上空に居るフリーダムを見つけた。

そして巨大なファンを上空に向けようとした。

だが、それよりも若干早くフリーダムは機械獣の背後に降り立った。

そして、機械獣の両手、両足を切り裂き、ダルマ状態にした。

動けなくなった機械獣を上空でフリーダムは見た。

「御免ね・・・でも、君は壊さなくちゃならないんだ」

哀れみの目で機械獣を見て、そして引き金を引いた。

それとほぼ同時にフリーダムは全武装を展開してそれを機械獣に向けて放った。

それを浴びた機械獣は背面から食らったせいも吸収も出来ずに、そのまま全身に浴びて爆散した。

跡には機械獣の残骸しか残らない。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

戦闘を終えた後、キラは激しく荒ぶる呼吸を必死に整えていた。額には大量の冷や汗が流れ、手も震えている。

明らかにキラの様子はおかしかった。  
そう、かつての様な戦いに慣れた姿は何処にもなかったのだ。  
まるで、かつてのキラの様な・・・

\*\*\*

「フッフ、流石はキラ・ヤマトだ。幾ら弱った状態とは言え、あの機械獣を落とすなんて」

戦闘を終えた後のフリーダムを見ていた青年は笑みを浮かべていた。

「ま、例え弱くなったとはいえ、コレ位の事はやって貰わないとねえ・・・でなきゃ僕まで弱く見られちゃうし」

そう言い、青年は漆黒の空へと消えていく。

・・・フリーダムガンダムと共に・・・。

「いやあ、冷や冷やした戦いだつたぜえ」

戦闘を終えたキラをシンと甲児達が出迎えた。

その二人が見たキラは既に疲労困憊状態であった。

明らかにキラはかつてシンの闘っていた時のキラ以上に弱くなっている。

今のキラでは、酷い言い方だが戦力にはならない。

そう思えたのだ。

「シン君・・・これが、今の僕の出せる力の全てだよ・・・」

「訳は聞きました・・・キラさん、貴方はもう戦えないんですね？」

「・・・悔しいけど・・・その通りだよ」

シンの言葉にキラは悔しげな顔をする。

分かるのだ。

シンの申し出にキラは応えられない。

それがどれ程悔しいのか。

キラはその悔しさに打ちひしがれそうになっているのだ。

そんなキラの肩にシンはそつと手を置く。

「だったら・・・あなたは闘わなくて良い」

「え？」

「シン？」

シンの言葉にキラは勿論甲児も驚く。

その時のシンの目は堅い決意の色が映っていた。

「あんたが闘えないなら・・・代わりに俺が闘う！あんた程器用には出来ないかも知れないけど・・・俺があんたの代わりにこの戦争を終わらせる剣になる！」

「シン君……」

シンの言葉は本物であった。

その目が何よりの証拠である。

その言葉と、その目を見た時、キラは言い様の無い気持ちに包まれた……と。

「良く言うじゃねえかこんにゃろっ!」

「おわっ!」

そんなシンの首にヘッドロックを掛ける甲児が居た。

明らかに空気を全く読んでいません的な感じである。

「かつこいい事言うじゃねえの。だけどその剣には勿論俺も入ってるんだよな?」

「はあ?」

「はあ?……じゃねえだろう!俺達はもうダチなんだぜ!だって俺もお前の考えに乗ってやるよ。俺とマジンガーZでな」

「甲児……」

シンは甲児を見た。

甲児の目もまた強く輝いていた。

その目は正しく戦争を終わらせようと硬く決意したシンのそれと全く同じだったのだ。

「改めて……頼むぜ!甲児」

「任せとけ!」

二人は決意新たに固く拳を握り合った。

世界は違えどこうして少年達の心は結び合ったのだ。

だが、難題はまだ続きそうである。

「さあ、ハッキリ言って貰おうかしらあ？お二人さん」

「……………」

意気揚々とミネルバのドッグに戻ってきたシンと甲児であったが、戻ってきていきなりのこれである。

どうやら昨夜は居なくなった甲児とシンの搜索で皆大慌てであったようだ。

そのせいで皆の目に若干の隈が目立つ。

そして正座させられてる二人の前には怒り心頭で立つルナマリアが居た。

「え、ええと……何て言ったら良いか……」

「いやあ、シンと二人でツーリングしてたら……ガス欠起こしちゃってそのお……」

「へえ、ガス欠起こしたらあんな風になって帰って来るんだあ」

ルナの指差した方にあつた物。

それは機械獣の戦闘に巻き込まれてスタボロになった2台のバイクであつた。

それを見た二人は揃って青ざめる。

「幾ら民間人だからって、あんた達は一応捕虜の扱いなんだからねえ……勝手に事して、どんだけ皆迷惑したと思ってるの！」

「す、すみませんでしたあ！」

睨みつけるルナに二人揃って平身低頭した。

しかし、それで許される筈もなく、その後、ルナの合図と共にミネルバクルー一同からの激しい報復の嵐を食らう羽目となった。  
そして……

「はぁ……厳罰は避けられたけど……」

「よりによって……俺達二人だけでミネルバの外装掃除かよ」

そう言つて二人はボコボコの顔になりながら朝日の光を浴びながらも、巨大なミネルバの外装をモップ片手に磨くのであった。

第15話 力を失くした翼（後書き）

ステラ

「ねえ、ところでステイングってさあ」

ステイング

「あ？何だよ？」

アウル

「ステイングのブロックワードって何だよ？」

ステイング

「何で教えなきゃなんねんだよ？」

ステラ

「だって、私のブロックワードは『死』だし」

アウル

「俺のブロックワードは『母』だし」

ステラ

「・・・・・・・・」

アウル

「・・・・・・・・」

ステイング

「????？」

ステラ

「死ぬのは嫌あああああああああああ！」

アウル

「母さああああああああああああん！」

ステイング

「お前等馬鹿だろう」

## 第16話 異なる世界の兄妹、動き出す暗雲（前書き）

シンはオーブに着き、甲兎と共にオーブ内に居ると思われるキラを探していた。

だが、オーブ中何処を探しても見つからず、諦めかけていた時、慰霊碑の前でシンはキラと運命的な再会を果たす。

其処でシンは自身の正体、そして目的を話彼との共闘を望んだ。

だが、キラの体は既に闘えない状態になっており共に戦うことが出来なかったのであった。

シンはそんなキラを見て、「あんたが闘えないなら俺が代わりに闘う」と、決意を新たにした。

だが、その間にも悪しき者達の魔の手は徐々に迫ってきていたのであった。

## 第16話 異なる世界の兄妹、動き出す暗雲

「タリア艦長！今日は折り入ってお話があります！」

突然何だ！？・・・と、思う読者の方々も多い事だろう。

なので簡単に説明させて頂く。

此処は御馴染みザフト軍の最新鋭艦ミネルバ。

そしてそのミネルバの艦長室。

其処で椅子に座っている艦長のタリア・グラティスに向かい真剣な面持ちで話を切り出したのは以外や以外。

あの兜甲児であったのだ。

「何か重大な話のようね？」

「はい、それはもう、この『艦』の将来を左右する重大な話です！」

何時になく真剣な顔で甲児は言う。

その顔を見てタリアの顔も真剣そのものになる。

兜甲児は戦争経験としてはかなり浅い人間である。

しかし、戦闘経験は豊富であり恐らくこの艦のクルーの誰よりも長けている事だろう。

そんな彼がこうして相談に来た・・・というのは艦長としては無碍ゴウに出来ない話である。

「良いわ、聞きましょう。一体どんな内容なの？」

「俺は今日気づいたんです。このミネルバにはある重大な物が欠けているんです！」

「重大な物！？」

その言葉に緊迫の空気が流れた。

このミネルバは宇宙艦だが地上でも使用出来る万能母艦である。多数の武装を施し、使われている技術はザフトでも最新鋭の物ばかりである。

にも関わらずこのミネルバには何か欠けていると言っているのだ。これは絶対に聞き逃せない事だ。

タリアは内心そう思い甲児の言葉を聞く事にした。

「それで、このミネルバには何が欠けていると言っているの？」

「それはズバリ・・・」

其処で甲児が一旦区切った。

恐らく何かしら考えがあつての事なのだろう。

場の空気が一層ピリピリしだした。

思わずタリアの顔から冷や汗が流れる。

固唾を呑みその答えを待っていた。

だが、その答えは彼女の予想を遥かに超えた代物であつた。

「ズバリ・・・『癒し』が足りないんです！」

「・・・は？」

一呼吸置き、タリアがあきれ果てたかの様な顔をした。

そして思わずそんな言葉が漏れた。

確かに以外であつた。

戦艦なのだから癒しなど必要あるのか？

確かに兵士達のメンタルケアの為にその様な物は必要なのかも知れない。

だが、それを真剣な顔で言う事なのだろうか？

「この艦を見て回りましたがこれじゃまるで軍艦じゃないですか！これじゃ気が滅入ってしまいます！俺達は軍人じゃないんですよ！」

「正確にはこれは軍艦であって貴方は一応民間人兼捕虜と言う肩書きなのよ」

「ですから！このままじゃ俺の気がどうにかなくなってしまいます！其処で、このミネルバ内には是非とも『温泉』の実装をお願いしたいんです！ご検討を！」

タリアの言葉を一蹴して甲児が突き出した要求・・・それはこのミネルバに『温泉』を付けてくれ！と言う至極どうでも良い内容であった。

当然、そんな内容呑む筈もなく・・・

「・・・・・・・・却下します」

クルリと甲児に背を向けてタリアは静かに言い放った。

それに対し甲児が口をあんぐりと開けて大層ショックを受けていた事は周知の事実であったりする。

\*\*\*

「あゝあゝ、もうちょっとでミネルバに温泉を入れられると思ったのになあ・・・」

「お前、幾ら何でもそんなくだらない内容の為に艦長の所に行った

つてののか？」

時は変わり此処はミネルバの休憩室。

其処にあるソファーに腰掛けて甲児が愚痴っている。

その横でシンが大層呆れた顔で甲児を見ていた。

どうやら上の内容に滅茶苦茶あきれ果てたのだろう。

と、言うか・・・普通言う筈ない事である。

だが、それをこいつはやり遂げるのだからこいつは怖い。

そうシンは思えたのだ。

「だあってよお、お前もそう思わねえかあ？風呂はねえし、あるとしたらシャワーだけだしよお。しかも使用時間も限られてるし、酷い時なんかタオル一枚に桶一杯の水で体拭け・・・だぜえ！」  
「しょうがねえだろう。宇宙じゃ水は貴重なんだよ」

シンの言うのは最もである。

宇宙では水と空気は1万円札と同じ位貴重なのだ。

この二つがないと宇宙では生きては居られない事は間違いない。

故に宇宙に出た際には水や空気は極力ケチらないといけないのである。

その為にたまに甲児が上で言った様な事も起こるのである。

それが地球育ちの甲児には溜まらなく辛かったのである。

「嫌だ嫌だあ！温泉入りたいい！そんなでもって女湯覗きたいい！」  
「って、結局本音は其処かよ！」

結局甲児の本音は女湯を覗きたいだけであつたようだ。

つくづく馬鹿な意見に付き合ってしまったと深く溜息をつきながらシンは立ち上がる。

そしてそそくさを休憩室を後にしていく。

「ん？何処行くんだよシン？」

「外の空気吸つてくる。お前の『馬鹿』がうつらないようにする為だよ」

「んだとこの野郎！俺が馬鹿だつて言うのかあ？」

「いや、お前は馬鹿じゃない・・・『大馬鹿』だ」

「て、てめえ　！」

シンの吐き捨てた言葉に甲児が激怒する。

だが、そんな甲児を無視してシンは休憩室を出て行く。

彼にしてみればとても無駄な時間を使ってしまったと思っている事だろう。

だが、事実無駄な時間なのだ。

わざわざ甲児の愚痴を聞いてやったらその結果がこれである。

ミネルバ内に温泉の実装。

そして女湯を覗くと言う甲児のとんでもなく下らない計画であったのだ。

はつきり言つてその為に裂いた時間を返して欲しい思いである。

「ったく、下らない話に貴重な時間を使っちゃまった・・・」

通路を歩きながらシンは一人愚痴っていた。

彼が愚痴るのも無理はない。

今のシンにははつきり言つて時間は余りないのである。

この世界の戦乱を終わらせなければならぬ。

だが、その為に出会ったキラは理由こそ不明だがかつての十分の一程の力もない。

これでは酷い言い方だが戦力としては期待など出来る筈がないのだ。従つてこれからは自分が中心となって闘わなければならぬのだ。

しかし、肝心のモビルスーツが今のシンにはないのだ。

現在ザクをヴィーノとヨウランが魔改造と言う名の元に修理を行っているが、何時直るのかハッキリ言って疑問である。まあ、恐らく改悪化するのは目に見えているのだが。

ともかく今のシンには力も無ければ自由に動ける移動手段もない。今は仕方なくミネルバに乗っているしかない。

しかも当の甲児はあの話聞いた後だと言うのに馬鹿丸出しである。これでは先が思いやられる。正にそう思えたのだ。

「とにかく、今は外に出るか・・・」

焦った所でしょうがない事である。

どの道今ミネルバは補給、整備の真つ最中である。

最低でも後数日は此処に立ち往生である。

歯痒い話ではあるが仕方ない。

動けない事に変わりはないのだ。

結果、かなり手持ち無沙汰になってしまったシンである。

「ちえっ、シンの野郎・・・人の事馬鹿にしやがって・・・」

その頃、甲児は話し相手をなくし休憩室で不貞腐れていた。

と、言うのも話し相手であったシンは外に行ってしまったしルナやレイは何処に居るか分からないし、居たとしてもかなり警戒されてしまい話どころではないのだ。

マユはと言うと、シンと仲が良いと言うせいなのか甲児にも距離を置いてしまっている。

その為、今の所この艦で親しく話す者と言ったらシンと整備班のヴィーノとヨウランだけである。

だが、そのヴィーノとヨウランは先ほど言った通りシンの機体の魔改造で忙しく話をしてられる状態ではないのだ。

「あゝあ、どうすつかなあ・・・暇だなあ・・・」

軍人じゃない為甲児は訓練する気もないしましてや機体の整備も一通り終えている為何もする事がないのだ。

その為これから何をしようか正直考えさせられる事となった。

「じゃあねえ。折角だしカガリやユウナの所に遊びにでも行くかあ」

と、そんな事を考える甲児。

だが、普通VIPにそう簡単に会える筈が内のだが・・・。

\*\*\*

その頃、シンは一人ブラブラとオーブ内にある小さな公園を歩いていた。

時刻は正午、今日は日曜日と言うのもあってか公園はかなり賑やかである。

回りには世間話に華を咲かせる主婦や公園内で他愛無い遊びに夢中になる子供。

更にはジョギングをしている小太りなおっさんや爺さん、ベンチの上で昼寝している若者など様々である。

そんな中をシンは歩いていた。

「そう言えば・・・俺の居たオーブもこんなだったな・・・」

ふと、シンは思い出した。

かつて、自分が居た世界のオーブ。

其処は戦争とは無縁で平和で、とても安らげる世界であった。

だが、あの時・・・全てが変わってしまったのだ。

「ん？」

思い出しながら歩いていった時であった。

公園の丁度終わりの所。

人の余り居ない場所のベンチの上で一人座っているマユを見つけた。

皆が明るい顔をしている中、彼女だけは暗い顔をしていた。

その理由は、シンにも分かった。

彼女もまた家族を失ったのだ。

此処、オーブで・・・

だが、シンはその時はオーブには降りなかった。

辛い思い出を思い出したくなかったからだ。

では、何故マユは降りたのか？

それをシンは知りたくなかった。

そう思うと自然とシンの足取りはマユの方へと進んでいく。

「よう」

「あ・・・」

気軽に、あくまで余り気を使わない感じにシンは声を掛けた。

その声に気づいたのかマユがそっとシンを見る。

目が赤かった。

恐らく泣いていたのだろう。

シンは理解した。

例え赤服を着ていようとマユはまだシンより下の少女なのだ。本来なら戦争を体験せず学校に通ったり彼氏を見つけたり友達と楽しく話し合ったりしている世代である。

それがこうして戦争をしている。

それが兄として、シンには辛く思えた。

「どうしたんですか？」

「なに、艦に居てもやる事がないんで暇だったもんでね」

事実その通りだ。

ミネルバに居ても民間人のシンにははっきり言って居場所がない。それならば艦の外に居た方がずっと気が楽になる。

そう言った理由なのだ。

「そうですね・・・私も今は暇です・・・久しぶりの休暇ですんで」

マユもボソリとそう言った。

どうやら彼女は正式に休暇を貰ったようだ。

しかも上陸許可も降りているらしい。

普通なら諸手を挙げて喜ぶ場面なのだろう。

だが、彼女は余り嬉しくなさそうだ。

「やれやれ、お互い手持ち無沙汰って事か・・・」

頭を乱暴に掻きながらシンは呟いた。

そしてマユの隣の少し離れた位置に腰を降ろす。

マユはそんなシンを横目で見たが、チラリと見ただけでまたすぐに視線を地面に戻す。

だが、数秒間置きにこちらを横目で伺ってくる。

明らかに何かを聞いたそうな仕草なのに気づくのは流石兄妹なのだろうか。

「何か聞いたそうだな？」

「え！！！」

思わず声を上げる。

恐らく・・・いや、確実に凶星だ。

「遠慮するなよ。話せる事なら話してやるよ」

シンは気さくな笑顔を作りマユに言う。

余り気を使わせない様にする為である。

するとマユがぼそりと口を開いた。

「貴方は・・・誰なんですか？」

「・・・前にも言っただろう。俺はシン・アスカだ」

「でも・・・でも、私の知ってるお兄ちゃ・・・シン・アスカさんは、あの時・・・」

「死んだ・・・だろう？聞いたよ」

マユの言おうとした事は粗方分かっていた。

やはり頭の中が混乱しているのだろう。

目の前に居るのは死んだ筈の自分の兄。

そして、シンの目に映っているのはかつて元の世界で死んだ筈の妹。異なる世界同士での再会なのだ。

「貴方は・・・貴方は確かに私の知っているシン・アスカに似ています・・・でも、違う」

「どう違うんだ？」

「まず、お兄ちゃんは貴方みたいに遅しなかった！」  
「ずえっ！」

いきなりそんな言葉が出た途端シンは思いっきりこけた。  
どうやらこの世界の俺は相当『もやしっ子』だったようだ。

ふと、シンは自分の体つきを見た。

余り鏡で自分を見ないので気づかなかったが、確かに若干体つきは遅しくなってる気がする。

無理も無かったか。

甲児の世界に来てから甲児と共に生活していたのだ。

同じ釜で飯を食った仲・・・と、言うのだろう。

とにかく共に生活していたのだ。

だが、その世界は自分の居た世界とはとてもかけ離れた世界であった。  
た。

皆が明日に向かって全力疾走しているのだ。

まごまごしていたらあつと言う間に差が出てしまう。

その為にシンも必死に食らいついてきた。

だが、それも最初の内、気がつけば同じ歩幅で歩ける程になつていった。  
た。

それが今の体つきなのだろう。

「それに、お兄ちゃんは優しくて、私の事何時も気に掛けてくれて、私の事怒った事なんて一度もなくて・・・それで・・・喧嘩が凄く弱かった！」

（おい、どんだけもやしっ子だったんだよこっちの俺は・・・）

マユの言葉に顔面が赤面しそうになった。

どうやらこの世界のシンは相当なまでにシスコンでもやしっ子だったようだ。

自分もそれほど喧嘩は強いと言う訳ではないが決して弱いと言う訳

でもなかった。

まあ普通な位である。

と、言うのもわざわざコーディネイターに喧嘩売る人間などそう居ないのだ。

その為シンも余り喧嘩とは無縁の世界で生きていた。

だが、甲児の世界は全く別。

寧ろ喧嘩のオンパレードである。

隙を見せれば後ろから殴られる事など当たり前。

顔が会えば即喧嘩。

そんな世界だったのだ。

とにかく皆血気盛んでシンも度々喧嘩に巻き込まれていた。だからだろう、シンが喧嘩に滅法強くなったのは。

（この世界の人間・・・あっちに行って果たして何人が1ヶ月過ごせるか？）

正直そう思えた。

だが、結果はすぐに出た。

恐らく10人とは居ないだろう・・・と。

ふう、とシンは軽く溜息をつく。

そして首だけをマユに向ける。

だが、その時シンに映っていたのは、この世界で見たマユの顔ではなかった。

いや、それだけじゃない。

さっきまで映っていた公園の景色が全てなくなっていたのだ。

「な、何だ！一体どうしたんだ？」

思わず立ち上がり声を上げるシン。

そんな時であった。

”ククク・・・”

!!!

声が聞こえた。

誰かの笑い声だ。

とても不気味な、背筋の凍るような寒気のする笑い声であった。

「誰だ！何処に居るんだ？」

回りを見ながらシンは叫んだ。

それでも回りには何も無い。

只の漆黒の闇だけが目の前にあった。

そして、その間も、背筋の凍る笑い声は聞こえ続けた。

「薄気味悪いんだよ！さっさと出て来い！」

『そう急かすなよ。すぐに出てやるよ』

「！！！！」

声は聞こえた。

それは真後ろからだ。

咄嗟に距離を置きながら振り返る。

其処に映っていたのは自分であった。

「な！お・・・俺？」

『よお、初めて会うなあ』

目の前に映っていたもう一人の俺は不気味な笑みを浮かべる。

その笑みがシンには溜まらなく嫌に見えた。

何故自分がこんな不気味な笑い方をしなければならぬのか？

そんな風に思えたのだ。

「薄気味悪い顔するんじゃないねえ！」

『そうか・・・この顔じゃ駄目か・・・結構良い線行ってると思っただけだなあ』

そう言っただけで目の前の俺は両手で顔を隠す。

そして、パツと両手を退けた。

其処には俺の顔は無く、変わりに妹のマユの顔が映っていた。いや、顔だけじゃない。全てがマユのものになっていた。

『これならどう？お兄ちゃん』

「いい、良い訳ないだろう！何の冗談だよ！」

以前より薄気味悪さが増す。

はつきり言っただけで悪ふざけにも程があるのだ。

そのせいかふつつつとシンの中に怒りが込み上げてくるのが分かった。

「いい加減にしろ！てめえは一体誰だよ？」

『教えて欲しい？じゃあ教えて・・・やるよ』

途端に口調が変わった。

かと思うと目の前のマユはまるで液状にどろどろに溶けてしまい床に散乱しだした。

その光景に思わず口元を手で隠すシン。

喉元まで込み上げてきた吐き気をどうにか抑えてそれを見る。すると目の前でその液状の物体が持ち上がり形を成していく。

出来上がったのは一人の・・・そう、言うなれば『死神』その者であつた。

「し・・・死神？」

『そう、俺はお前に取り付いてる死神だよ』

「俺に・・・取り付いてるだと!？」

縁起が悪いにも程がある話だ。

俺に死神が取り付いてるなどと教えて欲しくない物だ。

そもそも、その死神が一体何の用なのだ。

「何の用だよ？まさか出てきて一緒に遊びましょう・・・じゃないだろう？」

『へっへっへっ、まさかあ、それも良いけどよあ、今回はお前に忠告しに来てやったんだよ』

忠告？

はつきり言って願い下げである。

死神の忠告など聞く耳持たずだ。

「悪いな。俺はまだ死神のお世話になるつもりはねえよ」

『いやいや、お前は近い内俺の元に来る運命なんだよ』

「何!？」

その言葉にシンの顔が引きつる。

死神の元へ行く。

それは即ち『死』を意味していた。

「ど、どう言う意味だ!？」

『お前はこの世界で死ぬ。そしてお前の隣に居た娘はこの世界を滅ぼす。これは決まった運命なのさ』

「ふざけんな!そんな運命!俺は絶対認めねえ!現に元居た世界だ

つてキラさんが・・・」

『だが、此処じゃ奴は役立たずの只の人間だぞお』  
「ぐ・・・」

シンの言葉が其処で区切られた。

その通りなのだ。

今のキラは、正確にはこの世界のキラは以前の力を何故か失ってしまっており満足にガンダムを動かせない状態になっている。

その上、これはシン自身の予想だが彼は今SEEDが使えない状態の筈だ。

これではこの世界の滅びの運命を変える事など出来る筈がない。

『だから言っただろう？お前はもうすぐ俺の元へ来る。この世界は滅ぶ・・・つてな』

「・・・んな」

『ああ？』

「ふざけんな！」

『うおっ！』

突如大きな声を出したシンに死神は驚く。

その目には今まで以上に真っ赤に輝く瞳を宿したシンが居た。

「何が運命だ！ふざけんじゃねえ！そんな運命、こつちから願い下げだ！」

『馬鹿な奴だ。運命は変えられないの。それ位分かるだろう？』

「だったら・・・そんな運命・・・俺が壊してやる！俺は・・・俺は運命に『抗ってやる』」

シンが声を荒立てて叫ぶ。

その瞬間、彼の周囲に眩い輝きが放たれた。

その輝きを浴びた死神が徐々に溶けていく。

『ちっ、やっぱりお前をそう簡単に殺せないか・・・だがなあ、覚えてやがれ！俺は何時でもお前の側に居る・・・そして、必ずお前を殺してやるからなあ！』

憎憎しげにそう言うと死神は陰も形もなくなってしまった。

「来るなら来い！俺はお前に何か負けねえし、そんな運命も認めねえ！そんな悲しい運命なんざ・・・俺がぶっ潰してやる！」

拳を硬く握り締めてシンは叫んだ。

すると、突如として漆黒の闇は晴れていき、辺りには眩い閃光が照らされていく。

その眩い閃光がシンの視界を塞ぐと、やがてシンの意識は途切れていった。

「・・・さん・・・ンさん・・・シンさん！」  
「うおっ！」

目を覚ますと其処は先ほどの公園であった。  
隣には必死に自分を揺さぶっていたマユが居た。  
かなり慌てた様子である。

「何だ？どうしたんだ？」

「どうしたんだ？じゃないですよ。急に意識を失って動かなくなっ  
たんですよ！ビックリしましたよ」

「あ……悪い……」

思わずそう謝罪するシン。

どうやら眠っていたのか、はたまた気を失っていたようである。

だが、考えを変えてみるとゾツとした。

もしあの時あの死神の元に行っていたら、きっとその後シンは二度と目覚めなかっただろう。

だが、その時シンの胸中にあっただのは死神に対する恐怖ではなく、寧ろ闘志にも近い感情であった。

（来るなら来い！俺は何時だってお前の挑戦に受けて立ってやる！俺はもう……二度と自分の運命には負けない！どんな運命にも、俺は抗ってみせる！）

\*\*\*

その頃、甲児はオーブの大使館前に来ていた。

しかもその中を甲児は堂々と歩いている。

本来なら一般市民など入れる筈がないのだ。

では何故入れたのか。

それはユウナのお陰である。

実はあの後ユウナと結構親しくなった甲児は彼の計らいで顔パスで大使館に入れるようになったのだ。

「へっへえ、まるで偉い人になった気分だな」

甲児はまるで日本で言う総理大臣になった気分で廊下を歩いていた。床には高そうな赤い絨毯が敷かれており天井は自分の手が届かない位高い。

正に偉い人専用の道ですよ・・・と言いたげな通路であった。そんな道を歩くだけで甲児の気分は晴れ晴れとした。

「ようし！この際だからカガリかユウナに飯でもたかっちまうかあ」

なんとも物騒な事を呟く甲児。

幸いその時周りに人が居なかったから幸いだった物の、もし聞かれていたなら即御用であっただろう。

くわばらくわばらである。

そう甲児が思いながら歩いていた時であった。

『ふざけるな！』

「ん？」

声が聞こえた。

女性の声であった。

とても怒ったような・・・それで居て激しい声であった。

「この声・・・確か、カガリか？」

そう悟り、甲児はドアに耳を近づける。

「何故、オーブが大西洋連邦と同盟を結ばなければならないんだ！」

「何も大西洋連邦と同盟を結ぶだけではありません。これは全世界で苦しむ人々に救済の手を差し伸べる第一歩なのです」

「だが、それではオーブの理念はどうなる！オーブの中立の理念は何処へ行ったのだ！」

「では、代表はまたその理念で国を焼くつもりですか？」

どうやらかなり険悪な話である。

甲児の額が僅かに曇ってきた。

（おいおい、確か連邦っていやあザフトの敵だったよなあ・・・こりやこのまま此処に居るのって相当やばいんじゃないかねえのお？）

そこら辺は頭の悪い甲児にも理解できる。

要するにオーブはザフトの敵である大西洋連邦、つまり連合と同盟を結んでしまう事になったのだ。

そうなればザフトのミネルバがこれ以上オーブに滞在する訳にはいかない。

下手すればオーブ全軍から攻撃を受ける危険性すらあるのだ。

（こりやうかうかしてらんねえな・・・っと！）

咄嗟に甲児は扉から離れて近くの壁に身を潜めた。

それと同時に扉が開き、閣僚達が続々と出て行く。

その中にカガリ、そしてユウナの姿もあった。

「御免よおカガリ。キツイ事言っちゃって・・・でもああ言わないと君の為にならないじゃないか」

「ユウナ・・・だが・・・」

ユウナがカガリの肩に手を置きながら親しく話し合う。

カガリはそんなユウナに終始困り顔であった。

そんな二人の後ろに甲児は近づき。

「よ、お二人さん」

「ん？」

「あ！」

二人は振り返り、揃って声を出す。

其処には見知った甲児の顔があった。

ユウナは親しい友人との再会に喜び、カガリは気不味い場面に遭遇してしまつた事に気づき赤面する。

「随分難しい話してたなあ」

「ありやりや、もしかして聞いてた？」

「そりやもう、頭から尻まで全部な」

甲児が腕を組んで言う。

それにユウナはバツの悪い顔を見るとそっとカガリに乘せていた手を退かす。

「カガリ、悪いけど少し甲児君と話がしたいんだ。二人つきりにさせてくれないか？」

「あ、ああ・・・別に構わんが」

カガリは別に咎める理由もないのでそのままそくさと後にする。

その後、ユウナは親指を窓の外に見える中庭に向ける。

恐らく「向こうで話をしよう」と言う意思の表れであろう。

その言葉に従い甲児とユウナは誰も居ない中庭にやってきた。

「一体どうしたんだ？オーブって確か中立だろう？それが何で連合なんかと同盟結んじゃうんだ？」

「話を聞いていたなら分かるだろう？世界中で苦しむ人たちの救済

のためだよ」

「それなら救援の手を差し伸べるだけで良いじゃねえか。わざわざ同盟を結ぶなんて変だぜ？」

流石の甲児も疑問に感じていた。

そんな甲児の疑問を聞き、ユウナは軽く溜息をつくると真剣な顔になり甲児を見た。

「実はね甲児君・・・今、オーブは全国民を人質に取られたような物なんだよ」

「・・・何か訳ありみたいだな？」

甲児もまた真剣な顔になる。

そしてユウナの顔をじつと見ながら彼の言葉に耳を傾けた。

「それは、今からほんの数時間前だったんだ・・・」

\*\*\*

『冗談じゃない！そんな話吞めませんよ！』

ユウナはモニターに向かって叫んだ。

モニターの中には一人の男性が映っていた。

銀色の髪に紫色の口紅を塗り、クリーム色の綺麗な装飾が掛かった

スーツを着こなした不気味な男と話していたのだ。

『ですから、何度も言っているではありませんか？共にあの化け物を討つ為にもオーブ軍の戦力をそっくり我等に与えて欲しい・・・と』

『ふざけるな！そんな要求呑めるはずがないでしょう！貴方は正気ですか？』

『正気ですよ。それと、貴方はこの要求を呑まなければならない』

男は更に笑みを浮かべて指を鳴らす。

すると後ろのモニターが光り輝き、其処に何か映し出されていた。それを見た途端、ユウナは顔面蒼白した。

『こ・・・これは！』

『そう、今巷を騒がせている「機械獣」ですよ。もし、貴方達オーブがこれを呑まなかった場合・・・恐らくオーブの首都の何処かに機械の獣が暴れ回る事になるでしょうねえ。そうなったら一体どれ程の死者が出る事が・・・』

そう言つて男はコロコロと不気味に笑い出した。

それを見ていたユウナは苦虫を嚙んだような顔をした。

そして、ガクンと頂垂れてこう言った。

『分かりました・・・要求を呑みます』

『それで良いのです。お互いに宇宙に住む不気味な化け物を一掃しましよっ』

そう言い終わりモニターはプツンと切れ、真っ黒な画面となった。

\*\*\*

「と、言う訳なのさ・・・」

「畜生！よりによって機械獣を使ってオーブ市民の皆を人質に取るなんて・・・卑怯だぜ！」

甲児は腕を叩き付けて怒りを露にした。

歯を噛み締めて怒りの籠った瞳で空を眺めていた。

甲児もユウナの気持ち痛み程分かるのだ。

故に悔しいのだ。

自分では何も出来ないその悔しさが・・・

「甲児君、友人として、君に頼みたい事があるんだ」  
「ん？何だ」

ユウナが甲児にある事を頼む。

それは、この先歴史を揺るがすとしてもない事なのであった・・・  
りする。

第16話 異なる世界の兄妹、動き出す暗雲（後書き）

ギル

「ところでレイ」

レイ

「何でしょう？議長」

ギル

「私の出番・・・少なくともか？」

レイ

「気のせいでしょう」

ギル

「そうか？だがこのままでは私の存在が読者方に忘れられる危険性が・・・」

レイ

「気のせいでしょう」

ギル

「そうだろうか？・・・しかし私の脳裏には赤いMSを駆って3倍の速さで戦っていたとか・・・」

レイ

「議長・・・それは禁句です」

ギル

「・・・・・・・・」

アーサア

「それ言ったら・・・僕の出番も少ない気が・・・」

タリア

「気のせいよきつと」

## 第17話 登場！謎のヒーロー（前書き）

オーブの閣僚でユウナに頼みごとをされた甲斐。果たしてその頼みごととは一体・・・  
つてな感じで第17話、始まりますよお！

## 第17話 登場！謎のヒーロー

正午のオーブにある結婚式場。

其処には今一組のカツプルが誓いの儀式を行っていた。

司祭が二人を見て言葉を並べる。

だが、小難しい言葉なので割愛させて頂く。

「……………」

「どうしたんだい？カガリ」

沈んだ顔をしたカガリを隣に立っていたユウナがそっと尋ねる。

そんな時のユウナの顔はとても穏やかな顔であった。

因みに二人は今ウエディングドレスにスーツを身に纏っている。

回りではオーブの高官達がとても嬉しそうな顔をして見守っていた。

アス八家とセイラン家。

二つの家柄の二人が結ばれる。

それはオーブにとっては喜ばしい出来事なのである。

だが、当のカガリは余り嬉しくなさそうな顔をしていた。

どうやら本人としては余り嬉しい事ではないようだ。

そんなカガリの顔を横目で見たユウナは少し、ほんの少しだがカガリを哀れみの目で見ていたのであった。

そして、式は順調に進み、やがてお決まりの場面に突入しようとしていた

……正にその時であった。

『はああああっはっはっはっ!』

声が響いた。

突如である。

高官達は皆何処からした声なのかと辺りをキョロキョロしだしている。

そして、声の主はすぐ近くに居た。

「あ、あそこだあ!」

高官の一人が指差す。

それは式場の上にある柱の上であった。

其処には一人の謎の青年?が立っていた。

黒い髪に白のアイマスクをつけ、真っ赤なスーツを着こなし漆黒のマントを羽織った人物であった。

(き、来たあ!)

その人物を見た途端、ユウナの脳裏にそんな思いが浮かんだ。

「だ、誰だ貴様はあ!」

高官の一人が青年を指差して叫ぶ。

すると青年?はニヤリと微笑む。

「私か?私の名は『デステイニー仮面』其処の麗しい花嫁を見て私は一目で好きになってしまった!その為に彼女を誘拐させて貰う!」

そう言うとデステイニー仮面はカガリとユウナの間に降り立ち、いかにもクールな仮面でカガリを見る。

「こうして近くで見ると尚美しい……益々好きになった……では、頂いていくぞ！」

「へ？な、なあぁ！」

カガリは素っ頓狂な声を上げる。

何せいきなりそのデステイニー仮面がカガリをお姫様抱っこしたのだから驚くのは無理はない。

「な、何なんだお前は？いきなり出てきて誘拐するだとお！お前一体……」

（良いから黙ってるっての！こっちだって好きでこんな格好してる訳じゃねえんだしよ）

「な、その声！……まさかお前……」

カガリが名前を言おうとしたのをデステイニー仮面が口元に指を近づけて止める。

それはカガリに「言う通りにしろ！」といっているのと同じ事なのであった。

「き、貴様！僕のハニーをどうするつもりだ？」

「フハハハ！前にも言っただろう。私はこの花嫁が好きになってしまった！だから頂くと言うんだ！」

「な、何だとお！」

デステイニー仮面の言葉にユウナが驚愕する。

それを見たカガリもまた……

「あ……あ~~~~れ~~~~、誰か助けてたも~~~~れ~~~~」

等と言葉を発する。

しかしかなり棒読みな上にカガリの演技力の低さもあってかかなりわざとらしい。

それを聞いていたデステイニー仮面とユウナの顔が汗ばむ。

だが、回りでは……

「た、大変だあ！カガリ様が攫われたあ！」

「撃て！撃ち殺せえ！」

「馬鹿！カガリ様に当たってしまうだろうがあ！」

辺りではすっかり大騒ぎになっていた。

どうやら誰もこれが演技だと気づいていないようだ。それを見てデステイニー仮面とユウナはホツとする。

「さらばだオーブの諸君！麗しの花嫁は頂いていくぞ！」

「ああ！カガリイイイ　！」

「あ、あ~~~~れ~~~~」

いかにもわざとらしい演技をしながらデステイニー仮面はカガリを抱えて階段を駆け下りる。

だが、その先には既に銃を持った兵士達が固めていた。

「やい、仮面野郎！カガリ様を離せ！」

「ちっ！」

舌打ちしながらデステイニー仮面が別の道に行く。

だが、其処もまた同じであった。

いや、気がつけば既に取り囲まれている。  
正に袋のネズミであった。

(まだか・・・早く来いよあの馬鹿・・・)

内心焦りながらデステイニー仮面が愚痴る。

その時であった。

彼のつけていた白のアイマスクから自分にしか見えない様に信号が発せられた。

それを見たデステイニー仮面はニヤリと微笑む。

「フツ、それで私を捕まえたつもりかな？残念だが私は狙った獲物は必ず手に入れる主義なのでね」

「何！」

デステイニー仮面が微笑みながら天空に手を翳し、そしてパチンと鳴らした。

その直後であった。

上空から一体の巨大なロボットが降り立ったのだ。

黒いボディに赤い蝶ネクタイ。

白いダンディーなヒゲをつけてこれまた豪華そうなマントを翻している。

『お呼びで御座いましょうか？』

「ナイスタイミングだぞ。我が愛馬よ！」

デステイニー仮面がロボットに向かいそう言うと即座に飛翔する。  
飛翔したデステイニー仮面をロボットが手で受け取るとそのまま頭部にあるコクピットに入れた。

「よ、待たせたな」

「遅えよ馬鹿野郎！危うく蜂の巣にされるとこだったぞ！」

「な、こ、甲児い！一体どうなってんだあ？」

カガリは驚いた。

何故ならデステイニー仮面につれられて中に入って見たら居たのは甲児であった。

しかもそれを見たデステイニー仮面のしゃべり方がまんまシンに似ていたのだ。

「とにかく、早く出せ！でないとかばいって！」

「わあつてる！でもその前に捨て台詞言っておけ！念の為だ」

「ま、またアレやるのかよ……」

うんざりしながらもデステイニー仮面が外に顔を出し眼下に見えるオーブ高官達、そしてユウナを見下ろす。

「さらばだ諸君！花嫁は頂いていくぞ！」

「ああ……か、カガリイイイイ」

「……！」

飛びながら去っていくデステイニー仮面を見ながら、ユウナは一人涙を流しながら叫ぶ。

その光景をオーブ高官達は只黙って見ているしかなかったのであった。

\*\*\*

「いえええい！大成功！」

一方、謎のロボット・・・いや、マジンガーZの中では甲児とシンが互いに手を叩きあつて喜んでいた。  
だが・・・

「ふざけるな！これは一体何の真似だ！何故私を誘拐するなんて馬鹿な真似をしたんだ！」

その中ではカガリがご立腹であつた。

それを見たシンが溜息をつきながらも説明する。

「だあかあ、これも全部あのユウナが仕組んだお芝居なの」

「そうそう、あんたを無事にオーブから脱出させる為のな」

「な、ユウナが!?」

二人の言葉にカガリが驚く。

ことの発端は前回の終わり頃まで遡る。

前回、オーブ閣僚内にある中庭での事・・・

「甲児君、カガリを誘拐して欲しいんだ！」

「いや！ちよつと待ってくれ！」

いきなりのユウナの発言に甲児は慌てた。

そりゃそうだろう。

幾ら友人とは言いきなり代表を攫えなどと言うのだから普通は驚く筈である。

「い、一体どう言う意味だよ？そりゃ確かにカガリつていやあ結構美人だし、ラクスちゃん程じゃないけどそれなりにポイントそうだし、確かにポイント高いけど、だからってそれで俺犯罪者になりたくないぜ」

「まあ、カガリのポイントが高いのは認めるよ。だけど其処だけじゃないんだ。カガリはこのオーブの代表でもあるんだ。言い換えれば、彼女の一言でオーブは全世界に戦争を仕掛ける事も出来るんだよ」

「……！」

ユウナの一言で甲児はハツとした。

そうだ、恐らく機械獣を操っている奴ら、まああしゆらだろう。

そいつらの目的は恐らくカガリを洗脳、または脳改造してオーブの全権を握る魂胆のはずだ。

そんな事をされたら溜まった者じゃない。

それこそ世界の滅亡に繋がってしまうのだ。

「で、でもよお、それならキラとかに頼めば良いじゃねえか。もしくはヅラとかに」

「最初はそう考えたさ。でも、あの二人はこの世界では名前を挙げすぎた。彼等が彼女を攫ったらすぐに居場所が割れてしまう。そうなつては元も子もないんだよ」

「なるほど、んで……大して名前も売れてない俺に誘拐しろつて事だな」

「正確に言えば誰とも分からない人物に誘拐されて欲しいんだよ」

なんじゃそりゃ？

ユウナの意味不明な言葉に甲児はかなり眉毛をしかめた。そりゃそうだろう。

何せ素性の全く分からない名無しの権兵衛が誘拐しろというのだから。

だが、其処で甲児の頭の電球に光がともった。

「要するに素性の分からない変人に誘拐されりゃ良いって話だな」

「そうそう、出来るかい？」

「ちいとばつかし大袈裟になるが、出来るか？」

「任せてくれ！準備はこちらで済ますよ」

話は纏まり早速行動が開始されたのだ。

そして時間は戻る。

「つ、つまり……この結婚式もユウナが私を誘拐させる為に組んだ芝居だった……って事なのか？」

「ご名答！んでもって、謎の変人役はご存知シン・アスカ君に演じて貰ったって訳さ」

「ったく、何で俺がこんな恥ずかしい格好しなきゃなんねえんだよ」

隣でシンがかなり不機嫌な顔をしていた。

そりゃそうだろう。

側から見ててもかなり恥ずかしい格好である。

何しろ派手すぎる真っ赤なスーツにマントを翻し、顔には某美少女戦士に出できそうなタキシードヒーローがつけてるようなアイマスクを着けて歯の浮くような恥ずかしい台詞を大声で叫んでいたのだ

から。

「文句言つなよ。お前じゃマジンガーを操れねえだろっ?」

「くそ、お陰で貧乏くじ引く羽目になつちまつたよ」

甲児が笑いながら言うが未だにシンの不機嫌さは直らない。  
そんなシンを甲児は横目でニヤリとしていた。

「そうかあ?結構ノリノリだったじゃねえか?」

「誰があんな齒の浮く様な恥ずかしい台詞を喜んで言うかってんだ!  
!こつちやあ恥ずかしさの余り顔からタンホイザーが出る勢いだつたぞ!」

どうやらシンなりの一生懸命考えた冗談のようだ。

だが、その冗談も元ネタを知らない二人にはちんぷんかんぷんだったらしく二人揃って首を傾げていた。

「さ、さあてと、それじゃさつさと集合場所に行くとすつかあ」

「おい、何で無視してんだ?何で俺に目線を合わせない?気を遣ってるつもりなのか?返って傷つくわボケエ!!!」

サラリと流そうとする甲児の横でシンが大粒の涙を流して叫んでいた。

「お、落ち着けシン!只でさえ狭いパイルダーの中なんだ!あんまり暴れられると余計に狭くなるぞ!」

「畜生!あんたつて人はああ!」

あ、出た!名台詞。

と、まあそんな感じでカガリの似合わない歯止め役に涙しながらシ

ンが泣き叫ぶのを無視しながら甲児の操るマジンガーZはそのまま海面に向かって行く。

その光景にカガリはギョツとした。

「お、おい！このままだとマジンガーが海面に入ってしまうぞ！」

「ああ、平気平気。集合場所は海の中だし」

「な、何いい！」

仰天するカガリを放っておきながらマジンガーは海面に飛び込みそのまま海の中を進んでいく。

カガリは驚きっぱなしであった。

何しろこのマジンガーZは換装もなしで海の中にもぐっていくのだから。

まあMSでも不可能ではないがかなりの制限が掛かってしまう。

だが、このマジンガーZは何ら問題はないようである。

つくづく恐ろしいロボットだ。

陸、海、空、そして宇宙まで戦える万能ロボット。

そんな物を一体誰が作ったのだろうか。

CE組からしてみれば永遠の謎である。

「お、見えてきたぞ！」

「な、あれは！」

カガリは驚いた。

何しろ目の前にあつたのはかつて自分が乗っていた戦艦。

その名も不沈艦『アークエンジェル』であつたのだ。

「ハロー、ハロー、こちらデステイニー仮面の愛馬でえす。ご要望どおりオーブの代表をかつ攫って来たぜえ。ハッチ開けてくれい」

甲児が通信機越しに言う。  
すると目の前のハッチが開き、その中にマジンガーを入れる。  
当然スクランダーは縦に折り曲げて入る事にしたのだがやっぱり邪魔のようである。

\*\*\*

「なに！オーブの代表がさらわれたとお！」  
「そうなんだよ。もううんざりだよお！」

ユウナがすっかりしよげた顔で言う。  
その目の前には黒と紫のツートップのローブを纏い半分男で半分女の怪物「あしゅら男爵」が立っていた。

「おのれえ！何をしているのだ！この役立たずが！何故追わないのだ！」

「追ったさ！でも相手が早すぎて見失ってしまったんだ」

あしゅらの前でユウナは涙をボロボロ流しながら訴えていた。  
そんなユウナを見てあしゅらもさぞ呆れたのか溜息を放つ。

「ええい、泣くなみつともない！大の男が花嫁を取られた位でベソ

を掻くとは情けないぞ！もう良い。オーブの戦力など無くても我等の機械獣だけでこの世界を征服できるわ！」

「うう、カガリ〜〜、何処に行っただよおおお」

あしゆらの前ではユウナが窓に向かって情けない声で泣き叫んでいた。

そんなユウナを見ていたあしゆらはこれ以上此処に居ても時間の無駄だろうと踵を返す事にした。

「私はこれから海底要塞サルードへ戻る。連合と協力してザフト軍艦を沈めねばならぬぞな」

そう言っただけで再びユウナの方を見るあしゆら。  
そしてビシツと指を指した。

「忘れるなよ！私の命令一つでオーブの国は火の海となるのだからなあ。せいぜい利口に事を運ぶ事だな。わっはっはっはっは！」

笑いながらあしゆらが扉の外へと消えていく。

扉が完全に閉まったのを確認して、ユウナは振り返り扉に向かってあっかんべーをした。

「嫌ですよおだ！誰がお前等みたいな輩と協力なんかするかってんだ。お断りですよおだ！」

誰も居ないのを良い事に思いっきり強気に出るユウナ。  
そして満足すると窓の外に目を移す。

「頼むよ、友人達。オーブを……この世界を救ってくれよ……」

ユウナは脳裏に浮かぶ二人の友人を思い浮かべながらそう呟いたのであった。

\*\*\*

「うわあ、凄いドレスだねえ」

開口一番の言葉がこれである。

此処は御馴染みアークエンジェルのブリッジ。

其処でカガリはドレスのままつれて来られたのだ。

まあカガリはなんとなく説明が行く。

何しろ偽装とは言え結婚式の真つ最中に誘拐されたのだから。

だが、カガリを一通り見終わると次の視線は勿論シンに行った。

何しろシンの格好が一番異質なのだ。

目立ちまくりの真つ赤なスーツにマントを翻し、某美少女戦士に出  
てくる仮面ヒーローと同じアイマスクをつけているのだから。

「ねえ、シン君のそれ・・・何？」

「こいつはシンじゃねえ！本当の名は『デステイニー仮面』d『やかましい！』うげえ」

説明が終わる前にシンの踵落としが綺麗に甲兎の脳天に決まった。  
かなり痛いのか暫く蹲って動かないでいた。

だが、やがて痛みが退いて立ち上がるとシンを睨む。

「何すんだよ！」

「人の傷口穿る様な真似するんじゃないやねえ！涙が出てくるじゃないか！」

実際アイマスクの奥ではシンが既に涙目になつてるのが分かる。

さて、疑問に思った読者方のためにご説明しよう。

実は、このスーツもマントも、アイマスクも全てユウナの所持品だったのだ。

とにかく誘拐するからにはそれなりにインパクトがないと駄目なので甲兎はユウナの屋敷から使えそうな物をピックアップしたのだ。

その結果があれである。

そして、マジンガーZを変装させる事で謎の覆面野郎が代表を誘拐したと世間に知らしめたのである。

一体誰がカガリがアークエンジェルに居るなどと分かるだろうか？だが、この作戦には問題があった。

それは、仮面野郎役とロボット操縦者役と言う二人が必要だったのだ。

其処で白羽の矢が立ったのがシンであった。

理由としてはシンは自身のMSを持っておらず、マジンガーも満足に動かせないので適任だったとばかりに役を押し付けられたのだ。

しかもおあつらえ向きにサイズがピッタリだったと言うオマケ付であったりする。

「まったく、お陰で酷い目にあつたぜ」

「でも、凄く似合ってるよシン君」

「お世辞でも言わないで下さい。古傷を抉られてるみたいで気持ち悪いです」

キラの同情にも似た一言にシンは涙目になるのを感じた。

「ま、まあ貴方達のお陰で無事にカガリさんをオーブから抜け出せたのには感謝します」

「そうそう、おまけにお宅らが派手に誘拐したもんだから世間じゃ大騒ぎだぜえ」

そう言つてバルトフェルドがモニターのスイッチを入れる。

其処から見える画面が全てオーブの代表カガリ関連のニュースであった。

タイトルはこちらであった。

『衝撃！オーブの代表、謎の覆面野郎に誘拐される。花婿大号泣！

「ハニーを返せえ！」と泣き叫んでいたとの事』

等とでかどかと報道されていた。

その一角ではユウナが泣きながら犯人の素性をしゃべっている。だが、この情報。

殆どが根も葉もない嘘っぱちなのだ。

当然そんな情報を元に探したって一生みつからない。

何故ならもうこの世にデステイニー仮面は存在しないのだから。

「さてと、そろそろ俺達もミネルバに帰るとすつか」

「そうだな。でないとまたルナや艦長にどやされるしな」

「え、お前等帰るのか？このままこの艦に残らないのか？」

カガリは疑問に思った。

勿論このまま便乗していくつもりなのだろうと思っていたのだが、それとは対照的に二人は帰るようだ。

「しょうがねえさ。あの艦は機械獣にも狙われてるんだ。放っておいたら奴らにやられちゃう」

「それに、あそこには俺の妹や仲間達が居るんだ。見殺しにはできねえよ」

「そうか、また何処かで会えると良いね」

キラが少しだが寂しそうな顔をして二人を見た。そんなキラを見て甲児とシンが笑顔を浮かべた。

「そんなしょぼくれた顔すんなよキラ。生きてりゃ何時か必ず会えるって」

「そう言う事ですよ。その間はキラさんがこの艦を守らないと」

「甲児くん・・・シンくん・・・」

二人の言葉を聞きキラは胸に熱い何かが入り込んできた。すると、そんなキラの肩にそつとシンは手を乗せた。

「キラさん、例え何もかもが信じられなくなっても・・・俺達だけは信じてくれ。俺達はある種の味方なんだ」

「ま、正しくは俺は仲間と言うよりダチ公ってな感じで見てるけどよ」

「有難う。二人も気をつけてね」

「「おう！」」

キラ達に向かい甲児とシンは軽く手を挙げて別れを告げ、マジンガーズに乗りアークエンジェルを後にした。

その後、海面に上がりミネルバに戻ろうとした時であった。  
マジンガーの前面に2機の戦闘機がやってきたのだ。  
だが、大きさ的にはMS位はある。  
オーブ軍の主力MSの『ムラサメ』であった。

「おい、其処の・・・ええと、モビルスーツなのか？とにかくお前  
！」

「あん？俺達の事か？」

「だろうな。マジンガーはモビルスーツとは設計思考が明らかに違  
いすぎるし」

シンが呟く。

とりあえずだんまりは怪しまれるので会話を試みる事にした。

「何か用か？」

「お前達、先ほどの辺りに変なロボットが通らなかつたか？」

「変なロボット？それならあっちの方に向かって飛んでいったぜ。  
すつげえ格好よかつたなああれ」

甲児が目を輝かせて言う。

その隣で隠れていたシンが顔を真っ赤にしていた。

それを聞いた兵士達が「協力感謝する」と一言言って飛び去ってい  
く。

その光景を見て甲児はニヤリとしていた。

「馬鹿な奴ら。仮面野郎なんて一生見つからないってのにな」

「ああ、とにかく俺は早くこんな恥ずかしい服を脱ぎ捨てたいぜ」

「良いじゃん。折角だしずっとそのまま着ておけよ」

「冗談じゃねえ！」

甲児の言葉にシンが猛反発したのは当然の事なのであった。

それから、これは全くの予断なのだが、あの事件以降「デステイニ  
ー仮面ファンクラブ」なる物が設立されたく、人気は赤丸急上  
昇であったそうだ。

第17話 登場！謎のヒーロー（後書き）

（ 舞台裏にて ）

甲児

「お前等に一言言っておく！この小説の主人公は勿論俺だ！」

シン

「おい、何勝手な事言ってるんだ！この小説の主人公は最初に出たって事で勿論俺だろう？」

甲児

「うつせえ！開始早々俺に一発で伸されたもやし君が何言うかあ！」

シン

「上等じゃねえか！だったら此処で決着つけてやろうかあ！」

甲児

「望むところだあ！今度も次回も俺の完全勝利で飾ってやるぜえ！」

キラ

「ええ、向こうで激しく打ち合っている人たちのことは放っておいて、皆さんこれからもこの小説楽しみにしてて下さいね」

アスラン

「キラ・・・此処は実は予告を言う場所なんだぞ」

キラ

「え？そうだったの？てつきり皆好き勝手にしてるからそんなコーナーだと思っただけ？」

アスラン

「キラ・・・此処でもその性格は相変わらずなんだなあ」

第18話 決戦前夜（前書き）

カガリとユウナの結婚式に突如として乱入した謎の仮面ヒーロー

その名は『デステイニー仮面』

彼は一体何者で、何処から来て何処へ行くのか？

それは全て謎に包まれている。

この物語は、そんなデステイニー仮面……の事には一切触れないので間違いないように

では、本編に入ります

## 第18話 決戦前夜

その日、ヨウランとヴィーノは互いに困った顔をしてうなっていた。その問題と言うのはシンが壊したザクと鹵獲した機械獣を使ってどうリサイクルするか・・・と言う議題である。

「なあ、どうするよ・・・」

「俺に聞くなよ・・・機械獣のパーツを使えるつつたって、このザクでどう使うかって事で悩んでるんだしよお」

「あゝあ、せめてもう1機あればなあ・・・」

等と無いものねだりをしている時であった。

「ああ、居た居た」

「ん？」

声がした方を見た。

其処に居たのはどうやらオーブ関連の人間の様だ。

格納庫のハッチの入り口方面から何かを持ってきているのだ。

それはオーブ軍の主力MSである『ムラサメ』の姿であった。

その頃、甲児とシンは先の無断外出の件で再びルナにこっぴどく修正を食らいタリア艦長にかなりのお叱りを食らう羽目となった。なんだか非常にシンにとっては新鮮な感じに思えていた。

元の世界では直属の上司であったが今は何処か保護者的にも感じられる。

と、言うのも甲児とつるむようになってからか、このミネルバ内で

は自分も同様甲児と同じく『馬鹿』と言う烙印を押されているようだ。

「は〜」

深く溜息をシンは吐いた。

無理もない話である。

甲児は元々無茶で無鉄砲な性格が服を着て歩いているような人間なのだ。

彼に自重と言っても聞く耳持たずなのは一目瞭然である。だからシンは溜息を吐いていたのだ。

「あ〜あ、腹減ったなあ」

甲児が腹を摩りながら呟く。

ふと、シンは自分の腹部に手をやる。

気がつけば自分もかなりの空腹感を覚えていた。

あの作戦以降までもに食事を取っていないのだ。

大根役者を演じただけでありかなりエネルギーを浪費した様だ。

因みに言うが、あの衣装はあれから嚴重にミネルバ艦内の何処かに隠してある。

万が一見つかりシンがデステイナー仮面だと知れたらそれこそ不味い。

本当ならあんな曰くつきな物即刻焼却処分したかったのだが、あいにくあれはユウナのお下がりなので下手に扱えないのだ。

「お、此処が食堂だな」

甲児は目の前に書かれた看板を見て目をときめかせた。入ると既に数人がテーブルに座り料理を口にしていた。

その中には御馴染みのメンバーも居る。

「む、お前達か・・・」

レイがこちらを向いてそう呟いた。

元の世界だと結構仲が良かったのだが此処だとかなり無愛想だ。

無理もない。

今の自分は彼にとっては異端児であり正直余り一緒に居たくない・・・  
・というのが本音なのだろう。

「とりあえず開いてるのは此処だけか・・・ちよいとジャマするぜ  
い」

其処へ甲児がズケズケと入ってくる。

正直こいつに遠慮と言う言葉は一切ないのであるう。

そう思えた。

溜息混じりにシンも隣に座る。

しかし、其処に座ったのは誤算であった。

其処に居たのはレイだけじゃなかったのだ。

他にもマユ、そして先ほど自分達を修正したルナも居た。

「あ、甲児さんに・・・シンさん」

「つくづく私達ってあんた達に会うわねえ・・・もしかして腐れ縁  
って奴なの？」

マユはシンと甲児を見て僅かに呟き、ルナはうんざりした顔をして  
いた。

まあしょうがないだろう。

ルナにとってはもうこれで何度目の修正になるか正直覚えていない。  
それほどまでに二人はルナにこっぴどくやられたのだ。

そして、マユはあれから少し元気がない。  
やはり頭の中が少し混乱しているのだろう。

以前はもつと元気だったのにシンが来てからと言うもの物思いにふけることが多くなった。

例え世界の違う別の妹だとしてもシンは心配になってしまつ。  
それが兄の運命さかなのであろう。

「あゝ、腹減つたあ・・・おばちゃん！俺トルコライス！超大盛り  
ねえ」

「んじゃ、俺はカツ丼！大盛りで！」

甲児とシンが大声で食堂に居るおばちゃん(?)に注文する。  
それを聞いていた三人がギョツとした目でこちらを見ていた。

「お・・・お前等・・・」

「そんなに食べて大丈夫なの？すぐに出撃があつた時地獄見るわよ  
？」

二人がそう尋ねる。

無理もない話した。

MSのGは半端じゃない。

満腹の状態で出ようものならそれこそ最悪の現実が待っている。

しかし、それは以前の自分の話である。

正直この世界の現存するMSのGは最早撫でられた程度しか感じないのだ。

そして、それは甲児でも同じなのである。

「何言つてんだよ。腹が減つたら戦は出来ねえって言葉があるだろ  
う？それより、お前等もそんなちよっぴりで平気なんかよ？」

「当たり前だ。何時出撃が掛かるか分からん状態なんだ。兵士は常

に戦いの緊張も持っていないなければならない。常識だぞ？」

「へえ、案外大変なんだなあ。兵士って・・・」

甲児がぶつきらぼうに呟く。

それに皆が溜息にも似た感じになる。

だが、シンだけは理解していた。

甲児は元は兵士ではない、民間人なのだ。

故に兵士にとって当たり前前の事など甲児には分からなくて当たり前なのだ。

無論この世界ではシンも民間人である。

が、元は兵士なので兵士のいろはは覚えている。

しかし、その常識は最早シンには当てはまらなくなったのだ。

明らかに甲児の世界で生きている内に肉体的にも精神的にも数段成長したようである。

甲児の世界に行ったのはシンにとっては良い成長材料であったようだ。

そうこうしている間に良い匂いが近づいてきた。

「へへえ、きたきたあ」

甲児が手を刷り合わせて運ばれてきた料理を見る。

シンの前にも運ばれてきた。

大きめの丼に半熟の卵と熱々のカツがカットされて盛られたカツ丼である。

甲児達の世界で食べてからシンが好きになった料理の一つである。

正直余り日本の料理は食べた事がなかったが食べてみるとこれが中々美味しいものである。

だが、甲児の頼んだのは度を越えた物であった。

巨大なプレートに丼で盛ったようなピラフに各種フライがトッピングされ更には山盛りのスパゲッティが載せられた至れり尽くせりと

言った料理なのだ。

正直そんなの食える筈がない。

だが、甲児はそれをガツガツ食ってる。

そりゃもう美味そうに・・・

「うんめえ！やっぱ飯ってなあこつでなくちやなあ！あんな液体みたいなのじゃ食った気がしねえぜ」

「まあ、否定はしねえな」

甲児の言葉に笑みを浮かべながらシンも料理を口にする。

二人ともさも美味そうに食べている。

だが、それを見ていた三人は正直青ざめていた。

もし自分があればと同じ位食べた直後に出撃したら・・・と考えただけで胃液が逆流しそうになる。

そんな錯覚を感じたのだ。

「ふいー、食った食ったあ」

やがて料理を平らげた甲児とシンが一呼吸置く。

特に甲児に至っては相当ご満悦なのか側に置かれた爪楊枝でシーハ  
ーしている。

「本当にそんなに食べて大丈夫なの？あんだ達」

「俺は平気さ。並大抵のGじゃ大して感じないし、こいつに至つち  
やMS位のGだったら屁とも感じない鈍感さだからなあ」

「おいおい、そんなに誉めるなよお。照れるじゃねえかあ」

シンの悪態に甲児が頬を染めて頭を掻く。

どうやら甲児にはそれが誉め言葉に聞こえたのだろう。

心底甲児の頭がおめでたく思えた。

\*\*\*

その頃、ヴィーノとヨウランは今最高の気分浸っていた。  
何しろオーブの主力MSにザフトのザク、更には機械獣を使ってオ  
リジナルのMSを作れると言うのだ。  
正にメカニック冥利に尽きるとの事である。

「なあ、此処はどうする？」  
「其処はこうしようぜ。いっその事誰も思いつかない感じにしてさ  
あ」

等と言いながら二人が魔改造を楽しんでいた。  
既に其処にはかつてのザクの面影など全くない。  
悲しき事である。  
やがて機体が完成したのだが其処で問題が浮上した。  
思ったよりも材料が余ったのだ。

「あり？余っちゃったなあ・・・さて、これどうするか・・・この  
ままだと凄いジャマだし」

ヨウランが余った機械獣の残骸を見て呟く。  
すると其処でヴィーノの頭の電球が光り輝いた。

「なあなあ、マジンガーのジェットスクランダーってあっただろう！？あれを応用してザク専用の飛行ユニットとか作ってみねえか？」  
「お、それ面白いなあ、それなら俺はマジンガーの内臓武器を見て作りたいと思ったのが何点かあるんだ！」  
「へえ、お前もか・・・よし、やるか！」

二人は良い笑顔を浮かべながら互いに手をガッチリと握り合う。  
その目は輝いていた・・・そう、かなり歪に。

\*\*\*

「おのれ・・・おのれおのれセイランの馬鹿息子めえ！」

その頃、あしゆらは一人地団太を踏んでいた。  
無理もない。

本来の目的であるオーブの代表であるカガリの拉致の計画がユウナの無能（と見せた芝居）のせいで失敗に終わったのだ。

その上今カガリの居場所は何処にも分からず事実上オーブは連合とは物資の援助のみになってしまった。

戦力のレンタルは出来るがあくまで自衛の為と言う条件のみである。  
つまり、領海内に入った場合のみ攻撃すると言う事なのである。  
はつきり言って戦力にはならない。  
これにあしゆらは怒っていたのだ。

『一体どういう事ですか？あしゅら男爵』  
「む、その声は貴様か？ロード・ジブリール」

あしゅらが振り返る。

壁に取り付けられた液晶モニターに映ったのはあのジブリールであった。

膝には黒色のペルシャ猫を抱えていかにも「私はお金持ちですよ」という感じを見せ付けている。

『これではオーブを戦力として加えられないじゃないですか？まあ、どの道こんな小国の戦力なんて当てにしてませんけどね』

「五月蠅い！それもこれも全てあのユウナの馬鹿がしでかした失敗なのだ！本来ならあのカガリ・ユラ・アス八を誘拐し、ゆくゆくはオーブ全国民を鉄仮面に改造する計画だったのが見事におじやんになってしまったわ！」

あしゅらの額に青筋が浮かぶ。

それにジブリールは余裕の笑みを浮かべていた。

『それは困りますなあ。ですが、我々にはあの最強の力があるではありませんか？』

「ふん、分かっているようだな？そうとも、我等が主Dr・ヘル様がおつくりになった機械獣は無敵なのだ！モビルスーツなど赤子も同然！」

『ですが、前回の戦いで負けたじゃありませんか？しかも、ザクに・  
』

ジブリールが念を押してそう言う。

それが更にあしゅらの中の怒りを掻き立てた。

「ええい！貴様は口ばかりか？我等と同盟を結んだのなら貴様も兵力を渡さんか！」

『仕方ないですねえ。では私の所有しているファントムペインの部隊をお貸ししましょう。それで存分に闘って下さい』

「ふん、言われるまでもない！こうなればすぐにでもミネルバとやらを沈めてくれるわ！」

『期待してますよ。あしゆら男爵』

そう言い終わるとモニターが消えた。

だが、それでもあしゆらの苛立ちは消える気配がない。

「おのれ、私に命令して良いのはDr・ヘル様のみ。にも関わらずあの男め・・・こうもズケズケと私に命令しおって・・・腹立たしい」

どうやらあしゆらにとってはそれが苛立ちの種なのであろう。すると扉を開けて鉄の仮面をつけた兵士が数名入ってきた。

「あしゆら様！ネオ・ロアノークと呼ばれる男が面会を希望しています」

「む？よし、通せ」

あしゆらが兵士に命じる。

兵士は一礼し扉を開く。

すると其処には既にネオが立っていた。

「失礼します。ネオ・ロアノーク一佐であります・・・うお！」

いきなりネオがあしゆらを見て驚愕した。

そりゃそうだ。

普通なら誰もが見て驚くものだ。  
何しろ半分が男で半分が女なのだから。

「どうした？私の顔に何かついているのか？」

「い、いえ・・・随分変わったメイクをしておられるんですね・・・と、思いました」

「ふん、まあ良い・・・早速作戦会議と行こう」

あしゆらがネオと共にテーブルに座り会話を始める。

しかし、この時彼等は気づかなかった。

彼等の部屋の墨に小さな盗聴器が取り付けられていた事に。

そして、それを聞いていたのはあのユウナであった事に・・・

「こりゃいよいよ甲児達が危ないんじゃないのかなあ・・・」

ユウナの胸中に不安が過ぎる。

このままオーブに定住していれば間違いなく袋叩きにあう。

その前に此処を出なければならぬのだ。

「早く報せた方が良いよね」

ユウナは盗聴器の電源を切つてすぐに持っていた携帯の端末の電源を入れた。

\*\*\*

事態は急転した。

本来ならもう2〜3日停泊する予定であったのだがユウナから寄せられた情報により急遽ミネルバがオーブを離れる事となったのだ。理由は勿論あしゆらが動き出したからである。

このままオーブに停泊してはオーブ軍と機械獣の板ばさみになる恐れがある。

今のシンは少なくともこのオーブは傷つきたくなかった。

かつてのオーブとは違いユウナは話の分かる人間だったしオーブの人間が皆暖かい。

やはり故郷とは良いものなのだろう。

だからこそシンはオーブを離れる事にした。

これ以上自分達が居ればオーブを戦場にしてしまう恐れがある。

それに、自分達が的になればオーブへの危険もいくらかは避けられるのだ。

「甲児、この後の戦闘準備は念入りにしておけよ」

「は？何でだよ」

「実はな、オーブの領海外で連合の待ち伏せがあるんだ」

「え！なんだよそれ」

余りに驚きの為か声が変わってしまったがとりあえず気にせず居た。

だが、シンの言葉は当たりである。

このまま行けば恐らく連合と機械獣の混合軍と鉢合わせする。

以前のように連合だけならどうにか捌けたかも知れないが機械獣も一緒では幾分分が悪い。

何しろレイ、マユ、ルナの三名は赤服だろうが機械獣との戦闘経験は圧倒的に浅いのだ。

あいつらは知らないのだ。

機械獣に良心も情けもない。  
冷徹な殺人マシーンなのだ。

一度命令されれば止まることなく破壊と殺戮を続ける悪魔の兵士。  
それこそが機械獣なのだ。

シンはその残虐性をその目で見てその肌で感じた。  
だからこそ分かるのだ。

機械獣の恐ろしき、そして対処方が・・・

「シン、どうするつもりだ？」

「幸い俺の機体が完成間近だ。恐らく開戦前には出来ると思う。其処でだ。俺が機械獣を相手にする。お前が連合艦隊を頼む」

「ええ、俺人を相手にしなくちゃなんねえの？」

甲児が嫌そうな顔をする。

無理もないだろう。

だが、此処でシンはある確信を持っていた。

「甲児、俺は多分思うんだが、艦隊を操ってるのって恐らく全部鉄仮面なんじゃねえのか？」

「あ、確かに・・・あしゆらはあれで結構プライドが高いから自分の兵士以外は使いたがらねえんだよ」

甲児もあしゆらの性格は良く知っていた。

あしゆらは度々失敗はするし詰めは甘いと問題続きだというのにプライドは一丁前にあるのだ。

その為に自分の私兵以外は使いたがらないと言う困った性質があるのだ。

それならば問題はない。

何しろ鉄仮面の殆どが元は死人なのだから。

寧ろそれならば人思いに殺してやった方が彼らの為になる。

死んでも奴隷の様に働かされる位なら海の藻屑になった方が幾分かは幸せだろう。

「よっしゃ！任せろ！戦艦なんざマジンガーで薙ぎ倒してやるよ」「頼もしいな。ま、お前とマジンガーなら間違いなくやりそうだから怖いよ」

シンがそう呟く。

その通りだ。

マジンガーのパワーなら間違いなくやりかねない。

恐らくシンがSEEDを覚醒して空母を数隻沈めたが、甲児のマジンガーなら間違いなく薙ぎ倒す事が可能かもしれないと、そう思えたのだ。

そして、部隊は決戦の地・・・と言うか、海へと向かっていく。

其処には、確かに連合の艦隊がミネルバの進行上に待ち構えていたのであった。

第18話 決戦前夜（後書き）

） 舞台裏にて ）

甲児

「なあなあキラさんよお」

キラ

「ん？どうしたの甲児くん」

甲児

「確かアークエンジェルって温泉があっただよなあ」

キラ

「うん、日本のわびさびを取り入れた感じの温泉だよ」

甲児

「うっし！ミネルバの時じゃ完全閉鎖されてて出来なかったアレを  
実行してやるぜ！」

キラ

「え？あれって一体何？」

甲児

「決まってるだろう！覗きだよ！あんたも一緒に行こうぜ！桃源郷  
つてのを見せてやるよ」

キラ

「え？ぼ、僕は良い……って、あ、あああ~~~~~」

第19話 怪奇！海中に現れたMSさらい、海の底には死が待っていた！（前書

オーブを出たミネルバー一行の前に現れたのは横一列に並ぶ連合艦隊。しかしその殆どはあしゅら男爵の私兵であった。

彼等は死んだ肉体を蘇生し奴隷のように使っていたのだ。

その軍勢に対し、甲児のマジンガーが挑む。

第19話 怪奇！海中に現れたMSさらい、海の底には死が待っていた！

オーブの領海を抜けたミネルバを待ち構えていたのは、横一列に並ぶ連合の艦隊であった。

総数10隻。

かなりの数がそろえられている。

「ま、待ち伏せされていた！」

アーサーが驚愕の顔をしていた。

同様にタリアも曇った表情になる。

それはパイロット待機室でも同じであった。

レイヤルナ、マユ達が連合の待ち伏せに驚いていた。

だが、シンと甲児は違っていた。

二人は事前に知っていたのだ。

では、何故それを報せなかったのか。

下手に報せたら返って混乱を招くからだ。

それにどの道このルートでしか目的地のジブラルタルへは向かえないのだ。

となればやるしかないのだ。

(おい、シン)

そっと、甲児がシンの耳元で囁いた。

その囁きにシンは耳を貸す。

(どうするんだ？本当に俺が艦隊の相手して良いのか?)

(ああ、恐らく今回の連中はきつと機械獣を投入してくる。お前が相手してたんじゃみんなマジンガーを当てにする筈だ。だけどそれ

じゃこの世界は生き残れない。自分達でも機械獣に対抗出来るって言う自信をつけさせる為にも今回は俺が挑む)

シンの狙いはそれであった。

どうもこのミネルバクルーは勿論この世界の兵士達は皆機械獣に対して苦手意識が強いようだ。

勿論マジンガーが機械獣を蹴散らせば問題ないが、もしマジンガーが居ない時に機械獣がやってきたらそれこそ終わりである。

だからこそ、シンが機械獣と闘わねばならないのだ。

マジンガーでなくても機械獣を倒せる、と言う事を証明せねばならないのだ。

(へえ、お前も結構考えてるんだな)

(お前と一緒にするな！こっちはお前の10倍考えてるんだからよお)

心外だと言いたげにシンは甲児を睨む。

それに甲児が頬を搔く。

其処まで考えていなかったのだ。

すると、また別のアラートが鳴り響く。

そして別のモニターが映った。

それはミネルバの後方のモニターであった。

其処に映るのは連合と同じく横一列に並んで構えるオーブの艦隊があった。

「は、挟まれたの!？」

モニターを見てルナがそう叫んだ。

それを聞いていたシンがふと自分を不思議に思った。

前の自分だったら、この光景を見た途端逆上していただろう。

だが、今は違う。

何故なら、あの艦隊の意味を知っているからだ。

それはオーブに居る甲児とシンの友人のせめてものお見送りだったのだ。

「へっ、ああも見物客が揃ってちゃへまできないな」

「そう気を持つ必要ねえよ。そんな事したって返ってボロが出るだけだぜ」

張り切る甲児をシンが囁す。

流石の甲児も成長したのかそれだけでは殴りかかろうとはしない。

寧ろシンの方を向いて「任せとけ」と言わんばかりに腕を振るっていた。

これなら安心だろう。

そうシンは思えた。

「ところでよお、お前の機体は出来上がったのか？」

「ああ、さつき見てきたけど・・・正直かなり凄いで来たかった。あれを俺が動かすのかと思うと胸がときめくのを覚えたよ」

シンは先ほど自分の乗る予定だったMSを見てきたのだ。

それを見たシンだからこそそのMSの完成度を見て胸がときめいたのだろう。

これでまた甲児と同じく戦う事が出来る。

そう思えていたのだ。

「次回は、シンさんも出るんですか？」

「ああ、少なくとも足手まといにはならないつもりだ」

会話をチラリと聞いていたのかマユがシンに尋ねる。

それにシンは頷き応えた。

だが、そのシンの対応を聞いたとき、ルナやレイが眉を顰める。

「えー、あんたも出るのぉ？本当に大丈夫なの？」

「心配だな。返って足を引つ張られると迷惑だ」

「い・・・言ってくれるじゃねえかお前等・・・だったら次の戦闘で機械獣を撃墜してやろうかぁ？」

シンがそう呟いた。

だが、その呟きを聞いた途端、レイやルナは勿論、あのマユの顔までもが驚愕の色に染まった。

3人とも先の戦闘で機械獣の戦闘を粗方知る事が出来たのだ。だからこそシンのその言葉には驚かされたのだろう。

「貴様、それは嘘でもまかせでもないのだな？」

「ああ、断言する・・・次の戦いで俺は機械獣を叩き落す」

「あくらら、大きく出たわねえ。一度言っただから男なら守りなさいよねえ」

ルナが嫌味つたらしい笑みを浮かべながらシンを見る。

この世界ではルナもレイもシンの実力を疑っているのだ。

元の世界ではチームメイトであったらうが此処では赤の他人なのだ。

それ故に二人はシンの力を知らず、また疑っていたのだ。

「皆さん、そろそろ出撃準備に入りましょう」

会話をしていたシン達にマユが言う。

それを聞いたシン達も頷き出撃準備をしに格納庫へと向かった。

「やれやれ、あのあしゅらって奴も厄介な奴等を寄越したもんだぜ」

空母のデッキに座りながらネオは回りを陣取る空母を見る。

ネオが言った厄介な者と言うのは空母を操る者達の事である。

ネオの乗る空母以外の空母を操っているのは鉄の仮面をつけた兵士達である。

それはMSパイロットも同じであった。

彼等は皆あしゅらの差し向かわせた私兵である。

そして、彼等は皆生きた人間ではない。

正確には一度死んだ人間なのだ。

死んだ人間の体を回収し、脳改造を施し、私兵としたのだ。

戦争の多い時代においてはこれ程ありがたいことはないのだ。

何しろ、人間のリサイクルが出来ると言うのだから。

それ故に口ゴスはその私兵を有難く使わせてもらっているのだ。

だが、ネオはそれが気に入らなかった。

一度死んだ人間と肩を並べるなど気持ちが悪いのだ。

故にネオの乗る空母には一人も鉄仮面が乗っていないのである。

「ま、せいぜいリサイクルされた奴らの実力でも拝むとしますか」

ネオはそう呟きながらリラックスした姿勢でミネルバを見る。

そのミネルバの発進口が開く。

最初にその中から出てきたのは銀色のザクと赤色のザクが出てきた。見るからに飛行能力はなさそうである。

\*\*\*

「落っこちでも拾ってやれんぞ」

「んもう、優しくないなあレイはあ」

ミネルバの上に乗れ構えながら呟くレイにルナがぶつたれる。だが、其処へ二人に通信が入る。

『お二人さん、その心配はねえぜ。こんな事もあるうかと思って余剰パーツを使ってザク用の飛行ユニットを作っておいたんだぜ』

「へえ、やってくれるじゃないのヴィーノ」

モニターに映ったヴィーノにルナの目が輝く。

すると、ミネルバのコアスプレnder発進口から2機の飛行物体が発進された。

それはザクの色と同じ色をした翼であった。

「ね、ねえ・・・あれってもしかして・・・」

『そう、マジンガーZのを真似して俺達で作ったザク専用の【ジェットスクランダー】だ！』

「ええええ　　！」「」

それを聞いたルナは勿論あのレイまでもが絶叫した。  
その間にも2機のジェットスクランダーがザクの回りを飛び回る。

「ね、ねえ・・・あれってどうやってドッキングするの?」

『決まってるだろう! ジャンプして叫ぶんだよ!』スクランダーク  
ロス】ってさ』

「さ、叫ばないと・・・駄目なのか?」

レイが嫌そうな顔になりながら尋ねる。

それにヴィーノは「勿論」と断言しながら頷いた。

それを聞いたレイは大層深い溜息を吐いた。

「仕方ない・・・本当に仕方ないが・・・やるしかないか」

「ま、ザクが飛べるんだったら何でもやるわよ!」

レイはうんざりしながらだが、ルナは乗り気である。

そして、2機のザクが飛翔する。

そのザクの後方にジェットスクランダーが迫る。

するとコクピットで二人の目の前に音声認識パネルが現れた。

其処には英語の文字で「スクランダークロス」と書かれていた。

「はぁ・・・仕方ない」

「いい加減観念しなさいよレイ」

ルナの言葉に観念したのかレイがきつと目の前を見る。  
そして叫んだ。

「スクランダーアアアクロオオス!!!!!!」

「スクランダー・・・クロス!」

二人が同時に叫ぶ。

その叫びが音声認識され了承された後、二つのジェットスクランダーから赤外線センサーが放たれ、そしてザクとスクランダーが一つになった。

空に舞う銀の翼しろがねと紅の翼くれないが空に舞い上がる。

「ひゃっほ、凄い凄おい！ザクが空を飛んでるう！夢みたい〜」

「ルナ、隣で騒がないでくれないか？耳が痛いんだが・・・だが、良い出来だ」

ルナは勿論、分かり辛いがレイも満足していた。

その後に続き、コアスプレnderとインパルスの上半身、下半身、更にフォースシルエットが射出され合体しインパルスになる。

「あれ？レイやルナのザクが飛んでる？」

「やつほう、マユウ。これで私のザクも空を自由に飛びまわれるわよおー！」

「マユ・・・ルナの事は放って置け。今いつは舞い上がってて話を聞ける状態じゃない」

「そ・・・そうみたいね・・・」

マユも舞い上がるルナのザクを見てそう思った。

確かに今のルナには何を言っても無駄なのだろう。

その頃、ミネルバの発進口にはカタパルトの上に立つこの姿があった。

「おおい、俺も出て良いのか？」

『ええ、名前と機体名を言っただけからお願いします』

「ふうん、面倒臭いなあ・・・ま、良いか」

頬を掻きながら甲児は操縦桿を握り締めてどう言おうか少し考えた後に叫んだ。

「兜甲児、マジンガーZ！行くぜい！」

そう叫んだ。

すると突如としてカタパルトが一気に前方に動きそのまま外へ放り出す。

だが、分かっていると思うが甲児はこうして出るのは初めてなのである。

そして甲児はそんな発進方法に慣れていない。

従って・・・

「んのわあああ　　！！！！」

甲児が絶叫した後、そのまま外へ放り出された後空をグルグルと回っていた。

「ま、マジンガーZ！姿勢制御して下さい！続けて、ジェットスクランダー射出します！」

グルグル回るマジンガーZに向けてジェットスクランダーが射出される。

だが、空中をグルグル回っている状態のZでは当然ドッキングなど出来る筈もなく・・・

ガァァァン！

「げふう！」

スクランダーが思い切りZの胴体に直撃しそのままスクランダーは空をひとりで飛び回り、マジンガーZは海の中に消えて行った。

「あ・・・ま、マジンガー・・・Z・・・海中に激突しました・・・」

「な、何だ？発進で失敗したのか？」

アーサーが目をパチクリさせている。

勿論その通りなのだ。

甲児は見事に発進に失敗して海に落っこちたのだ。

「ね、ねえ・・・マジンガー・・・引き上げなくて良いの？」

「心配ないだろう。放っておけ。第一面倒臭いしな」

レイからしれみれば海の中に入ってZを引き上げるのは返って面倒臭いようだ。

それを聞いたルナも頷きながら戦闘に入る。

そして、その頃のミネルバ内では、シンが新しい機体に取り込んでいた。

「一応使い方は簡単にデータ化してたから分かるだろう？」

「サンキュー。にしても・・・こりゃ・・・中々良い出来だぜ」

シンはパツと見てマニュアルに目を通す。

それはこの機体の説明であった。

そして、其処にはその機体の、シンの新しいガンダムの名前が記されていた。

「機体名・・・【トランスガンダム】・・・この名前の由来って何？」

「その機体にはオーブの【ムラサメ】の技術を使ってるんだ。つまり変形機能を持ってるんだよ。だから【トランスフォーム】をもじって【トランスガンダム】って訳」

「良いなあ、その名前・・・気に入ったぜ」

シンが笑いながらスーツを着る。

因みに今のシンのパイロットスーツは前の世界の赤服ではなく一般兵の緑服である。

「良いか、そのスーツもレンタルなんだから汚すなよ」

「へいへい、たくけち臭い奴だなあヴィーノ」

シンが口をへの字に曲げながら機体に搭乗する。

そして機体が発進口へと向かい準備が整う。

「さあて・・・シン・アスカ！トランスガンダム、行きます！」

シンは叫び、戦場の空に向かいシンの新しい翼【トランスガンダム】が飛び上がった。

「シンさん・・・ですか？」

「ああ、これが俺の力だ！」

インパルスの隣にトランスガンダムが並び話し合う。  
するとその周囲に2機のザクが並ぶ。

「へえ、それが例のリサイクルガンダムなんだ」

「さて、それではお手並み拝見させて貰うぞ・・・シン・アスカ」

「あいよう」

シンが頷く。

そしてシンが視線を向けた。

それは海面に浮かぶ空母ではなく、空に漂っていた巨大な飛行要塞であった。

何処か間の抜けた顔をしてはいるがその大きさは空母のほぼ2〜3倍はある。

「やっぱり、あれも来ていたのか・・・飛行要塞グール」

「知ってるの？つてか、あれ何時の間にあつたの？」

「恐らく、超高々度から降下してきたんだろう。レーダーの利かない範囲から」

「その通り！流石はザフトでも名の通ったミネルバ隊と言ったところかな？」

声がした。

声色からして男、それも中年位の年頃の男の声である。

その声は上空を降下してくる要塞から聞こえてきた。

嫌、その要塞の先端部分には実際に人が立っていたのだ。

だが、その人の姿を見た途端皆が凍りついた。

レイは目をギョツとさせており、マユとルナは互いに青ざめた顔になりこう叫んだ。

「な、生首　　！」

と、

「失敬な！誰が生首だ！」

声の主は大層不満げにそう呟いた。  
やがてその男の全てが映った。  
多くの勲章が飾られた軍服を身に纏った隻眼の男である。

「お前は誰だ？」

「我輩はブロッケン伯爵。我が主Dr・ヘルの命令により貴官ら  
この海に沈めに来たのだ。さあ行けい！我が機械獣軍団よ！あの様  
なおもちやの艦などガラクタにしまえい！」

ブロッケンが杖を振りかざして命ずる。

するとグールの口に当たる部分が開き、中から1体の機械獣が現れ  
た。

だが、その機械獣をシンは何処か見覚えがあつた。

「あ、あれつて・・・連合の作ったMA・・・確か、【ザムザザ】  
つて言つてた筈じゃあ」

以前シンは連合のデータファイルを見た事がある。

その中で以前闘ったMAのデータを見たのだ。

そのデータと目の前に現れた機械獣はほぼ一致していたのだ。

「ふはは、惜しいな小僧。その機械獣の名前は【ザザンP4】だ  
！さあ、まずは目の前を飛び回る五月蠅い蠅を駆除しろ！」

「蠅ですつてえ！レディに向かつて蠅呼ばわりなんて礼儀も知らな  
いの？おっさん？」

「嫌、初対面に人に向かつておっさんつて言うお前の方がよっぽど  
礼儀知らずだと思っただが？」

怒り心頭でブロッケンに怒声を送るルナにシンがボソリと呟いた。  
だが、そんな事をしている間にもザザンP4は目の前に迫つてき

ていた。

「く、迎撃しろ！」

レイが叫びそれに応えるようにインパルスもザクも攻撃を行う。だが、当然の如くザザーンは全体に巨大な陽電子の膜を作り攻撃を防いだ。

「ちっ、陽電子リフレクターは健在ってか・・・厄介な相手だぜ」

シンが愚痴る。

確かにシンは最初これに出くわした際には苦戦を強いられた。巨体な上にパワーもスピードもあるのだ。

「ふはは、それだけではないぞ！ザザーンP4よ、お前の力の全てを見せ付けるが良い！」

ブロッケンが命じる。

するとザザーンの目が輝き、体全身から夥しい量のミサイルが発射されたのだ。

「う、嘘お！一体どんな構造してるのよ！あれ歩く弾薬庫って奴？」「無駄口叩いてないで叩き落せ！機械獣の攻撃なんざ1発でも食らったらアウトだぞ！」

シンが叫ぶ。

その通りだ。

機械獣からしてみればザクの装甲など紙に等しいのだ。

ガンダム of 装甲でも正直怪しい。

だからこそ1発でももらう訳にはいかないのだ。

どうにかこうにか紙一重でミサイルをかわしていくシン達。  
それを見ていたブロッケンには自慢の顎ひげを弄くりながら笑みを浮かべていた。

「ほほう、やはりMSと言うのは中々魅力的な性能を持っているようだ。あの性能を我等機械獣に応用出来ればきつと機械獣はもっと強くなるだろう。ぜひとも1機は無傷で手に入れたいものだ」

ブロッケンがそう呟くと杖を掲げる。

すると更に2機機械獣が現れた。

巨大な蝙蝠の姿をした機械獣に亀の姿をした機械獣である。

「行けい、機械獣【バットマーW1】【タートル 9】よ！手頃なMSを1機捕獲せよ！他は破壊して構わん」

ブロッケンが命じ、2体の機械獣はシンのトランスガンダム目掛けてやってきた。

「へっ、おあつらえ向きに俺の方に来たってか。上等だ！纏めて相手してやる」

シンが笑みを浮かべて機体を動かす。

「俺を相手にてかげんして勝てると思うな！」

シンが叫び、まずはバットマーの翼を抜き放ったサーベルで一閃し、切り裂く。

其処から間髪居れずに機械獣を蹴り飛ばし、胴体に向かってライフの閃光を放つ。

打ち込まれた箇所は恐らくその機械獣の動力炉だったのだろう。

忽ちバットマーは空中で爆散した。

「次はお前だ！亀野郎」

続けてタートルに向けてライフルを放つ。

だが、その閃光はタートルの甲羅によって弾かれてしまった。

「対ビームコーティングって奴か・・・だったらこいつはどうだ？」

そう言つて腰にマウントされていた新武装を抜き放つ。

それはザクが使っていたトマホークとほぼ同じ形であった。

だが、ビームの粒子は纏っていない。

その装甲自体が武器なのだろう。

「カウンタートマホーク、こいつの切れ味、試させて貰うぜ！」

トランスガンダムが手に持ったトマホークをタートルの甲羅目掛けて投げつける。

それは先ほどビームを弾いた甲羅を切り裂き中を切断した。

切り裂かれたタートルを尻目にトマホークは悠々とトランスガンダムの元へ戻っていく。

それを見たシンは正直驚いていた。

「おいおい・・・こりゃどう言う構造してんだよ。すげえ切れ味じゃねえか」

シンが驚くのも無理はない。

たったの一撃で機械獣の装甲を切り裂いたのだ。

目の前でタートルは火花を舞い散らせて爆発した。

残ったのは最初に出てきたザザンのみである。

「残ったのはお前だけだな・・・お前には前の世界で借りがあるんだ！今此处で返させて貰う」

シンが目の中のザザーンと相対する。

そのザザーンと言えば両腕の巨大なクローを展開させてシンのトランスガンダムを捕獲しようとする襲い掛かってきた。

だが、そのクローの一撃をシンはかわし、カウンターでサーベルを振り右腕を切り裂く。

「お前の闘い方は全部知ってるんだ！そんなノロイ動きで俺を捉えられると思ってるんじゃないねえ！」

叫び、ザザーンの腹部に向かいトマホークを投げつける。

投げつけられたトマホークは残っていた左腕を切断する。

両腕を失ったザザーンは苦し紛れにと収束ビーム砲を放とうとする。

「さて、それじゃもう一つの武器もためさせて貰うぞ」

そうシンが呟き別の武器を取り出す。

それは短めのチェーンウィップ状の武器であった。

それを振り回して投げつける。

投げつけられたチェーンはザザーンの胴体に絡みつき激しい電撃が放たれる。

それと同時に収束していたビームの粒子が萎んで消えてしまった。

「へえ、高圧電流に加えてジャミング機能もあるってか。中々癖のある武器だなあこりゃ」

シンは納得しながら戻ってきたトマホークを手に取り、そして一刀

の元にザザーンを両断してしまった。

正に圧倒的光景であった。

その光景にブロッケンは勿論レイヤルナ、そしてマユ達が皆呆然としていた。

「ば、馬鹿な・・・我が機械獣軍団が・・・」

「信じられない、あいつ・・・本当に機械獣を一人で倒しちゃった」

「それも3体同時に・・・これは、奴の実力を認めざるをえんな」

レイモルナもこの時初めて理解した。

シンの実力を・・・

\*\*\*

その頃、空母ではその主砲の照準をミネルバに向けていた。

「主力をブロッケン様がひきつけている間にミネルバを落とせ！主砲発射用意！」

鉄仮面がミネルバに向けて主砲を放つ号令を掛けようとした正にその時であった。

突如として空母が激しく揺れだしたのだ。

「な、何だ！何が起こった？」

「か、艦底に機影！」

レーダー主が叫ぶ。

そして、その信号を見て彼は生きた心地がしなかったのを覚えている。

「こ、これは・・・ま・・・マジンガーZです！」

「な、何だと！」

レーダー主の言葉に鉄仮面は青ざめた。

そう、今マジンガーZは自身のより遙かに巨大な空母を持ち上げていたのだ。

「っの野郎！ミネルバを撃たせるかよお！」

甲児が叫ぶ。

海の上に立ち空母を両手で頭上に持ち上げる。

そしてそのまま別の空母に向けて持っていた空母を投げつけた。

投げつけられた空母はそのまま放物線を描き別の空母と激突し爆発した。

「ええい、急げ！MS隊を出せ！今マジンガーはたったの1機だ！数で攻めればきつと勝てる！」

空母の艦長である鉄仮面がそう叫ぶ。

恐らくこの世界の人間を使っているのだろう。

だからこそ彼等は知らなかった。

マジンガーZの力を・・・

空母から多数のMSが一齐に飛び出しマジンガー目掛けてやってきた。

「へっ、ぞろぞろ出てきやがったな。纏めて相手してやるぜ！」

甲児がそう言う。

すると再びマジンガーは海中へと消えて行った。

その付近に集まってくるMS軍団。

機種はウィンダムと言っらしい。

「撃て撃て！二度と外に出られないようにしてやれい！」

隊長機の命令を受けて一斉に海中に向かって攻撃が放たれた。

ビーム、ミサイル、バルカン、何でもありであった。

攻撃がぶつかつた海面は激しい水しぶきをあげてまるで海底火山の噴火の如く荒れ狂っていた。

「撃ち方止め！」

隊長機が攻撃を中断し、ゆっくりと海面すれすれに移動する。

他の機体もそれに追従して行く。

だが、それがそもそもいけない行為であった。

ユラリ・・・

隊長機はこの時自分の愚かさを呪う事となった。

何故なら突如として背後から凄まじい水しぶきを上げながら巨大な何かが現れたのだ。

それは両手を天に向かって広げてまるで特撮映画のワンシーンの様に現れたマジンガーZであったのだ。

「う、うわあああ　　！」

隊長は錯乱した。

必死にライフルをZに向けて放とうとする。

だが、その時には全てが遅すぎた。

Zの太い腕は隊長機のウイングダムを握りつぶす勢いで掴み取るとそのまま海中へと消えて行ったのだ。

付近の者達が「隊長！」と叫ぶ。

だが、隊長の応答はない。

それから数分後、海中から鈍い音がした。

ゴギン・・・

その音を聞いた殆どの者が戦慄を覚えた。

正しくそれはマジンガーがウイングダムの装甲を無理やり捻り折った音だったのだ。

海中ではウイングダムは満足に動く事は出来ない。

其処についてマジンガーが海中に引きずり込んで機体を破壊したのだ。

爆発音はなかった。

只、激しい水しぶきをあげながら隊長機と思われたウイングダムが打ち上げられた。

だが、その機体は胴体、首、両腕、両足全てがあらぬ方向に折り曲げられておりコクピットはひしゃげて最早使い物にならない状態にされていた。

そのウイングダムが空中を舞いながらその不気味な光景を見せ付けるやがて、そのウイングダムが重力に従い海面に落下するとそのまま海中へと消えて行った。

兵士達の殆どが真っ青な顔になった。

如何に改造された兵士と言えども恐怖までは拭い去れなかったようだ。

忽ち錯乱しだし辺り構わずに武器を乱射しだす。その結果味方同士を打ち抜く同士討ちが発生しだす。正に戦場はパニックとなっていた。それは逆にマジンガーには好都合であった。海面から両腕を放ち次々とウインダムをぶち抜いていく。更には先端がドリル状のミサイルや黄色い閃光、更には赤色の熱線が次々とウインダムを破壊していく。

「ち、畜生！」

兵士の一人がサーベルを抜き放ち海の中へ飛び込んだ。目の前には悠々と海中を泳ぎ回るZが居た。正しく魚雷そのものであった。まるで魚雷並の速度で海中を泳ぎ回っているのだ。

「な、何だあいつは・・・マジンガーは場所を選ばないってのか？」  
海中に潜った兵士は正直自分の愚かさを呪った。  
海中では抜き放ったビームサーベルのリーチが極端に短くなってしまったのだ。  
これではナイフほどもない。

「う、うわああああ」

完全にパニックに陥った兵士が刀身のないサーベルを必死に振り回す。

だが、そんな物でマジンガーを倒せる筈もなく目の前に突如として現れたZがウインダムの頭部を掴み取る。  
そしてなんの躊躇もなくその頭部を力任せに引き千切ったのだ。  
更には両腕を捻り取り、足を切断し、最後に胴体を真っ二つに引き

ちぎった。

その影響で爆発を起こすウィングダム。

爆煙の中からゆっくりと姿を表すZの両目が恐ろしく光り輝いた。上空に居たウィングダム軍団は未だにパニツクに陥っていた。

あつと言つ間に部隊の半数を蹴散らされた為に海面に居る敵をどうする事も出来ずにパニツクに陥っていたのだ。

「だ、駄目だ！我等じゃ勝てない！一旦母艦に戻って・・・」

そう言っていた刹那であった。

背後に何か近づいてくるのを感じた。

振り返ると、其処には紅の翼【ジェットスクランダー】がひとりでこちらに向かってきているのだ。

「うわ・・・があ！」

最早悲鳴を上げる暇すらなかった。

一瞬の内にその翼がウィングダムの胴体を両断した。

そのまま旋回してウィングダムの軍団にスクランダーが向かってくる。まるで生きているかの様に敵を切り裂こうと向かってきているのだ。

「う、撃て！打ち落とせえ！」

死にたくない、そんな思いでウィングダムの軍団が銃口を構える。

だが、その軍団に向かってスクランダーの羽から無数の夥しい手裏剣状の何かが飛来してきたのだ。

それは一撃の元にウィングダムの腕を切り裂き、武器を断ち、足を切断し、機体をバラバラにしてしまった。

スクランダーに内臓されている武器【サザンクロスナイフ】である。この一撃により更に多くのウィングダムが蹴散らされていく。

最早先は空を埋め尽くす程あつたウィンダム軍勢が数える程だけになってしまった。

すると、スクランダーが突如として海面に向かって突き進んでいった。

その光景に疑問を感じた兵士達。

だが、その直後彼等に迫ってきたのは大いなる恐怖であつた。

海面を突き破つて現れたのはスクランダーとドッキングして飛行出来るようになったマジンガーZであつた。

同じ土俵に立つた事になつたがウィンダムからしたらとんでもない話である。

とても適わない相手である。

海面に引きずり込まれたらそのまま力任せに装甲を引き千切るあのパワー。

そして多彩な武器。

正しく魔神そのものであつた。

そのマジンガーがウィンダムを睨み付けている。

「う、うわああ！死ね、死ねええ

」

恐怖に涙を流した兵士達が一斉にライフルを連射する。

その内の何発かはZに命中する。

だが、その閃光はZの装甲を貫通する事はなく寧ろ弾かれてあらぬ方向へと飛んでいく。

そのZはと言うと口から猛烈な突風を放つてウィンダム達に浴びせた。

だが、これは只の風ではなかつた。

その証拠にウィンダムの装甲が瞬く間に腐食していくのだ。

強力な酸を含んだ風を放つ銀色の風。

その名は【ルストハリケーン】。

この風を放つた後、其処にはぺんぺん草一本生えないと言われている

る。

\*\*\*

「やれやれ、どうやら俺達はとんでもない化け物を相手にしちまってるみたいだな」

ネオは目の前にたたずむマジンガーZを見て悪態をついた。  
正直言って化け物であった。

MSどころか、奪ったガンダムでも勝てるかどうか怪しい。

それほどまでにマジンガーは圧倒的だったのだ。

多彩な武器にMSを引き千切るパワー。

そして空母を投げ飛ばす怪力とどれもが従来のMSを遙かに凌駕していた。

嫌、そもそもマジンガーにMSと言う単語事態当てはまらないのだ。  
あれはMSなどではない、

ロボット、いや、<sup>スーパー</sup>超ロボットである。

『ネオ大佐！これよりザムザザーを出撃させます！今の内に後退を  
ザムザザー・・・確か連合が機械獣を元に開発したMA<sup>モビルアーマー</sup>って言う  
てたな。確かに外見は機械獣を思わせるが・・・本当に勝てるの？  
それで』

『問題ありません！ザムザザーはロゴスとの協力の元機械獣の性能

を有しております。並みのMSでは太刀打ちできないでしょう』

別の艦に搭乗していた艦長が自信満々に応える。

それを聞いたネオもこれ以上無駄に戦力の浪費は避けたいと思えた。ならばそれに乗るのも一向である。

「分かった。俺達は下がる。後は頼むぞ」

『お任せを！』

ネオはモニターに映る鉄仮面に敬礼をして艦を反転させる。

(ま、あれでマジンガーを落とせるとは思ってないが・・・少なくとも二度とあいつとは戦いたくないな)

ネオは心の底で本気でそう思っていた。

以前宇宙でも戦った事があったが正に化け物とも言える代物であった。

全身にどれだけの武器を内臓しているのか！？と疑いたくなる光景を實際目の当たりにしたのだ。

それを今思い出しただけでもぞっとする思いがする。

気のせいか、ネオの額にはうっすらと冷や汗が流れていた。

\*\*\*

「ネオ大佐の許しが出た！これよりザムザザーを発進させる！」

艦長が命じる。

すると母艦から一体の巨大なMAが現れた。

「何だ？あの馬鹿でかい蟹みてえなのは？」

甲児はザムザザーを一瞥してそう呟いた。

そのザムザザーはまっすぐ甲児のマジンガーに向かってきていた。

「へ、俺に名指しで喧嘩売る気か？上等じゃねえか！その喧嘩買ってやるよ！」

甲児が身構える。

だが、その後方にミネルバが陣取る。

「聞こえるか？甲児」

「ん？あんたは・・・確かアサーさん？」

「アサーだよ！」

どうやら甲児はアサーとは余り面識がないのかいきなり名前を間違えたようである。

それにはアサーが少し涙目になりながら叫ぶ。

だが、軽く咳払いをして甲児を見る。

「今からタンホイザーを発射するから其処から退いてくれ」

「あいよ！一発どでかいの頼むぜ！」

甲児が親指を立ててそう言い、直ちに斜線上から退いた。

それと同時に既に発射体制に入っていたタンホイザーが放たれる。

極太の陽電子砲がザムザザーに向けて放たれていく。だが、それに対しザムザザーは何と上面を向けて其処に薄い光の壁を作り出したのだ。

その壁はタンホイザーを弾き無効化してしまった。

「な、タンホイザーを……」

「は、弾き返したあ！」

アーサーは勿論タリアも目の前の光景には驚かされる。

何しろミネルバの必殺武器でもあるタンホイザーを食らってもまだ健在なのだから。

「おい、何だよあの光の壁みたいなの？」

それには甲児も驚かされた。

すると、上空で戦闘中のシンから通信が入る。

「聞こえるか甲児！それは陽電子リフレクターって言って殆どの攻撃を弾き返されるぞ」

「へえ、つまりあれはバリアの一種なんだろう？」

甲児が納得したかの様に呟く。

それを聞いたシンの中でまさか……と言う思いが浮かんだ。

「おい、まさかお前……」

「へっ！バリアってんなら対処は簡単だぜ！そんなのは力任せにぶち破れが良いだけじゃねえか！」

「あ、そう言う結論になるのね……お前は」

甲児のその単純な発想にシンはあきれ果てた。

そして再びZがザムザザーと相對する。

「見たか！我が軍の新兵器の実力を！この陽電子リフレクターがあればマジンガーの武器も効かんぞ！」

「へっ！言ってくれるじゃねえか！それが本当なら試してやるよ」

甲児がそう言つてマジンガーの右拳を硬く握り締める。

するとその腕を天空高く突き上げる。

何をするんだ？とばかりにザムザザーのパイロット達は見る。

すると、マジンガーの腕が突如として回転しだしたのだ。

その速度は徐々に、だが瞬間に速く回転しだし、やがて腕が何本もあるかの様に見え始めたのだ。

「これを食らいやがれ！大車輪ロケットペアアンチ！」

超高速に回転させた腕をそのままザムザザー目掛けて飛ばす。

咄嗟にザムザザーは上面を向けてリフレクターを展開させる。

薄い光の壁が放たれた豪腕とぶつかりあう。

最初は火花を舞い散らすだけでやがて弾き返されるだろうと高をくくっていた。

だが、そのリフレクターに徐々に亀裂が入りだしたのだ。

ビキビキと音を立てて亀裂が入っていくリフレクター。

そして、音を立ててそれは粉々に砕け散ってしまったのだ。

「ば、馬鹿な・・・我等の新兵器がこうも呆気なく・・・」

「これでバリアはねえ！勝負だ蟹野郎！」

「舐めるな！パワーでザムザザーに勝てるものか！」

そう言つてザムザザーの両腕のヒートクローを展開させる。

マジンガーの腕とザムザザーのクローが互いにぶつかりあいプロレ

スの組み合わせ状態になる。

「俺は蟹のハサミが一番大好きなんだ！まずはハサミを頂くぜえ！」  
甲児が意味不明な叫びをあげながらいきなり掴んでいた腕を思いつきり引つ張る。

するとザムザザーのクローごと腕が脆くも引き千切られてしまったのだ。  
千切った腕を投げ捨てもう片方の腕も同様に引き千切る。

「ば、馬鹿な・・・我等のザムザザーがパワーで負けると言うのか？」

「結局は機械獣のパチモンじゃねえか！そんなんでマジンガーに勝とうなんざ100億年はええ！」

マジンガーの豪腕がザムザザーの正面に殴りつける。

その腕がめり込み内部にまで到達する。

そしてもう片方の手でザムザザーを掴み挙げて頭上に持ち上げる。

「締めは蟹味噌だあ！」

そう叫び、ザムザザーを頭上で真つ二つに引き裂いてしまった。

その直後、凄まじい爆発が起こり連合軍の新兵器【蟹】<sup>ザムザザー</sup>はマジンガーZの手により美味しく調理されてしまったのであった。

「おのれいあしゆらの阿呆め、もっとましな奴を連れてこんか！」

ブロッケンが愚痴る。

既に海面の戦力はほぼ空母だけになっており、それをマジンガーが次々と鯖折の様に真つ二つにへし折って沈めていく。

「ええい！こうなればMSだけでも蹴散らしてくれる！機械獣を全て投入せよ！何としてもあの五月蠅い蠅を叩き落せ！」

ブロッケンが命じ搭載していた機械獣を全て戦場に投入してきた。その総数はざつと10体。

1体でもMS20機が必要な強さを持つといわれている機械獣。それが今10体も目の前に来ている。

だが、不思議とそれを見ていたレイ達の顔に絶望の色はなかった。それはシンのお陰である。

MSでも機械獣に対抗出来る。

そう結論付けてくれたお陰で三人とも闘える気持ちが出来たのだ。

「ルナ、マユ！フォーメーションを組んで1体ずつ機械獣を片付けるぞ」

「分かったわ！赤服の実力を見せてやろうじゃないの！」

「任せます。レイ」

レイの提案にルナとマユは乗り、それぞれ3機で1体の機械獣を囲んで倒すと言う作戦に出た。

「ルナ、良い機会だ。この際搭載された新武装の威力を試してみるぞ」

「良いわよ。確かレイには【ミサイルマシンガン】で、私には【フロストビーム砲】だっけ？」

ルナとレイがそれぞれ持っていた武器を見る。

実はスクランダーを作った際に二人が更に余った余剰パーツを使い新しい武器を完成させたのだ。

「さて、どれ程の威力か・・・」

半信半疑のまま、レイがトリガーを引く。

すると銃口から無数の弾丸が放たれた。

それも只の弾丸ではない。

先端がドリルのようならせん状になった凶悪な弾丸である。

その弾丸は瞬く間に機械獣の装甲を貫通し蜂の巣にしまった。

そしてそのまま爆発してしまった機械獣を見てレイは思わず呆然となった。

「・・・いや、どんだけ恐ろしい物作ったんだあの二人・・・」

余りの光景に思わずキャラが崩壊しかけたレイであったりする。

「んじゃ、今度は私の番ね」

そう言っつてルナがフロストビーム砲のトリガーを引く。

すると銃口から放たれたのは蒼白い極太の冷凍砲であった。

それは斜線上に居た機械獣を全て飲み込んで行き、後から現れたのは氷の塊となった機械獣であった。

その機械獣は数秒後にはバラバラに砕け散り海の中へと消えて行っ

た。

それを見たルナのテンションが更に上がる。

「凄い！何コレ凄い威力じゃない。あの二人案外天才なんじゃないのお？」

フロストビーム砲を見て思わずそうはしゃぎ立てるルナ。

そんな中、マユは少し面白くない顔をしながら闘っていた。何故ならインパルスには新武装はないのだ。

するとそんなインパルスの横にトランスガンダムが並び立つ。

「マユ、一気に片付けるから手を貸せ」

「え？・・・はい！分かりました」

シンの要求にマユは応じ、互いに空を舞いながら機械獣と相対する。目の前に迫る2機に機械獣が咆哮する。

「攻撃の隙を与えるな！一気に畳み掛ける！」

「は、はい！」

シンの声に反応し返事をする。

トランスはまずライフルを発射し機械獣を怯ませる。

その隙にインパルスが機械獣の頭部目掛けてゼロ距離でライフルを打ち抜いた。

それには溜まらず機械獣の頭部が崩壊する。

どうやら全ての機能をつかさどっていたのは頭部だったらしくそのまま動きを止める機械獣。

その機械獣をシンのトランスが近づき蹴り落とす。

すかさず次の機械獣が迫ってきた。

それに対しトランスがマウントしてあったトマホークを抜き放ち一

閃よろしく機械獣の両腕を切断する。

その機械獣の胸部にインパルスのサーベルが突き刺さる。

「てええ　い！」

刺さったサーベルを振り回し機械獣を振り落とす。

其処へトドメとばかりに2機同時にライフルを放つ。

それを食らった機械獣は爆発し藻屑となった。

「ば、馬鹿な・・・10機もあつた機械獣がたかが4機のMS如きに・・・お、おのれい！こうなれば・・・」

ブロッケンがうなるように叫ぶ。

それに思わず4人は身構えた。

だが、その途端グールは踵を返し悠々と離れていく。

「覚えてろよ～～」

「な・・・」

突如逃げ腰になったブロッケンにシンを除く3人がずつこける。

そしてこう叫んだ。

「なんじゃそりゃああ　　！」

まあ、ともかくにもオーブ領海外での戦闘はシンの新型MS【トランスガンダム】と甲児の【マジンガーZ】の活躍によりほぼ確実な勝利に終わったのであった。

第19話 怪奇！海中に現れたMSさらい、海の底には死が待っていた！（後書

） 舞台裏にて ）」

ネオ

「さて、そろそろ仮面の交換もせんと蒸れるからなあ・・・」

アウル

「チャンス！ネオの素顔を写真にい！」

ネオ

「おおっとそうはさせるかあ！」

アウル

「な、なにに！別の仮面だとお！しかもそれはあのタ シード仮面の奴じゃねえか！」

ネオ

「フッフッフツ、そう簡単にお茶の間の皆様に俺の素顔を見せる訳にはいかないんでなあ」

アウル

「畜生！覚えてろお！次こそその素顔を拝んでやるからなあ！」

ネオ

「ハッハッハ！頑張れ若者よお」

ステイング

「結構俺等暇なんだな」

## 第20話 舞い降りる脅威（前書き）

オーブ領海外で連合艦隊と機械獣艦隊の混合艦隊に対しシンの新リサイクル型ガンダムと甲児のマジンガーZの活躍により壊滅に追い込む事が出来た。

特に連合はマジンガーZの強さを身を持って知る結果となってしまうたのは事実である。

だが、二人は知らなかった。

彼等にもうじき迫る脅威に・・・

## 第20話 舞い降りる脅威

連合と機械獣の混合艦隊をシンの新型ガンダムリサイクルと甲児のマジンガーZの活躍によりほぼ壊滅状態に追い込む事が出来た。

しかし、その中に居た筈のネオ達の乗っていた軍艦は尻尾を巻いて一足先に逃げてしまったので結局奪われたガンダムを取り戻す事が出来なかったのだが・・・

それでもミネルバ内の格納庫に辿り着くなり甲児とシンは忽ちクルー全員にもみくちやにされていた。

「お、おいお前等・・・少しは落ち着けて！」

「へっへえ、どうでい俺の活躍はあ！俺とマジンガーに掛かっちゃあMSや軍艦なんざあ敵じゃねえぜい！」

シンは多少くすぐったい顔になりながらも満更でもない顔をしながら頭を掻き、甲児は大満足な顔をしていた。

皆が集まるのも無理はない。

軍艦6隻、飛行要塞1隻、MS約40機、機械獣10体。

それらの大艦隊を何とたったの2体のMS・・・正しくは1体のスパーロボットの手によりほぼ壊滅させてしまったのだ。

それはかなりの大戦果である。

本来ならとても出来ない事なのである。

言うなればミネルバクルー全員にとってはこの二人は超エース級にも見えたのだ。

「しっかし改めてマジンガーZの強さが分かった気がするよ」

「ああ、まさか艦隊をたった1体で蹴散らしちまうなんてさあ」

ヴィーノとヨウランの二人が甲児を見てそう呟いた。

「だろだろお！戦争に協力するのはどうにも府に落ちねえけどよお、ダチの頼みとあらばドーンと俺に任せておけってんだよ！」

甲児が胸をドンと叩いて見せる。

だが、其処で咽ったのはお約束なのだが。

「マジンガーも凄かったけど、あの新型ガンダムリサイクルに乗って闘ったシンも凄かったわよねえ」

「その言い方は止めてくれよ。ちゃんとトランスガンダムって名前があるんだからよお。あいつには」

ルナの呟きにシンが若干嫌そうに言う。

まあ確かに嫌だろう。

新型なのにリサイクルなどと言われるのだから。  
しかしリサイクルなのは変わりない事である。

何しろあれの元になったのは先の戦いで大破したザクと鹵獲した機械獣の残骸、更にはオーブから頂いた主力MSであるムラサメの混合型なのだから。

だが、リサイクルといってもその性能は馬鹿には出来ない物がある。搭載された武装の数々は機械獣に有効であり、更にシンの腕前もあってか一騎当千の強さを見せ付けていた。

下手したら今の彼なら一人でもフロントムペインを叩きのめせそうな気がしてきた。

「大戦果でしたね」

戦果を挙げたシンを見てマユが労いの言葉を掛ける。

それを聞いたシンが「そうか？」と言った顔をしてみせる。

「なあに、大した戦いじゃなかったけどな。何しろ相手は機械獣だし」

「それでも、私達はあの機械獣に手を焼いていたんですよ。それを貴方は何の苦労もなく倒せた。本当に凄いですね・・・貴方は」「何だ？ヤキモチって奴か？」

マユに向かい含みのある笑顔で見てそう言う。

その笑顔がマユには何処か悔しかったのかムツとなる。幾ら赤服を身に纏おうとも中身は余り変わってないようである。すぐにムキになっているのだ。

「べ、別にそんなんじゃないですよ！只素直に祝ってあげただけじゃないですか！」

「へいへい、有難うなあ」

何時になく自分をからかうような態度にマユが更にムツとなる。

その変化がシンにはとても楽しく見えた。

だが、余りからかいすぎるのも考えようと言える物である。

「でもシンって奴の戦いぶりは凄かったわよねえ」

「ああ、これからは貴様もいざと言う時の戦力として当てにさせて貰うぞ」

「あれ？まだ信用されてない訳？俺」

レイの素っ気無い態度にシンが思わずずっとこける。

そんなシンを見てレイが当然だと言わんばかりの顔をする。

「当然だろう。貴様等にはまだスパイ容疑が掛かっている事を忘れた訳ではあるまい」

「わ、忘れた訳ではありません・・・」

そうは言うのが正直シンの脳内にはスッキリ忘れ去っていたのであった。

そして、レイは対照的にすっかり覚えていたようである。

「いざとなつたら貴様を盾にさせて貰う。それくらいの気構えはして貰わんな」

「か、肩身が狭い・・・」

シンが涙を流しながらそう呟いた。

元の世界では肩で風切るエースだったのだが、この世界ではスパイ容疑を掛けられてしまった上、仲間達にはいざとなつたら盾になれとの発言である。

肩身が狭くなるのも無理はない。

しかも今のシンは一般兵を表す緑服を身に纏っている状態なのである。

赤服とはとてもかけ離れた位置にある。

本来なら妹のマユやレイヤルナ達とこつとも親しく話す事事態有り得ない事なのである。

「どうしたんだ？シン」

「はぁ・・・お前は気楽で良いよなぁ・・・つたく」

深く項垂れるシンの横では甲児が相変わらず気楽そうな顔でシンを見ていた。

そんな甲児の顔がシンには溜まらなく羨ましく感じる事は当然の事であり・・・

『やれやれ・・・折角勝利のカードを提供してあげたのに・・・こんな無様な結果だけになってしまっうなんてね』

「な、何を言うか！戦いはまだ始まったばかりではないか！これからなのだよこれから！」

ロード・ジブリールの屋敷内のモニタールームの一つに黒いシャドウが掛かった青年がジブリールに厳しい言葉を投げかける。それに対しジブリールが苦い顔をして返答する。

『ま、良いや。今度は僕も出るよ。折角だし力を手にした彼の力を見てみたいしね』

「お好きにどうぞ」

簡単な会話を終えると、青年の映っていたモニターは消え去り再び漆黒のモニターになる。

それを見た後、ジブリールは棚の上に飾ってあったウイスキーの瓶やグラスなどを地面に叩きつける。

「くそお！なんなのだ、あのMSにマジンガーと呼ばれる謎のロボットは・・・機械獣をいとも簡単に倒してしまうなんて・・・」

マジンガーとトランスガンダムの戦いはジブリールにとっても予想外な事であった。

本来ならあの海峡で連合艦隊と機械獣軍団の共同攻撃で轟沈させる

予定であつたのである。

しかし、トランスガンダムとマジンガーZの予想外の活躍の為に艦隊は全滅。

青年は呆れ果ててしまふ始末であつた。

「おのれ・・・おのれえ・・・これ以上奴の好きにさせて溜まる物か！」

\*\*\*

「甲児、少し良いか？」

「んあ？何だよ」

部屋に戻ってきたシンと甲児は其処で話をしていた。

「今度の戦い・・・多分あの3機のGが出てくる」

「ああ、あれか。今度こそ叩き落してやるぜ！」

「その事なんだ」

シンが話したかったのは正にそれであつた。

それを聞いた甲児が真剣な面持ちでシンの顔を見る。

「何が言いたいんだ？」

「甲児、もし今度あいつらと戦う事になった時・・・俺は絶対あの

パイロット達を助けたいんだ」

「シン・・・あいつらはお前にとって大切な奴らなのか？」

「助けたいんだ・・・あれに乗ってるのは、一部の勝手な奴らのせいで生み出された悲しい存在なんだ・・・それが此処では生きている・・・俺は、あいつらを助けたい！でも、俺一人じゃ出来ない事なんだ。だから・・・手を貸してくれ、甲児！」

シンが何時になく真剣な顔になる。

それを真剣な顔で同じく聞いていた甲児であったが、その後パツと顔が明るくなる。

「へっ、お安い御用だぜ！この兜甲児様にど〜んと任せておけっただんだ！」

「甲児・・・へっ、お前が味方で本当に頼もしいよ」

「よせやい！俺たちは仲間じゃなくて親友ダチだろう？」

「ああ、そうだったな」

そう言うとシンの顔にも笑顔が浮かんだ。

そして二人はお互いの腕を軽く小突け合う。

「頼むぜ、ダチ公」

「任せろ、ダチ公」

笑顔で二人が言う。

その時であった。

突如として艦内に警報が鳴り響く。

「この警報・・・」

「来たか！」

「なあネオ、本気でまたあれとやりあうつもりなのか？」

カオスに乗り込んでいたステイングがネオにそう尋ねた。その問いにネオは少しだが苦い表情を浮かべる。

「そうだけど、何か不満でもあるのか？」

「良いや、あの時はいきなりで対応できなかったただけだ。今度こそはあのマジンガーって奴を叩き落す！」

「俺もだ。腕飛ばすなんてあんなの反則だぜ！絶対あの時腕切り落とせたと思ってたつてのによお！」

ステイングと同様にアウルも怒り心頭であった。

原因は初戦闘のアーモリーワンの事である。

マジンガーの腕目掛けて鎌を振り下ろし切断したかに思えた腕がある。その事が宙を飛び回りこちらに向かってきたのだ。

正直言つて肝を冷やした瞬間である。

ドラグーンとは違いビームは放たない物の一撃でコロニーの外壁をぶち抜いたその威力は馬鹿に出来ない。

それを思い出したアウルが一瞬身震いした。

「へ、今度は海中があるんだ。あのマジンガーにだって海ん中じゃ

「アビスに勝てる筈はねえぜ！」

「アウルが自信を持ってそう言う。」

「だが、その考えが後にとんでもない事を招く事となるのだが。」

「ネオ、何でステラは一緒じゃないの？」

「しょうがねえじゃん。ガイアって飛べねえし、泳げねえし」

「疑問を投げかけたステラにアウルが答える。」

「その通りなのだ。」

「ステラの乗るガイアは変形すると獣型になり陸上を高速で移動する事が出来るのだ。」

「しかし反面空中戦闘や海中戦闘が出来ないと言うネックがある。」

「その為今回の戦闘では後方支援という形となってしまったのである。」

「俺もステラと一緒にじゃないのは寂しいよ。だけど俺たちが居ない間しっかり守ってくれよ」

「うん！」

「ネオの言葉にステラは元気良く答える。」

「それから間もなく、各機が発進する。」

「カオスと紫色のウィンダムは空中へ舞い上がり、アビスは変形し海中に消える。」

「そしてガイアは艦橋に立ち迎撃姿勢をとった。」

「そしてそれと向かい合うように陣取っていたミネルバからもMSが発進された。」

「シンのトランスガンダムとマユのインパルスは空中へ飛び、ルナとレイのザクは艦橋に立つ。」

「そして甲児のマジンガーZは何と海中へもぐったのだ。」

「馬鹿じゃねえの！アビスの独壇場へわざわざもぐってくるなんてよお！」

飛んで火に入る夏の虫とはこの事である。

そう脳内で思いながらアビスが先手必勝とばかりに一斉にビーム砲を放つ。

しかし、その砲撃をZは軽々と避ける。

しかも潜行速度が魚雷並に速いのだ。

「な、何だ？マジンガーも泳げるってのか？」

「当たり前だろう！マジンガーZに死角なんてねえぜ！」

甲児が叫び、すかさずアビスとの距離を詰めると顔面に鉄拳を叩き込んだ。

アビスの首が後ろ向きになり装甲が凹みだす。

PS装甲を纏っていてもこの威力である。

もし纏っていなかったらと思うとぞつとする。

「ば、馬鹿にするんじゃないやねえ！海中で負けちまったら面子が立たねえんだよ！」

狭いコクピット内にアウル of 怒声が響く。

機体を変形させて海中を高速で移動しつつZを攻撃する。

しかしその攻撃もZを僅かに怯ませる程度でしかない。

余り効き目があるとは言い難い。

「いてて、にやろう！お返しでい！」

お返しとばかりにZが両肘からドリルミサイルを放つ。

それをアビスが両肩のパーツを使って防ごうとする。

本来実弾兵器はPS装甲で防げるはずであった。だが、その放たれたミサイルはアビスの両肩の装甲を貫通し穴だらけにしてしまう。それにアウルは驚愕した。一体全体どうなっているんだよ！アウルの脳裏にその言葉が浮かんだ。あのマジンガーはあらゆる面でこちらの常識を無視している。実弾兵器でありながらこちらの装甲を紙の用に貫く武器。そんな武器の数々が全身に内臓されているのだ。

「野郎！舐めるんじゃない！」

アビスが両肩のパーツを外して斧を手に取り、マジンガーZに切り掛かる。

頭上に斧を振り上げてまっすぐにZの頭上目掛けて振り下ろした。狙いはバツチリであった。

このまま行けばマジンガーの最も装甲の薄いコクピットを破壊出来る。

だが、其処で誤算が生じた。

それは、アビスの振り下ろした斧をマジンガーが両手で白刃取りの要領で掴んでしまった事である。

ぴったりとZの両手に挟まれた斧はピクリとも動かない。

必死に引き剥がそうとするも所詮はMSのパワー！

マジンガーのパワーに対抗する事など無駄の一言であった。

「うおおりゃあー！」

掴んだ斧をそのまま横薙ぎに振り回す。

とてつもないGがコクピットに襲い掛かってきた。

思わずアウルが掴んでいた操縦桿を離してしまった。

その為アビスもまた斧を手放してしまう。  
そのまま海面に向かってアビスは激突してしまう。

「さあて、相棒<sup>シン</sup>に頼まれてるからなあ。生きたまま連れて帰らないとなあ」

動かないアビスに向かいZがゆっくりと向かっていく。  
どうやら先の一撃が相当効いたのかパイロットは目を回しているのだらう。

そんなアビスに目掛けて腕をボキボキ鳴らしながらZが向かってきた。

上空ではカオスとネオ専用ウィンドラムがシンのトランスガンダムと対面していた。

「おいネオよお、何であんなリサイクルガンダム相手に俺たち二人で戦わねえとなんねえんだ？」

「お前も先の戦闘見ただらう？あいつはたった1機で機械獣を3機も蹴散らした化け物だぞ。本当ならアウルやステラが居たとしても勝てるかどうか微妙な相手だ」

「つくづく化け物だなあ・・・あいつは」

ネオの言葉にスティングは正直な気持ちを述べる。  
機械獣の強さは彼等も理解していた。

MSの数段上の性能を持つ巨大な機械獣。

それらをリサイクルされたとは言え新型ガンダム1機で倒したのは驚きである。

そのMSの性能も去ることながらやはり最終的にはパイロットの腕前によるものもありそうである。

「何にせよ、ココラで白黒はつきりつけないと俺達の首も危ない。出来れば1機でも落とすぞ」

「了解！ やってやるうじゃん」

ネオの言葉にスティングは頷き2機がトランスガンダムに迫ってきた。

「さて、新型機で初のMS戦・・・ま、機械獣と比べたら簡単かあ」

シンが呟き機体をMS形態に変形させる。

外見はムラサメに良く似ている。

だが僅かに武装が異なっている上に性能はムラサメより数段は上である。

だが、幾ら性能が向上したとは言え所詮は量産型を改良した機体。

果たしてセカンドシリーズの機体に何処までやりあえるか。

シンの中には不思議と不安よりも楽しみが浮かんでいた。

自身の腕前の確認と、この機体の性能の確認。

以前にはなかった落ち着きが今のシンには備わっている。

それを認識したシンはちよっぴり自分に驚いた。

「ボサツとしやがって！ 叩き落してやるよお！」

スティングが叫びカオスの最初の攻撃が放たれる。

だが、その一撃もトランスガンダムは紙一重でかわしていく。

舌打ちし、更に2撃、3撃と攻撃を放っていく。

だが、それもすべてかわされていく。

しかも紙一重で・・・

「くそお！後ちよつとで直撃だつてのに！何で当たんねんだよ！」  
ステイングが愚痴る。

彼の目から見ればかなりギリギリで避けているようにも見えている。  
だが、実はシン自身がわざとギリギリでかわしているのだ。

「ムラサメをベースにした割には良い反応するなあ。如何にも俺好みに仕上がってやがる。良い仕事してくれたんだな。こつちのあいっら」

シンが笑みを浮かべる。

だが、そんな彼の耳に危険のシグナルが鳴り響く。

視線を動かすと、別方向に居たウィンダムがサーベルを抜き放ちこちらに切り掛かって来ていた。

以前の自分であつたら恐らく対応出来ずに食らっていただろう。  
だが、今は違う。

サーベルがこちらに当たるよりも少し前に持っていた腕に蹴りを当ててサーベルを弾き飛ばす。

「ちいっ！よくやる！」

ネオが愚痴りながら距離を開けてライフルを放つ。

しかし、やはりそれもトランスガンダムは同じ様に紙一重でかわしていく。

「しっかし、以前の俺つてつくづく猪突猛進な闘い方をしてたんだなあ。世界が変わったとは言えこいつらの闘い方が手に取る様に分かるってのも案外不気味だな・・・さて」

シンが何処か含みのある笑みを浮かべるとかわしざまに一気にカオスの目の前に接近する。

それにステイングは一瞬驚き対応に遅れる。

その隙に両腰に備わっていたトマホークを両手に取り下段から一気に上段に切り上げる。

その一撃は一閃であった。

一瞬の内にカオスの両腕が切断されてしまった。

それにステイングは苦い顔をする。

距離を置きガンポットを射出し迎撃しようとするもそのガンポット目掛けて先ほど手に持っていたトマホーク2本を投げつける。

それを食らったガンポットが真つ二つに切り裂かれてしまう。

一気にカオスがダルマ状態にされてしまう。

「う、嘘だろう・・・こいつ何て強さだよ」

「ステイング！戻れ！・・・ったく、マジンガーと良いこいつと良い、あの戦艦には化け物しか乗ってないのかねえ」

ネオが愚痴りながらライフルを放ちながらトランスガンダムに向かっていく。

ファントムペインの隊長である為かやはりその腕前はかなりの物である。

しかし、今のシンにしてみれば手に取る様に見える。

「悪いが、見え見えだぜえ」

反撃にと電撃を含んだチェーンウィップを投げつける。

しかし其処はエース。

投げつけられたウィップをサーベルで切り裂く。

だが、切り裂かれたウィップを振るいある方向へ飛ばす。

それは先ほどカオスのガンポットを切り裂いたトマホークのある箇

所であった。

トマホークの柄の部分にウィップを絡ませて鎖鎌の要領で振り回しウィングダム目掛けて放つ。

その一撃は流石に予想外であったのか対応に遅れてしまう。

「ちいつ、油断したか」

先の一撃で片腕を切り裂かれてしまう。

しかもライフルを持っていた腕の為一気に形勢は不利となってしまう。

「さて、慣らし運転はこんなもんで良いか」

カオス、ウィングダムの2機を倒したシンは満足げにそう呟く。

\*\*\*

マユの乗るインパルス、そしてルナとレイの乗る2機のザクはミネルバ周囲に群がってくる敵MSの迎撃を行っていた。

今回からザクもスクランダーで空中戦闘が行える様になった為以前より闘いやすくなっている。

「うっ、わっ！下からも攻撃が来てる！」

「油断したら駄目よルナ！空中戦ってのは下からも攻撃が来るんだ

から」

マユの言葉にルナは頷く。

年は下でも空中戦はマユの方が長いのだ。

それに対してこちらはまだ2度目の空中戦である。

しかし同じく2度目であつてもレイは慣れたように動き敵を撃破していく。

「それにしても、何で甲児やシンが大物と戦つてるのに私達は迎撃なの？」

「ぼやくなよルナ。それに油断してるともし何かあつても対応出来ない事になるぞ」

「はいはい、レイは何時も冷静ですねえ」

レイの言葉にルナは頷くも少し不満そうだ。

そんなルナを見てマユは少し呆れるような苦笑いを浮かべるような顔をしながらも周囲の敵を片付けていく。

敵の殆どはウインダムの編隊なのでその数が徐々に減り、敵方の旗色が悪くなつてきていた。

このまま行けば案外すんなり勝てそうな気がしてきた。

・・・正にその時であつた。

「え？上空に機影？」

突如三人のコクピットに警告音が鳴り響く。

レーダーを見ると丁度真上、即ち上空から向かってきていたのだ。

それに呼応するかのように3機が上空を見る。

其処には1機のMSが居た。

だが、その姿を見れたのは一瞬であつた。

その刹那、上空からやってきた1機のMSが両手にビームサーベル

を抜き放ちレイとルナのザクの片腕を切り払う。

「うええ！何、何なのお！」

「こいつ・・・早い！」

切られたルナとレイが突然現れた不届き者を見る。

其処に居たのは背中に蒼い羽を生やした「自由」の名を持つガンダムであった。

「フ・・・フリーダム！」

マユが目の前に突如として現れたガンダムを見て呟く。

かつて前に起こった連合とザフトとの戦いを終結に導いた英雄的MSである。

それが今マユの前に敵として現れたのだ。

「くっ！」

覚悟を決めたマユがライフルを手に持ち放つ。

しかし当然の如くフリーダムはそれを尽くかわす。

そしてかわしざまにインパルスのライフルをサーベルで切り裂いてしまった。

やはり強い。

フリーダムの強さは化け物級であった。

だが、それでも引き下がる訳にはいかない。

今度はサーベルを抜きフリーダム目掛けて切りつける。

それに対しフリーダムはサーベルを抜き互いにぶつかり合う。

激しい火花が舞い散り鏢迫り合いになる。

しかし何時までも鏢迫り合いはしていなかった。

サーベル同士でぶつかっている最中にインパルスの胴体目掛けてフ

リーダーダムが蹴りを当てる。

「あぐつ！」

声を上げて後方に吹き飛ばインパルス。

錐揉み状に飛んでいくインパルスに目掛けてフリーダムが両手にサ  
ーベルを抜き一気に迫る。

だが、其処へ横方向から数発のビームが放たれる。  
放ったのはウィンダムであった。

するとフリーダムはインパルスから突如攻撃をしてきたウィンダム  
に狙いを変えるとその部隊に向かって突っ込んでいく。

「ひっ！」

ウィンダムのパイロットは余りのスピードに恐怖する。

それから間もなくであった。

フリーダムが一気にウィンダムの部隊に躍り出ると両手に持ったサ  
ーベルを巧みに扱いウィンダムの部隊を次々と切断していく。

しかも、その一撃の全てがウィンダムのコクピットに直撃していた  
のだ。

「ば、馬鹿な！フリーダムは不殺を掲げていたんじゃないのか？」

ウィンダムのパイロット達がパニックに陥る。

其処へ付け入るかの様に更にフリーダムがウィンダムを蹴散らして  
いく。

正に鬼神の如き戦いぶりであった。

その光景を見たマユが青ざめる。

今のフリーダムは以前の戦いの時とは違いまるで戦いを楽しむ様に  
ウィンダム部隊を蹴散らしていたのだ。

数が少なくなっていたとは言えまだ数十機は居たであろうウィンダム部隊がフリーダム1機の為に全滅状態にまで追い込まれてしまっていたのだ。

そして、次の標的としてインパルスを見る。

そのガンダムの顔からも見える様に、その機体からは凄まじいまでの憎悪の念を感じ取れた。

「あ、あれが・・・フリーダム・・・怖い・・・」

ボソリと、そうマユの口からその言葉が漏れた。

これが正直の言葉である。

目の前で一騎当千の如き戦いぶりでウィンダム部隊を全滅に追いやり、今度は自身に狙いをつける。

嫌、今ではもう既に目の前に来ていた。

咄嗟にサーベルを振るおうとした時には既に遅く、インパルスの両腕が瞬く間に切り裂かれていく。

攻撃する手段を失ったインパルスに対しフリーダムが一瞬だが間を置く。

そして、ゆつくりとサーベルを上段に構えて、そのまま一気に振り下ろした。

その間の一連の行動がマユにはスローモーションに見えていた。

ああ、自分は此処で死ぬのだろう。

そう覚悟したマユは目を瞑り知る筈もない念仏を適当に唱えようと思っただ。

だが、そんな時であった。

海面から突如2本の腕が飛び出してきた。

その腕がフリーダム目掛けて飛んでいく。

咄嗟にそれをかわす。

だが、今度は後方からトランスガンダムがビームを放つ。

突然の横槍を受けたフリーダムはインパルス撃墜を断念し距離を離

す。

その間にトランスガンダムがインパルスガンダムに接触する。

「大丈夫か？マユ！」

「おに・・・シンさん！」

其処に映ったのは一般兵である緑服を着たシンであった。

先ほどカオスとネオ専用ウイングダムを圧倒的力の差で叩き伏せたシンが戻ってきたのだ。

そして、海面から現れたのは何時の間にかミネルバから射出されたスクランダーとドッキングしたマジンガーZであった。

「いやあ、山勘で撃つたのが当たったみたいだなあ」

「や、山勘って・・・もしあれで私に当たったらどうするつもりだったんですか？」

甲児のその発言にマユが驚く。

それに対し甲児は笑顔で手をヒラヒラさせている。どうやらこれが何時も通りの事だったのであるう。だが、甲児の考え方は理解出来ないものがあつた。

「おい甲児・・・もしマユにロケットパンチが当たったら・・・その時はてめえのコクピット目掛けてトマホークを叩きつけてたからなあ！」

「わ、悪い悪い・・・」

シンがこれまで以上に殺気を甲児に向ける。

その殺気を感じ取った甲児が冷や汗を流しながら手を振るってそう言う。

だが、すぐに二人とも平静な顔になりそのまま視線をフリーダムに

向ける。

以前フリーダムを見た事がある二人にとって今日の前に現れたフリーダムに何処か違和感を感じていた。

「しっかし、あのフリーダム・・・以前会った時よりも俄然パワーアップしてないか？」

「嫌、違うな・・・恐らく例の奴だろう。以前ラクスさんが言ってただろう？」

「ああ！」

甲児は以前ラクスから教わった事を思い出す。

と、言う事は今日の前に立つあのフリーダムは間違いなく敵、それもかなりやばい相手だと思われる。

「甲児、今回は二人でやるぞ！下手すると俺達でも勝てない相手かも知れない」

「だな・・・こりや今まで以上に厄介な奴みたいだぜ」

シンの言葉に甲児が頷く。

その時の二人の顔は今まで以上に真剣な顔になって目の前にたたずむフリーダムを見た。

フリーダムは今まで以上に憎悪の念が強まっているのが感じ取れた。恐らく戦いの横槍を入れられた為に機嫌が悪くなったのだろう。

今度は狙いをトランスガンダムとマジンガーZに向ける。

「やるぞ！」

「おつよお！」

シンの言葉を皮切りに甲児が頷き共に目の前のフリーダムに向かっていく。

フリーダムもまた武器を手にトランスガンダムとマジンガーZに向かっ  
ていく。

「うおおおお！」

「おりゃあああ！」

今、トランスガンダムとマジンガーZ対フリーダムガンダムの戦いの火蓋が切って落とされる事となった。

## 第20話 舞い降りる脅威（後書き）

議員

「ジブリール君！これは一体どう言う事なのかね？」

ジブリール

「な、何の事でしょうか？戦いはまだ始まったばかりなのです。まだ計画が失敗した訳ではありませんよ」

議員

「そうではない。何故君には名前があって我等は議員と纏められているのかね？」

ジブリール

「はあ？」

議員

「なまじ原作で顔出してるからってこの扱いは酷すぎるじゃないか！」

議員

「我等にだって名前があるんだ！名前をだせえ！」

議員

「寧ろ出番を増やせえ！」

議員

「いつそレギュラー化しろお！」

ジブリー

「いえ・・・知りませんよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8144q/>

---

機動戦士ガンダムSEED Z

2012年1月4日16時48分発行